

特典で世界を再構成する戦隊 第二部

ボルメテウスさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

多くの戦いを乗り越え、自分の世界を取り戻した介人。

だが、その世界でも新たな危機を迎えようとしている。

立ち上げれ、介人！新たな仲間と共に！！

「結構不安があるけど」

今作は特典で世界を再構成する戦隊の第二部となります。

第一部の方はこちらからどうぞ。

<https://syosetu.org/novel/247779/>

またこちらの方で今作で登場する敵キャラとセンタイギアの能力も募集しております

すので、皆様の応募、お待ちしております。

<https://syosetu.org/?mode=kappo|view&kid=271640&uid=45956>

目次

円満な学園生活にキキカイカイ!?

1

第2話 始まるか!?危機一髪のギャラク

シーパワー!?!銀河の果てまで吹っ飛べ!!

19

とんでも姉妹対決!パトロール&ファイ

ティングファイト!

全力合体!ゼンカイオー!!

地図と宝と欲望

宝と死亡フラグ

5日連続スーパー戦隊最強バトル

目宿命なるレッド

5日連続スーパー戦隊最強バトル 2日

目最強の技術とパワー 108

5日連続スーパー戦隊最強バトル 3日

目恐竜パワー炸裂! 116

5日連続スーパー戦隊最強バトル 4日

目越えるべき祖父の壁 123

5日連続スーパー戦隊最強バトル 5日

目最強兄妹タッグ 138

野望に満ちた如月グランドパーク

146

衝撃に耐えろ 155

暴走と迷宮 170

突入、サーバルーム 181

騒動な海賊	194
海賊な妹	201
立ちましたという声と共に	213
悩みの先に	228
特別編予告	243
全力麻雀対決	247
犬猿の2人	262
特別編 全力!焼き肉ロード!	276
逃走劇の真実	287
焼き肉を阻止された訳	302
ゼンリヨクゼンカイキャノンのパワー	311
その母、強し	323

ついに揃った、ゼンカイジャー!
 燃え尽きろ、その戦い
 333
 346

円満な学園生活にキキカイカイ!?

俺の名前は海城介人、17歳!

今月から転校する事になった文月学園に向かつて、走っている。

少し前までは他の世界で世界を崩壊させようとしていた転生者達と戦う為に、機界戦隊ゼンカイジャーとして戦ってきた。

だけど、それも最後の敵、ハカイザーとの戦いによつて決着が付き、今は元のこの世界で新たな学園生活を送ろうとしている。

「うわあ、遅刻遅刻!!」

そう俺が走っていると、何やらこちらに近づく声が聞こえる。

とりあえず

「面倒くさそうな匂いがするから、全力で回避!」

「ふぎやあ?!」

俺はその場から離れようとしたけど、壁に当たった少女が倒れ込む。

「危機は去った。

という事で、さっさと学校へと向かうとするか」

「ごらあ、待ちやがれ!」

すると、先程の女の子が怒鳴り込んでくる。

「なんだよ、こっちは転校初日だから、遅刻したくないんだが」

「それが美少女に対する謝る言葉ですか!!」

「悪いとは思いますが、初対面の相手に対して謝罪の言葉を述べる義務はない」

「きいー!!腹立つうー!!」

すると少女は地団太を踏む。

まったく、これだから最近の若者は……。

とにかく急いでいるので、無視して立ち去ろうとすると

「待ちなさいよお〜」

背後から追いかけてくる。

しつこい奴だなあ。

しかし、こうなった以上仕方ない。

俺は振り返って言う。

「あくもうわかったよ。悪かった。それで?」

「むっきいいいい!!」

顔を真っ赤にして怒っている。

なんだろう? 怒っていても可愛い子だな。

これが俗にいうツンデレという奴か?

「あんたねえ、仮にも女子にぶつかつといて、一言もないわけえ?」

「ああ、すまない。君みたいな子がタイプじゃないんでね」

「なんだとゴラア!?!」

少女は怒りながら突つかかってくる。

どうやら相当沸点が低いようだ。

「それに、俺はただ避けただけで壁に勝手に勝手にぶつかったのはそつちだろ。

という事で、サラダバー!!」

「待てえええ!!」

そして、また追い掛けてきた。

そうして、俺に追いつこうと、走ってくるが、甘い甘い。

「全力で逃走!!」

「うわっ、なんですか!?!」

普通に人間のレベル超えていますよ、あいつつ!?!」

その光景を見た少女は思わず驚く。

普通の人間が、自分の速度について来られるはずがないからだ。

「おのれ、逃すかあ!!」

だが、少女は諦めず、追ってきた。

しかし追いつく事ができず、俺はそのまま離しきった。

「ふう、よし、今日も絶好調!!」

そう言いながら、校門の前に立つ。

「お前が例の転校生か」

そう言いながら、校門の前に立っていたと思われる、教師らしき人物が話しかけてくる。

「はい、海城介人と言います」

とりあえず挨拶をしておく。

「うむ、俺は西村宗一だ。」

よろしく頼むぞ」

「はい、こちらこそ」

とりあえず挨拶をしておいた。

「ところで、何故そんなに急いでいたんだ？ 遅刻でもしたのか？」

「いえ、転校初日なので、遅刻しないように走っていたんですよ」

「ほう、それは殊勝な心がけだ。感心感心」

「ありがとうございます」

とりあえず褒められたので礼を言う。

「しかし、この結果は変えられないがな」

そう言いながら、俺に渡されたのは一枚の紙だった。

そこに書かれていたのはFという文字だった。

「先生、これって、もしかして、F組という事ですか？」

Fと書かれていて、察した。

これはクラス分けの表である事に間違いなかった。

しかし、この学校は学力低下対策として、試験召喚システムを導入している。

その為、A～Fまでのクラスに分けられる。

つまり、俺は成績不良者が集まる最低クラスのF組という事になる。

それを知った時、俺は絶望した。

「何故だっ!」

俺は必死に勉強し、成績は良かったはずだ!!」

「いや、貴様、試験当日思いつきり寝ていただけろ」

ああ、そういう徹夜で詰め込んでいて、脳がパンクして、寝ていったっけ?

「とにかく、俺は絶対に認めない!! 俺はA組になる男だ!!」

「なるほど、確かにお前はF組でも問題ないようだな。」

とつと教室に行くぞ」

「はあなあせえ!!」

俺は先生にそのまま掴まれ、ずるずると引きずられながら、F組へと連れてこられた。

「さて、お前は少しここで待て」

「はあ……」

そう言われ、俺はその場で待たされる事になった。

しばらくして、担任の福原先生が来た。

「君が海城君ですね。」

丁度今から自己紹介が始まりますので、最初に行つて貰つても良いですか?」

「はあ、分かりました」

とりあえず教室に入ると、全員が俺を一斉に見た。

クラスの中には人間もいるが、キカイノイドも普通に混じつており、一斉にこつちを見ている。

さてつと

「ええ、今日からこのFクラスに転校してきた海城介人です。」

趣味はガチャ。特技は全力です。よろしくお願いします」

とりあえず、簡単に挨拶を済ませ、席に着く。

すると、ドアを勢いよく開いた。

「すつすいません、ここに来る途中で交通事故にあつてしまいましたあ」

「そうですか、とりあえず遅刻です、エマさん」

「しよんなあ、先生!!」

そう先生に泣きついているのは、確か今朝、俺に突っ込んできた変な奴だ。

「んっ、ああ!!」

先生、あいつです! あいつが私の顔に傷をつけた男ですよ!」

「ふむ、君は一体何を言っているんですか?」

「だって、私は見てたんですよ。」

こいつが私の顔めがけて、全速力で走って来て、突き飛ばしてきた所を」

「どういう事ですか、介人君」

少女の言葉を聞いて、疑問に思ったのか、先生がこちらに話しかけてきた。

「なんか、よく分かりませんが、パンをくわえながら勢いよく突っ込んできたので、避けたら、自爆しました」

『なるほど、いつも通りだな』

「ええ!?!」

俺の言葉を聞いて、全員同じ反応を示すと共にすぐに興味を無くしたように再び座る。

それを見た、エマという少女は思わず目を見開く。

「なんで美少女である私よりも、そっちの転校生の言葉を信じるんですか！」

「だって、エマさんの性格はほとんどの生徒が知っているから」

「どういう性格なんだ、えっと」

「ああ僕は吉井明久。」

それで、えっと、エマちゃんの性格は」

そう吉井が迷っていると、他のメンバーが次々とエマの特徴を言っていく。

「そうだね、怠惰・腹黒・強欲の三拍子揃ったとんだ性悪女」

「あと、よく暴走するよね」

「そのせいで、こないだも」

「でも、そこが可愛いんだけどね」

「うん、確かに」

「……(ポツ)」

「……(ポツ)」

「まあ、そんな所が魅力という事で」

「ええ〜」

その言葉を聞く限りではかなりやばい奴じゃないか。

「酷いですよお！こんな美少女に向かつてえ!!」

いや、自分で自分を美少女とか言う時点でかなり痛々しいぞ。

「まったく、これでは第一印象が最悪じゃないですか。

とりあえず、自己紹介ですが、私の名前は閻魔エマです！

好きな物はお金！趣味は金儲け!!どうぞよろしくお願いします!!!」

その言葉で全員が啞然としている中、俺は一人納得していた。

ああ、これは間違いなく厄介なタイプだ。

俺がそう思っていると、何やら奇妙な感覚が襲う。

「なんだ?」

何が起きたのか、よく分からず、俺は周りを見渡す。

見ると、そこは先程まで賑やかだった教室がまるで時が止まったような空間になっ

ていた。

「まさかっ、もうこんなに早く!」

その状況の中でエマだけ、何かに気づき、目を見開く。

「何か知っているのか」

俺はそうエマを睨む。

「ええ、知っています。」

だからこそ、介人さんにお問い合わせがあります」

「いきなり過ぎるだろ。」

というよりも、なんで俺に？」

突然の事に驚きながらも、エマの話を聞く。

しかし、その内容はあまりにもぶつ飛んだ内容であった。

「介人さん！実はこの世界には新たな危機が迫っています!!!」

「何に？」

俺は思わず首を傾げる。

「アンチにです!!」

「アンチ？」

俺は思わず首を傾げる。

「現在、この世界はあなたがこれまで戦ってきた混沌世界と似た状況に陥っています。」

それはこの学園にある召喚獣システムに関係しています」

「召喚獣システム？」

「まあ、難しい話とか細かい話とかは置いておいて。」

とにかく、この世界の元になった作品には数多くのアンチがおり、それを心底憎む転生者達がギアを使って襲撃してきました!!」

「ギアを使ってそれってっ」

そう俺が疑問に思っている間に教室のドアを壊して、入ってきたのは一体の怪人だった。

「ガアアアアア!!」

「はあ?」

そこに姿を現したのは怪人だった。

茶色の身体にブーツと手袋、胴体へ鱗状の模様を持った前掛け、裏地が鱗模様のマントを着用しており、その顔には5色の宝石を思わせる仮面がついていた。

「あれって」

「間違いありません! 転生者がギアを使って、怪人になった姿です!」

「ディストリードとは違うようだが」

「あれはワルドです!」

本来ならば反発する正義の力と悪の力が合わさった偽物のスーパー戦隊です」

「つまり、あれはキラメイジャーの力を持っている訳か」

そう俺は納得しているが

「それで、俺にどうしろと」

「戦ってください！」

「無茶を言うなよ、今の俺にはギアトリンガーがないというのにつ！」

「そう言いながらも、目の前にいるワルドはFクラスのクラスメイトを襲おうとしている。」

「転校早々！こういうのは嫌なんだけどなあ!!」

「そう言っ、俺は駆け出す。」

「それと共に目の前にいるワルドに向かって蹴り上げる。」

「イルミネーションはその一撃を食らって、後ろに下がるが、すぐに体勢を立て直す。」

「さすがにギアトリンガーがないと、無茶だったか」

「ふふっ、こんな事もあるうかと」

「そう俺が言っていると、後ろからエマが取り出したのは」

「それって、ギアトリンガー!?!」

「介人さん、これを！」

「そう言いながらギアトリンガーを投げ、俺の手元へと来る。」

「同時に襲い掛かってくるワルドに向かって引き金を引く。」

「弾丸を受け、後ろに下がったワルド。」

「さつてと、まさか早々にこれかよ。」

「たく、平和な学園生活はないのかよ」

「そう言いながらも、俺は手慣れた動きでギアトリンガーに持つていたセントアイギアを挿入し、構える。」

「45バーン！」

「行くぜ、皆。チェンジ全開！」

心の中でジュラン達に向けて言うと共に、俺はハンドルを回して、そのまま引き金を弾く。

「ババン！ババン！ババン！ババン！ババン！ババン！ババン！ババン！ゼーンカイザー！」

変身音声が鳴り響き、俺の姿が変わる。

それは、俺にとつては馴染み深い姿だった。

「秘密のパワー！ゼーンカイザー！」

それと共に湧き出る言葉を叫ぶと共に目の前にいるワルドに目を向ける。

「てめえがどんなアンチか分からないが、人を襲うならば、全力で戦ってやるぜ!!」

それと共に俺はワルドに向かって、突撃する。

それと同時にワルドは拳を振り下ろしてくる。

それに対して、俺はそれを受け止めると同時に足払いで転ばせ、その隙に顔面を踏み

つける。

「グウウツ！」

痛みの声を上げているが、俺は容赦なく踏みつけ続ける。

「オラア！どうした？痛いかな、悔しいかな？」

「グウツ、ガツ・・・」

「だったら、かかってこいや、クソ野郎!!」

「うわあ、それがヒーローの戦い方ですか」

その様子を見ていたエマは少しひいた様子で見っていた。

「ぐう、硬あつ！」

だが、ダメージがあつたのは、むしろ俺の方だった。

「ええ、どういう事ですか!？」

それを見たエマは思わず呟いてしまう。

「ああ、そつかキラメイジャーは宝石がモチーフになっているんだ。

だから、奴の身体は全身が宝石のように硬いのか」

見た目はむつちや柔らかかそうなのに。

「それって、つまり、あれを売れば儲けられるという事ですね!!」

そういう問題じゃないと思うけどね。

だけど、あの硬い皮膚をどうにかしないと。

「こういう時は、これだ!」

俺はそう言うと共にセントアイギアの一つをギアトリンガーに装填する。

【21バーン!メガレンジャー!】

それと共に俺の前にメガレンジャーの幻影が現れ、その内、メガレットとメガイエローが俺の身体に吸い込まれる。

「えっ、何を」

「良いから見ても」

俺はそう言い、手にはメガレットの武器であるドリルセイバーを構える。

そして、ワルドに向かって突っ込む。

ガキンツという音と共に何かが削れる音が聞こえてきた。

それと共にワルドの身体は徐々にだがヒビができる。

「なんで?!」

「これが、メガレンジャーの力か!」

「いや、どういう理屈なんですか?!」

未だに分かっていないエマに対して、俺はそのまま構えながら言う。

「宝石には割れやすい石目の位置があるんだ。」

俺はそれを探る為にメガイエローの能力を使って、その位置を特定し、攻撃したんだ」
「なるほど！」

それに納得したようで頷く。

「さて、とどめ全開と行くぜ！」

俺はそう言い、取り出したのはギアをそのままギアトリンガーに装填する。

「44バーン！キラメイジャー！」

それと共に俺はハンドルを回す。

「行くぜ、必殺魔進アタック！」

その言葉と共に引き金を弾くと共にギアトリンガーから宝石を思わせるマシンが次々と現れ、ワールドを次々と向かって行く。

それによりワールドの身体は砕け散り、元の姿だと思われる男子生徒に戻る。

「これにて解決と言いたいけど、さて、こいつから詳しい事を聞きたいが」

そう俺が近づこうとすると、俺の足下まで転がってきたギアから突然雷が放った。

その雷はそのまま男子生徒に当て、感電させる。

「ええ〜」

「これは一体？」

それを見て、思わず呆れてしまう。

「先程は記憶を無くす事ができる道具と同じ感じ。

まさか、あれは」

「ちっ、証拠隠滅か」

その事に俺は思わず舌打ちをしながら、変身を解除する。

同時に先程まで止まっていた時間は動き出した。

「さて、これからどうするべきか」

「介人さん、介人さん」

「んっ?」

俺がそう悩んでいると、エマが俺に耳打ちしてくる。

「この事はあとで詳しく話しますので、とりあえずここはどうか誤魔化しましょう」

「確かにそうだな、さて、どうするべきか」

そう俺が悩んでいると、何時の間にか大半の生徒が全員黒覆面と黒マントを着用していた。

見れば、既に先生の姿はなかった。

「これより異端審問会を始める。被告人海城介人を有罪とするか無罪とするか」

「中身は腐った泥のような奴とはいえ、相手は美少女であるエマとあそこまで急に仲良くなっている」

「これは、嫉妬によつて有罪となる可能性がある」

「では、判決を申し渡す。被告、海城介人は死刑とする。異議のある者は申し立てよ」

『……』

「それでは、これより死刑を実行する」

「なに、このクラス」

俺は目の前の光景に啞然としてしまう。

そこには明らかに危険なオーラを纏っている集団が居た。

それと共に一斉にこちらに襲い掛かってくる。

「それでは介人さん！

放課後、待っていますよ！」

その顔は明らかにこの状況を楽しんでいる様子だった。

「……全力でぶっ殺す」

その声は怒りに満ちていた。

第2話 始まるか!?危機一髪のギャラクシーパワー!?銀河の果てまで吹っ飛べ!!

「さて、エマ。」

貴様には聞きたい事が山程あるな」

「いや、あの、その前に、その殺気、なんとかできません」

エマの策略によって、Fクラスの男子に狙われた俺はなんとか、奴らを全員半殺しにする事で危機を脱する事ができた。

そして、逃げ出したエマに問いかけながら、睨み付けた。

「それでお前は一体何者なんだ」

「はっはい、分かりました!」

えっと、まずは自己紹介からさせて貰いますね!!

あらためて、自己紹介を!私の名前は閻魔エマです!!

あなたも知っているとありますが、私は転生者を管理するバイト閻魔です」

「バイト閻魔って、何!?!」

俺が思わずそう言ったのは、無理ないと思う。

「あなたが担当していたフラグちゃんは簡単にいうと正社員。」

私はバイトのような扱いです」

「それじゃ、そのフラグちゃんは今はどこにいるんだ」

「いやあ、それがあつちこつちで色々な世界に回っているの、こつちの世界に来るのは難しいじゃないですかねえ」

そう言いながら、眼を逸らしているのはどういふつもりだ。

「まつまあ、そんなフラグちゃんの代わりに私が来ました。」

こうして、修復したギアトリンガーとセントアイギアを持つてきたのですから」

「にしても、以前よりも数が少ないな」

見る限りだと、俺自身の変身用のセントアイギアに44のセントアイギアのみだ。

それ以外のギアがまるで見当たらないが

「ああ、他のセントアイギアは持ちさつ、じゃなくて、修理が間に合わなかつたので持つてきていないです」

「・・・」

なんだか、怪しいが。

「とりあえずは色々と聞きたいけど、もう試験召喚戦争の時間だしな」

エマが逃げ出して、捕まえる為に翌日という事もあつて、俺はこれから回復試験を受

ける為に教室から出る所だった。

「頑張ってくださいねえ」

「たたくう」

そう言いながら、俺は回復試験を受ける為に教室を迎えた。

そこから回復試験は素早く終わると共にすぐにFクラスに向かった。

「試験召喚獣!・召喚!」

俺の呼び声と共に、目の前に現れたのは幾科学的な魔方陣が現れる。

それと共に現れたのは、俺を小さく80cm程度の召喚獣がその姿を現れる。

未来的な白い服装に身を包み、所々に赤・青・黄・ピンクの4色が散りばめられており、その手にはヨーヨーとローラースケートを履いている姿だった。

「あれは噂の転校生の召喚獣か!」

「けど、点数はかなり低いぞ!」

その言葉通り、俺の点数は50点程度という事もあり、未だに残っているEクラス生徒は油断している。

「ええ、その点数で来られても」

「そうですよ、負けるだけですよ」

そう、後ろから騒いでいる二人を無視し、俺はそのまま召喚獣の操作を確かめる。

「今のうちにあいつも倒すぞ！」

その掛け声と共にEクラス生徒の召喚獣が一斉に俺の召喚獣に向かって襲い掛かる。

「・・・よし、だいたい分かった」

それと共に、俺はある程度召喚獣の動かし方を理解すると共に動かし始めた。

ローラーズスケートという事もあって、動きは素早く、そのままEクラスの召喚獣の中心に立つ事ができた。

「馬鹿め、袋の鼠で何ができる！」

それと共に俺の召喚獣に向けて、Eクラスの召喚獣が一斉に襲い掛かる。だが、俺は慌てる事なくゆっくりとヨーヨーを構え始める。

そして、迫りくる攻撃に対して、俺の召喚獣はヨーヨーを振り回し始めた。

すると、ヨーヨーはまるで生きているかのように空中に浮かび上がり、俺の召喚獣の周りを取り囲んだ。

それだけではない、そのヨーヨー達は意思があるように回転を始め、四方八方から来る攻撃を防御しだしたのだ。

「なっ!? そんなバカな！」

「攻撃を防ぎやがっただど!!」

Eクラスの生徒が驚く中、俺はその隙を逃さず、ローラーズスケートを使いながら走り

出す。

「くそ、ただの物理攻撃力が低いだけの雑魚じゃねえのかよ!」

「遠距離主体でもなさそうだぞ!」

「とにかく攻撃を続けるしかないぞ!」

それと共に、残りのEクラスの召喚獣が攻撃を仕掛けてくるが、既に遅い。

「……(こ)だな」

俺は召喚獣の目線の先にヨーヨーを操作を続けた。

未だに襲い掛かってくる奴らだが、その攻撃は全て避け、さらに追撃を行うようにヨーヨーの一撃を食らい続ける。

「おいっ、幾らダメージが低くてもっ」

「ああ!」

そうして、攻撃を受け続けた一人の召喚獣がやられ、消滅する。

それがドミノ倒しを思わせるように、次々とEクラスの召喚獣を倒していく。

「えっええ、介人君!

君って、召喚獣の操作は」

「これが初めて」

「嘘!」

俺の一言に吉井は驚きを隠せない様子だった。

実際に召喚獣の操作自体は初めてだが、これまでのゼンカイジャーとして戦ってきた経験がここまで反映されるとは、思わなかった。

「へえ、これは思った以上にとんでもないようだな」

「ああ、そのようだな」

そう言っていると、Eクラスの連中の中から一人の人影が現れる。

その見た目はまるで宇宙服を思わせるロボットであり、見た目からキカイノイドのようだな。

「ボイジャー!」

「ここは俺に任せろ、行くぜ試験召喚獣! 召喚!」

その言葉と共に現れたのは黒い宇宙服に銃というまさに見た目通りの召喚獣だった。

「へえ、これは少し面白そうだな」

そう言いながら、俺は召喚獣のヨーヨーを操りながら、ボイジャーを見つめる。

「行くぜ、勝負!」

それと共にボイジャーの召喚獣の銃が俺の召喚獣に襲い掛かる。

それと同時に、俺の召喚獣もヨーヨーで対抗する。

二つの武器が激しくぶつかり合うと同時に、辺り一面に大きな衝撃が生まれる。

この感じは久々かもしれないな。

「さあ、盛り上がっていくぜー!」

その一言と共に、俺は一気にボイジャルとの距離を取る。

それと共に、俺は自分のヨーヨーを構える。

それに合わせるように、ボイジャルの方も同じ様に構えている。

互いの距離は約10mといったところだろう。

これならば、一網打尽にしてやる。

そう思いながら、俺はヨーヨーを再び構えると、ボイジャルも同時に同じ事を思っていたらしい。

互いに睨み合いながらも、距離を保つ。

そうしながら、再び攻撃を仕掛けようとした時だった。

互いの召喚獣の動きが突然止まり、周りの時間が止まった。

「これは!」

「まさか、また襲撃ですか!」

そう言っていると、Eクラスの生徒の一人が取り出したのはギアだった。

「まったく、こんなくだらない事を何時まで続けているつもりだあ!」

その言葉と共にその生徒の身体は徐々に変化していく。

それはまさに獣の鬼というべき存在であり、頭に生えた一本角を中心に、身体各部には様々な動物が合わさった怪物へと姿になった。

「なっなんだあれはっ!?!」

「あれ、ボイジャーは動いているのか!?!」

というよりも、エマ!

「この空間は一体何なんだ!?!」

以前の戦いでも時間が止まった事について疑問に思っていたが、すぐにエマに聞く。

「この空間は文月学園での召喚フィールドを介して作り出した疑似フィールドです。」

「ここで暴れても、人は死ぬ事がないように私が改造しました」

「改造って」

「なんだって、ここはオカルトと科学が混ざっていますからね。」

それにまさか、適合者がもう一人いるとは」

エマに対して、思わず呆れてしまうが、今は

「まさか」

俺がそう思っていると、エマは懐から取り出したのはギアトリンガーと見た事のない
セントアイギアだった。

「ボイジャーさん!」

これを使ってください!」

「なっなんだ、これは?!」

それを見ていると、ボイジャーはすぐに手に取るように受け取る。

「この状況を打開できるとっておきのアイテムです!」

「アイテムって」

「おい、ここに無関係な奴を巻き込むな!」

「ですが、あいつを相手に一人で戦うなんて、無茶ですよ」

そう言っている間に、時間は再び動き出し、同時に目の前にいる怪物が雄たけびを上げながら、こちらに向かってくる。

「おい、介人。」

何が起きているか、分からないが、ようするにこれを使えば、あいつを止められるんだろ」

「まあそうだけど」

「だったら、さっさとやるぞ!」

あいつのせいで、お前との勝負を台無しにされてたまるか」

「ボイジャー」

その言葉で、なんとなく分かった気がした。

こいつは俺と同じタイプか。

「だったら、さっさと決めるとするか！」

その言葉と共に、俺もまたギアトリンガーを取り出す。

「それで、これはどうやって使うんだ？」

「とりあえず、俺の動きを見て、真似ろ！」

それと共に、俺はギアトリンガーの蓋を開け、そこにゼンカイザーギアを装填する。

【45バーン！】

「チェンジ全開！」

【ババン！ババン！ババン！ババン！ババババン！ゼーンカイザー！】

その音声と共に俺はゼンカイザーへと変身する。

「なるほど！」

【21バーン！】

【ババン！ババン！ババン！ババン！ババババン！ゼーンカイボーイジャー！】

その音声と共にボーイジャーの姿はメガレンジャーが使ったメガボーイジャーが黒く染まった姿であり、その額にはメガレンジャーの番号である21番が刻まれていた。

「それじゃ、まずはお決まりだ！秘密のパワー！ゼンカイザー！」

「俺もか？宇宙パワー！ゼンカイボーイジャー！」

俺に合わせるようにボイジャーも叫ぶ。

「二人合わせて、機界戦隊!ゼンカイジャー!」

そう、俺の言葉に合わせるようにボイジャーも叫ぶ。

「ゼンカイジャーが何ができる!!」

それと共に目の前にいる怪物の身体から次々と出てきたのは不完全な瘤状の角しか持たない鬼が現れる。

「オルゲット!オルゲット!」

そう鬼達はその言葉しか喋りながら、集団になって俺達に襲い掛かった。

「こいつらはどうやらガオレンジャーとオルグが合わさった奴らのようです!」

「行くぜ、全力全開だ!」

俺はそう言いつつ、ガオオルグに向かって駆け出すとガオオルグはその巨体からは想像できないような速さで移動してくる。

そして、そのまま振り下ろされた修羅百鬼剣による一撃を受け止める。

だが、あまりにも重い攻撃に踏ん張りきれずに押し込まれてしまう。

このままでは押し切られると思ったその時だった。

「こつちを忘れているんじゃないよ!」

そんな言葉とともに放たれたボイジャーの攻撃により、ガオオルグは大きく吹き飛ば

されていく。

「助かったぞ、ボイジャル！」

「礼ならあとにしやがれ！来るぞ！」

ボイジャルの言葉通り、ガオオルグは再びこちらへと向かってくる。

それに対して、俺もまた拳を構えて迎え撃つ準備をする。

すうつと息を吸い込み……一気に吐き出すと同時に、ガオオルグに向けて走り出した。

相手もそれに反応するように大上段からの攻撃を繰り出してくるがそれを受け止めると同時、その腕を掴み取り背負い投げの要領で地面に叩きつける。

ガオオルグはそのまま起き上がろうとするものの、すかさずそこに追撃の蹴りを叩き込む。

「これで終わりじゃないぞ!!」

そう言ってさらに連続でパンチを繰り出すのだが、ガオオルグはそれを捌き切ると再び攻撃を仕掛けてきた。

それを避けながら距離を取るために後ろに下がると、ボイジャルが俺の隣に並ぶように立った。

「おい！大丈夫なのか？」

「ああ！問題ない！それよりも、お前の方こそ本当に大丈夫なんだろうな！」

「心配はいらない!それより……!」

「分かっている!奴を倒すにはどうすればいいのか、だな!」

「向こうが動物だったら、こっちは恐竜パワーで対抗だ!」

その言葉と共に俺は懐からセンタイギアの一つを取り出し、そのままギアトリンガーに装填する。

「27バーン!アバレンジャー!」

その音声と共にセンタイギアから現れたアバレンジャーの幻影が現れ、そのまま俺達の元へと吸い込まれる。

それと共に身体の奥底から湧き上がる気力と共に俺達のスーツからは腕や脚から大きなヒレやトゲが生え、身体の底から力が湧き上がる。

「行くぜ!」

「おおつ、恐竜パワーで行くぜ!!」

そう言うと共に俺はガオオルグに向かって駆け出し、ボイジャルもまた駆け出す。

ガオオルグはその巨体からは想像できないような速さで移動してくるのだが、その動きを見切りつつ拳を振り上げる。

だが、ガオオルグはそれを避けると同時に修羅百鬼剣による一撃を放ってくる。

しかし、俺はそれを正面から受け止める。

「馬鹿な!？」

とガオオルグは驚きの声を上げるものの、そのまま押し返す。

そして、ボイジャルがボイジャルキャノンでガオオルグに攻撃を加える。

「くそつたれ!効いてねえぞ!」

ボイジャルの言葉通り、ガオオルグは全くダメージを受けていないかのようにこちらに向かってくる。

それを見て、ガオオルグがこちらの攻撃に対して耐性ができている様子だった。

「まだまだあ!!」

その言葉と共にガオオルグを蹴り飛ばし、懐から取り出したギアをボイジャルに投げる。

「これを使え!」

「ああ!!」

その言葉を受け止めると共にボイジャルもまたギアトリンガーにセンタイギアを装填する。

【26バーン!ハリケンジャー!】

その音声と共にボイジャルの前に現れたのはハリケンジャーの仲間であるゴウライジャーの一人であるカブトライジャーだった。

その幻影はそのままボイジャーに吸い込まれると共に、ボイジャーもまた構える。

「超忍法・幻カブト!」

その言葉と共にボイジャーの後ろから現れたのは巨大なボイジャーの幻覚であり、そのままボイジャーはガオオルグとオルゲットを丸ごと殴り飛ばす。

「ぐつがああ!!」

「それじゃ、とどめを刺すぞ!ボイジャー!」

「ああ!」

その言葉に合わせるように俺達はそのままギアトリンガーを構えたまま、ハンドルを回す。

「ヒーロー!スーパーゼンカイターイム!ダイゼンカイ!」

その音声と共に俺達の上空にはゼンカイジャーのマークが現れ、そのまま狙いを真つ直ぐ

とガオオルグへと向ける。

「いつけえー!」

俺達がそう叫ぶと同時に放たれた二つの光線はガオオルグを貫き、そのままガオオルグは爆散する。

それと同時にガオオルグは元の生徒に戻っていった。

それと共に止まっていた時は再び動き出し、俺達も変身はすぐに解除される。

「やったか……」

「おう、なんとかなったな……っつておい!!大丈夫なのか?!

俺がそう言いながら生徒の方を向いた瞬間、先程まで倒れていたはずの生徒がゆつくりと立ち上がっていくのが見える。

「あれ、これは?」

「あいつは」

「だいたい奴らは戦闘後は記憶が残っていないからな」

そう言っていると、俺とボイジャーはそう言っていると

「勝者、Fクラス!」

「えっ」

一瞬、何が起きているのか分からず、俺達は思わず入り口を見る。

そこにはEクラスの代表が倒されている光景だった。

「どういう事?」

「時間が止まっているのはあくまでも召喚フィールド内のみとなっていますので、おそらくはその間に回復試験を行っていた姫路さんが丁度、来たんでしよう」

「未だに分からない事が多いな」

どうやら、想像以上にこの学園は何かがあるようだな。

とんでも姉妹対決！パトロール&ファイティングファイ
ト！

「いやあ、これぐらいししないとねえ」

そう言いながら、Eクラス戦を終えた。

だが、Eクラスとの設備は交換されなかった。

それは代表である坂本の意見であり、それがどのような意味があるのか、多くの者達
が疑問に思っていた。

しかしEクラスとの戦いを終えた後、Aクラスからの宣戦布告を受ける事になった。

「それにしても、まさかEクラスとの設備を交換しないとはな」

「んっ、海城もか？」

「いや、俺は別に設備には気にしていないが」

そう言いながら、俺は特に気にせずあくびをしていた。

「そういえば、海城君はなんであんなに召喚獣の操作が上手かったの」

「下手したら、明久の特権を奪うレベルだったな」

「うぐっ」

話をしていると、吉井はEクラスとの戦いで俺の召喚獣の操作が気になり、聞いてきた。

それに釣られるように、他の面々も質問してくるが、その中で明久にわりとダメージを受けたのか、少し俯く。

「なんでだろ？」

直感みたいな感じだったからな」

まさか本当に戦っていた事を知らせる訳にはいけないので、俺は誤魔化すように言う。

「まあ、海城という戦力が入ったのはいいさ。とりあえず行くぞ」

「行くって、どこに？」

「決まっているだろ、Aクラスだよ」

そう坂本は笑みを浮かべながら、Aクラスへと俺達は向かった。

Aクラスに到着する。そして教室に入るとそこには、こちらの到着を待っていたのか腕を組んで立っている二人のキカイノイドがいた。

「ようこそ、Fクラスの皆様」

「待て、どういふつもりだお前ら！ Aクラスは俺たちと戦うんじゃないのか！」

雄二の言葉に、Fクラスの奴らは驚きながらも声を上げる。

それもそうだ、先程までFクラスで戦うと言っていた連中がいきなりAクラスに来たのだ。

「あの二人は？」

「ああ、そういえば、介人さんは初めてでしたね」

そう言っているエマはそのまま飛び出る。

「あの二人はこのような状況になったのは、Aクラスでも名物の姉妹、パトローラさんとフェアリーナさんです。」

姉の方は成績優秀なクールな人、フェアリーナさんはヤンキーみたいな口調が特徴がある名物姉妹です」

そうして、改めて俺は二人を見つめる。

頭部はジャツカルを模していて黒のロングヘアのパトローラと頭部はトラを模しており、目付きが鋭いフェアリーナらしい。

「あんたは、金の亡者のエマ」

「なんだとこのガチレズ女！」

フェアリーナの言葉を聞いて、ぶち切れしたエマが反論した。

「フェアリーナ、少し落ち着きなさい」

「お前はいい加減にしろ」

喧嘩しそうになって二人を俺とパトローラは各々で止めていく。

それを見てため息を吐きながら、雄二はそのままパトローラ達に近づく。

「どうせお前らのことだ、何か企んでいるんだろう。今回は何を考えていやがる」

「流石坂本君、察しが良いわね」

そう言つて、パトローラと名乗る女子生徒が前に出る。

「まあ良いわ。」

最初の相手は私パトローラが務めさせて貰います」

「いきなり初っぱなから、とんでももない奴だな。」

「だつたら、介人、頼めるか」

「まあ、別に良いけど」

その言葉と共に俺もまたパトローラと対峙する。

「あなたは確か、Fクラスの転校生」

「海城介人だ。」

「まあ、よろしく頼むぜ」

「ええ、まあ、すぐに終わりますが」

「そう俺を多少侮つた様子で見ているが、まあ良いか。」

「試験召喚獣、召喚!!」

その言葉に合わせるように相変わらず俺の召喚獣は白いコートに未来的な白い服装に身を包んでおり、その手には武器であるヨーヨー、足にはローラースケートを装備している。

対するパトラーのその姿はまるで警察官を思わせる格好をしており、その手には警棒を手に持っていた。

「それにしても、Fクラスという事もあって、召喚獣はとても武器とは思えないわね」
「さあ、それはやってみないと分からないだろ」

「そう、ならば、試してみようじゃない！」

その言葉と共にパトラーの召喚獣はその手に持った警棒で襲い掛かる。

対して俺の召喚獣はヨーヨーを自身の両腕に回して、腕の間に糸の束を纏めて、その攻撃を受け止める。

「なっ」

【海城介人 日本史 410点 VS パトラー 日本史 413点】

それを受けて、倒れない事に驚いたのか、それとも点数を見て驚いたのか、そのまま退いた。

「どういう事なの、その点数、Aクラス並みじゃない」

「悪いけど、あの問題が出た以上は負けるつもりはないからね」

今回の試合の前で行った回復試験で出された問題の数々。

それは実はスーパージョー戦隊と大きな関わりがある出来事が中心に出ており、ゴレンジョー以外の存在が例え存在しなくても、スーパージョー戦隊に深く関わる出来事の為、俺は容易に問題を解く事ができた。

「まあ、だからこそ、負けるつもりはないけどね!」

その言葉と共に、俺の召喚獣は勢いよく蹴り上げ、そのまま後ろに下がる。それに対してパトローラもすぐに態勢を立て直す、先程までと違い、焦りが見える。

「確かに点数では互角でしょう。」

「だとしても、負ける理由にはなりません!」

「まあ、その通りだな!」

それと同時に俺の召喚獣もまた後ろに下がりながら、ヨーヨーによる攻撃を行って行く。

この戦いを見る限りでも、俺の召喚獣はヨーヨーによる遠距離の攻撃とローラースケートによるヒット&ウェイの戦法を得意としている。

対して、パトローラはその手に持った警棒の威力を考えても、一撃でも当たれば大きくダメージを受ける。

ただ、パトローラの場合は攻撃を防御せずに回避している為か、攻撃自体はあまり受け

ていない様子だった。

「やっぱり強いな」

「あなたこそ、ここまで戦えるとは思いませんでしたよ」

互いに相手の力量を認めつつ、戦いを続けていく。

【海城介人 日本史 230点 VS パトローラ 日本史 283点】

このまま続けばどちらが勝つかわからない状況だが、この勝負を終わらせる方法は既に考えていた。

「ならば、腕輪の力を使います！」

その言葉と共にパトローラの召喚獣の背中からは翼が生え、そのまま宙へと飛んだ。

「ええ、空を飛ぶなんて、反則だろ」

「これは私に与えられた力です！ 文句を言う前に戦うべきではありませんか？」

「確かにそうだな……」

そう言いながらも空にいる相手に対してどう対処するかを考える。

パトローラの言う通りに地上戦で戦うにしても、空に逃げられるとこちらとしては厄介になる。

そんな事を考えていると、パトローラの方も同じ考えなのか、再び攻撃を仕掛けてきた。

「仕方ないか！」

その攻撃に合わせて、こちらもヨーヨーを投げつけるが、それを難なく避けられてしまふ。

そして、同時にパトローラは警棒を振り下ろしてくるが、こちらはバックステップをして避ける。

「ちいっ」

「やはり動きが悪いですね。」

「そろそろ終わりにしましょう」

そう告げるとパトローラはそのまま上空に上がっていき、そのまま襲い掛かる。

「待てよ、確か俺にも腕輪が!」

それと共に俺の召喚獣の腕を見みると、確かに腕輪があった。

それも通常の腕輪とは違い、まるで何かを填めるような凹みがある。

「もしかして、試してみる価値はありそうだな」

その言葉と共に俺はセンチギアの一つを取り出す。

それに連動するように俺の腕には召喚獣と同じ腕輪が現れる。

「腕輪?」

「さあ、全力で行かせて貰うぜ!!」

そのまま腕輪に向けて、センチギアを挿入する。

【アルティメット！キュウレンジャー！】

その音声が鳴り響くと共にローラースケートが仕舞われ、代わりに召喚獣はまるで武道を行うような構えを行う。

「何が起きたのか分かりませんが、その程度！」

それと同時にパトーラの召喚獣が俺の召喚獣に向かって、飛び込む。

「行っけ、これがロボットプロレスだ！」

その言葉と共に召喚獣の腕がまるでロケットパンチのようにパトーラの召喚獣に向かって飛ぶ。

「はあっ?!」

突然の事で驚きを隠せなかったパトーラに対して、そのまま追い打ちをかけるように落下しているパトーラの召喚獣に近づく。

「ちよっ、まっ！」

それを受けてパトーラも慌てて回避しようとするが、それよりも早く、前屈みになったパトーラの頭を自身の両足で正面から挟み、その胴体を両腕で抱えて持ち上げながら後ろに尻餅をつくように倒れ込み、パトーラの頭部を打ちつける。

その結果、地面に叩きつけられたパトーラの召喚獣は大きくダメージを負っていた。

「これで俺の勝ちだな」

「まさか、こんな方法で倒されるなんて・・・」

そのままパトローラの召喚獣の点数も0になり、試合が終了した。

「そこまで！勝者、海城介人！」

こうして、俺達のFクラス戦の初めての勝利を掴んだ。

「まさか、ここまで力を持つ者がいるなんて」

「姉さんが負けるだなんて」

その衝撃が未だにAクラスには広がっていた。

「だから、そいつ程度が出すのは反対だったんだ」

それと共に出てきたのはAクラスの一人だった。

「お前、姉さんをバカにするのか！」

そう言い、Aクラスの生徒の一人がギアを取り出した。

「ちっ、まさかここに來てか」

「それは一体っ」

そう言っていると共に、その空間は一瞬で止まった。

「これは一体」「てめえ何を」

「なに？」

俺が見つめた先には止まった時の中なのに動いているパトローラとファリーナの二人

組だった。

「これはっチャンスですね!!」

「おい、エマ!?!」

何を考えたのか、エマはそのまま懐から取り出したギアトリンガーとセンタイギアを二人に向けて、投げた。

「なっなんだよ、これ?!」 「普通の銃刀法に引っかけられますよ!?!」

まあ、当然の反応をしているな。

「とりあえず、身を守る為にも変身しとけ」

「えっ、ちよっ、やり方は」

「見て覚えておいてくれ、チェンジ全開!!」

【ババン!ババン!ババン!ババン!ババババン!ゼーンカイザー!】

その音声が届り響くと同時に俺はそのままゼンカイザーへと変身する。

「なっなんだよ、あれは」

「分かりません。」

けど、やるだけの価値はありそうですね」

パトラーの言葉を聞いて、ファリーナも頷き、先程の俺の動きを真似るように行う。

【31バーン!】 【28バーン!】

「チエンジ全開!!」

それと共に二人は同時に引き金を弾く。

【ババン!ババン!ババン!ババン!ババババン!ゼンカイファリーナ!(ゼンカイパトローラ)】

それと共にファリーナはメインカラーはオレンジ。獣拳戦隊ゲキレンジャーのゲキトージャに似た姿で、胸部にはトラの頭部がある。額にはゲキレンジャーの作品番号を表す「31」が刻まれていた。

それはパトローラも同じく、メインカラーは緑。特捜戦隊デカレンジャーのデカウイングロボに似た姿で、胸部にはデカレンジャーのマークがあり、背中にウイングとブースターを装備。額にはデカレンジャーの作品番号を表す「28」が振られている。

「さてつと、さつそく決めるとするか!」

秘密のパワー!ゼンカイザー!」

「えっこれをですか?」

えつと、パトロールパワー!ゼンカイパトローラ!!」

俺の行動に合わせてか、パトローラも恐る恐る行う。

「姉さん!!えっ私も」

「良いから、さつさとやっってくださいよ」

そう、俺の隣で呆れ気味に言うエマ。

「ぐっこいつはっ！ だったら、やってやる！ 格闘パワー！ ゼンカイファリーナ！」
「とりあえず、3人揃って！ 機界戦隊ゼンカイジャー!!」

そう俺はそのまま名乗りを上げる。

だが、二人はぼーっとしているだけだった。

「空気、読んで下さいよ、まったく」

「これは私達が悪いのか、姉さん？」

「さっさあ」

そう話している二人を余所にAクラスの奴の姿は徐々に変わっていく。

そこに立つのは赤いチーターの様な頭部と足、青いゴリラの様な腕と胴体、黄色い兎の脚部を持つロボットであり、その正体も既に分かっている。

「なるほど、ゴースタースの能力とメタロイドの能力が合わさっている、ゴースタールロイドという訳か」

「ゴースタース？」

「メタロイド？」

俺の言葉に疑問に思ったのか、パトラーとファリーナは首を傾げながら聞いてくる。

「まあ、どう言ったら良いのか分からないけど、この世界とは別の世界で戦うヒーロー

と、その敵対している怪人。

その二つが合わさった奴があいつだ」

「さつきから、よく分からないけど、ようするにあいつを倒さないと、この空間からは脱出できない訳ね!!」

「だつたら、私に任せろ!!」

それに合わせるようにファリーナが取り出したのは機械の要素が組み合わさったトンファー型専用武器、ファリーナトンファーだった。

ファリーナトンファーを自在に動かしながら、ゴースターロイドへと近づくと共に、その一撃をゴースターロイドに向けて、叩き込む。

「無駄だ!!」

その一撃に対して、ゴースターロイドは右腕から生やしたナイフで受け止める。

だが、そんな状況でも俺は冷静に相手を分析する。

あのゴースターロイドの攻撃方法は、かなり厄介なものだった。

何せ、ゴースターズ的能力である各パーツとの連携攻撃だけでなく、メタロイドとしての基本性能も高いのだ。

その証拠に先程の戦いでもファリーナの攻撃を難なく受け流していたし、単純な戦闘能力ならこつちの方が上かもしれない。

元々能力としてレッドバスターの目にも止まらないスピード、ブルーバスターの人離れをした怪力、イエローバスターの人を軽く飛び越える事ができる跳躍力を持つ。

それに加えて、ロボットという事もあって、人間に存在する疲労などがない為、様々な戦いに対応ができる。

「それに対して、ファリーナの方も初めての变身とは思えないけど、凄いな」

先程から自身での専用武器であるトンファーによる攻撃と共に自ら鍛えていた格闘技と、彼女の力を貸しているゲキレンジャーの力が組み合わさった事によって、その戦闘技術はファリーナの方が上だ。

その証拠にゴースターロイドは自身の身体スペックを頼りに、ファリーナは戦闘技術。

お互いに引けを取らない攻防を繰り返しているが……それでもまだ完全に互角とは言えなかった。

「やっぱり、初めての戦闘の影響だな」

幾ら戦闘技術が優れているからと行って、ファリーナは今回の变身で本格的な戦闘が始めてだ。

例え格闘術を習っていたとしても、それはあくまでも護身用であって、実践では使えない。

その為、どうしても身体能力に任せた強引な攻め方になりがちだし、それに対する防御面に関しても少し甘い部分がある。

「ああ、もう、見てられない」

それと共にパトローラは我慢ができなくなったのか、両手に彼女の専用武器であるデューリボルバーに似た銃「パトローライフル」と警棒「パトローロッド」を持ち、二人の戦いに介入する。

「姉さん!」

「フアリーナ、やるわよ!!」

「了解!!」

パトローラの言葉を聞いたフアリーナの一言を聞くと共にそのまま攻め込む。

先程までならばただ攻め込むだけだったフアリーナの戦闘だったが、そこにパトローラがゴースターロイドの攻撃を受け流し、さらには牽制する事によって、その戦闘をより有利に進んでいく。

「はあ!!」

先程と比べても姉妹ならではのコンビネーションでゴースターロイドを徐々に追い詰めていく。

その姿を見た俺は思わず感心してしまう。

確かに初めて変身するにしてはかなり筋が良いのだが、それでもまだ素人なのは変わらない。

「今よ!!」

「ああ!!」

その証拠というべきか、パトローラがゴースターロイドの右腕のナイフを封じた時に、それが起きる。ゴースターロイドはその隙を突くように左腕を振り上げようとする。

だが、その動きに合わせてファリーナもまた動く。

「させるか!!」

「ぐっ!?!」

振り上げられた左腕の動きに合わせてるように、自身の持つトンファーをぶつけて、その動きを止めようとした。

だが、その左腕は銃へと変形する。

「なっ!!」

それによりファリーナの腹部に向かって、弾丸を放つ。

その一撃を受けた事によりファリーナは大きく吹き飛ばされてしまう。

「大丈夫ですか、ファリーナ?」

「ええ、問題はないわ」

そう言いながら、二人は立ち上がる。

どうやら先程の一撃を受けても特に怪我を負っていない所を見るが、少し震えている。

「さて、いい加減、こっちも暴れたいからな」

俺はそう言いながら、ゆっくりとゴースターロイドへと近づく。

「なつてめえは下がってろ!」「そうよ、ここは」

その様子を見て、二人はすぐに言うが、俺は気にせず進む。

「悪いけど、成績は悪いけど、こっちは専門分野なんだからな」

その言葉と共にゴースターロイドへと近づきながら、センタイギアの一つを取り出し、そのままギアトリンガーに装填する。

【43バーン!ルパンレンジャー!】

俺が近づいた事によって、警戒したゴースターロイドは再び左腕の狙いをこちらに向ける。

だが、それよりも早く左手に出てきたワイヤーガンを真っ直ぐとゴースターロイドの左腕に巻き付ける。

「なつ」

巻き付かれた事に驚きを隠せないゴーバスターロイドを無視し、俺はそのままワイヤーガンで、そのまま一気に近づき、そのままゴーバスターロイドを蹴り飛ばす。

「があ!？」

その衝撃により、大きく態勢が崩れる。

だが、未だにワイヤーガンが左腕に巻き付いているので、倒れる事ができず、俺はそんなゴーバスターロイドを引き寄せながら、新たなセンタイギアを再びギアトリンガーに装填する。

【5バーナー・サンバルカン】

その音声が鳴り響くと共に俺の前にサンバルカンステイックが現れ、それをゴーバスターロイドに向けて蹴り飛ばす。

「ぐっ」

それを受け、怯んだ隙に俺はワイヤーガンを手放し、サンバルカンステイックを変形させる。

それによって、サンバルカンステイックは日本刀へと変形させる。

「行くぜ、飛羽返し!」

その言葉と共にバルイーグルの技である飛羽返しを再現するように、刀に空気中の静電気を集め、構える。

「はあ!!」

そして、その体勢のまま俺はゴースターロイドへと向かう。

当然、ゴースターロイドは迎え撃とうと、右腕を構えるが、それよりも先に俺の刃が届く。

「はあ!!」

その一閃と共に、ゴースターロイドの装甲は真つ二つとなる。

「が、があ……」

その断末魔と同時に、ゴースターロイドはそのまま爆散する。

それを確認した後、俺は変身を解く。

「ふう、なんとかなったな」

俺はそれと共に懐にギアトリンガーを入れる。

「あんた、なんだよ、さっきの強さは」

それと共に変身を解除したフリーナはこちらに詰め寄ってくる。

「言っただろ、こういうのは慣れてるって」

「いや、そういう話じゃなくて」

「私達よりも強かったじゃないですか」

二人の言い分を聞きながらも、パトローラが近づいてくる。

「にしても、貴方。本当に何者なんですか？ あのゴースターロイドは私達二人で追い込まれました。」

いくらあの強化スーツやセンタイギアでしたっけ？

あれがあつたとしても、あの手際は異常です」

「だから、こういうのには慣れているだけなんだよ」

俺はそう言っていると、時が再び動き出した。

「んっ、お前達、何時の魔にそこに？」

「えっ、時間が」

「まあ、話は後日で」

そう言い、俺はそのまま坂本達の元へと戻っていった。

「貴様っ、エマだけではなく、あのAクラス美人姉妹にもっ！」

「またこのパターンかよ!!」

待ち受けたのは、FFF団との戦闘だった。

全力合体!ゼンカイオー!!

FクラスとAクラスとの戦いの結末。

それは俺がFFF団との激闘を繰り広げている間に、終わりを迎えていた。

「まさか、負けるとは思わなかった」

「それよりも、毎回あの人数でよく生き残れているお主の方に色々と疑問があるんじゃないか」

無事に全員を気絶させた後、戦いの結果の感想を呟いていると、同級生である木下秀吉からの一言に疑問に思う。

「それ程か?」

「いや、これを見てか?」

そう言われ、後ろに積み上がったFFF団の死体の山を見てみると、確かにその感想は最もだと思う。

「まあ、別に死んだ訳じゃないし、良いか」

「それはなんというか、軽いといふかなんというか」

若干引いた様子を見せている木下にどう説明しようか迷っていると

「何をしているんですか、介人さん！」

「さっさと向かいますよ！」

「向かうって、どこにだよ？」

俺がそう悩んでいると、急いだ様子で近づいてきたエマに手を引つ張られる。

「これから詳しい説明をする為にも介人さんが必要なですから、さっさと行きますよ！」

「ちよっお前?！」

その言葉と共にエマに引きずれる形で、とある場所へと向かった。

「えっと、こつちで合っているはずですね」

「ねえ、いい加減、どこに向かっているのか、教えなさいよ」

「というよりも、このメンバーは一体」

エマに引きづられる形で俺とエマ、それにボイジャー達と共に辿り着いたのはどこかの喫茶店だった。

「えっと、何々？」

「スナックゴン？」

「すつスナックって、なんでこんな所に」

「良いから、さっさと入りますよ！」

ほら、入りますよ」

エマに促されるように、俺達はそのままスナックゴンの中へと無理矢理入らされた。「いらつしやい」

そこにいるのは、剣闘士を連想させるロボットで長髪を後ろに束ねた様なパーツが頭に付いているキカイノイドがおり、カレーを作っていた。

「マスター、今、案内してきました!!」

「本当に集められましたか。」

まさか介人さん以外のメンバーも集まるとは

「どうですか!」

「これこそ、私の実力ですよ!」

そう言いながら、マスターと呼ばれる人物に自慢げに語るエマ。

「それで、いい加減に話してくれるかしら?」

そもそも、あいつらは一体何者なの、それにこのギアトリンガーって、なんなの?」

「ああ、そこからですか。」

まあ良いでしょう」

そこからエマはこれまで戦ったワルドの事について、そしてギアトリンガーとゼンカイジャーの事について。

「なんとというか、色々とんでもない事だな。」

まさかゴレンジャー以外に世界を守る戦隊がいて」

「その戦隊と悪の組織の力が一体化した敵が現れるなんて」

「それは確かに分かったわ。」

けど、一番の疑問はあいつだ!!」

「俺?」

その中で、俺に思いっきり指をさすフアリーナ。

「そっすよ、なんだか話を聞いてると、エマは最初からこいつの事をメンバーにする気満々みたいだったけど、こいつは何をしたんだ?」

「ああ、介人さんは多分、この中でも別格ですよ。」

以前のゼンカイジャーのリーダーを務めていましたし、戦闘経験も豊富です。

今回の事態にはこれ以上ピツタリな人はいないですし」

「まあ、あの強さならばな」

「何よりも、彼にはあの偉大なアカレンジャーの孫という事でもありますしね!!」

「おい」

俺はすぐにその言葉をすぐに止める。

「あ、アカレンジャー?」

まさに未だに正体が分からないアカレンジャーですよね!!」

その言葉に全員が驚きを隠せない様子だった。

「むっ、皆様、どうやらさっそく仕事のようです」

そう言っていると、何かに気づいたのかマスターは時計を見つめる。

「本当ですか、マスター!?!」

「それって、まさか?」

「ええ、ワルドです」

「はあ、んじや行くとするか」

それと共に俺達はそのままマスターの言う目的の場所へと向かう。

そこには紫色のネジレンジャーというべき存在がおり、その身体には黄金のアーマ―を身に纏っている。

「あれは一体」

「あれはネジレンジャー、まあメガネジレと言った所だな。

という事はボルジャル、お前と同じ力を使っている訳か」

「俺と同じ力っ、だけど、この力は!」

「ああ、誰かを守る為の力だ。

だから、これ以上はさせない」

「ええ、その通りです」

その言葉と共にマスターが手にしているのは、ギアトリンガーだった。

「えっ、ギアトリンガー!?!」

「失礼、私の名はバイオン。」

まあ、5人目のメンバーという事ですよ」

【33バーン!シンケンジャー!!】

その音声が鳴り響くと共に、俺達の周りには何時の間にか黒子が現れ、太鼓の音と共に陣幕を張っていく。

「なっなんだっ」

メガネジレは突然現れた弾幕に驚きを隠せないまま、俺達はそのまま弾幕の前に向かう。

「なっお前は一体!?!」

「ああ、そんなの決まっているだろ、お前をぶっ倒す戦隊だよ」

それに対して、俺達はそのままギアトリンガーに各々のセンチギアを装填する。

【8バーン!】

【11】【チェンジ全開!!】【111】

【ババン!ババン!ババン!ババン!ババババーン!ゼーンカイバイオーン!】

その音声と共に弾幕が俺達の変身によって吹き飛ばされると共に、変身が完了する。俺達は勿論だが、マスターが変身したのは、バイオロボに似た姿で胸にはバイオマンのマークがあり、剣と盾を装備しており、額にはバイオマンの作品番号を表す「08」が振られている。

「さてつと、5人揃った事だし行くぜ!!」

秘密のパワー!ゼンカイザー!!」

「これは、なんとというか慣れないな?宇宙のパワー!ゼンカイボイジャー!」

「そう言わない、パトロールパワー!ゼンカイパトラー!!」

「うう、格闘パワー!ゼンカイフアリーナ!!」

「では、科学のパワー!ゼンカイバイオン!!」

俺達が各々が名乗り終わると共に、そのまま構える。

「それじゃ、久し振りに5人揃って!」機界戦隊!ゼンカイジャー!!」

「えっ、これ」

「どうするんだ?」

「うう」

俺とバイオンは同時に名乗るが、未だに不慣れな3人は恥ずかしがっていた。

「たく、さっさと全力で行くぞ!!」

その言葉と共にギアトリンガーの引き金を弾きながら、メガネジレに向かって走り出す。

「ぐっ、いきなり現れて、貴様あ!!」

同時に俺に対抗するようにネジレンジャーの武器である剣を取り出し、対抗する。

「それでは、私もって」

そうしていると、メガネジレを守るように、機械の兵士が次々と現れる。

「こいつらは一体!!」

「まさか、戦闘員ポジションの奴らですか?!

こんな街中で!」

「ああ、もう、厄介な事に」

それと共にメガネジレとの行く手を阻むように、ボイジャー達の前に立ちはだかる。

「それは些か困りますね。

では」

その言葉と共にゼンカイバイオンはそのままギアトリンガーにセントアイギアを装填する。

「18バーン!カクレンジャー!」

その音声が届き響くと共に、ゼンカイバイオンは瞬く間に分身をすると共に、その手

に持った盾で目の前に遮っていた戦闘員達をそのまま押しつけ、道を作る。

「すつすげえ」

「セントアイギアには他のスーパー戦隊をイメージした力があります!」

なので、知れば知る程、そのセントアイギアの力は大きくなります!!」

「なるほど、つまり勉強すればする程、強くなる。」

「召喚獣みたいか」

「これから、必要な科目が増えそうね」

「うう、マジかよ」

そう言っている間にもメガネジレの元へと辿り着くと共に、そのまま蹴り上げる。

「おお、来たか」

「良いから、さっさと倒すわよ。」

「何か良い手はないの?」

「だったら、丁度良いのがあるぜ。」

「少し手伝って貰うぜ」

その言葉と共に俺はセントアイギアの一つをそのままギアトリンガーに装填する。

【25バーン!ガオレンジャー!】

その音声で鳴り響くと共にガオレンジャーの幻影がそのまま俺達に重なる。

同時に俺の持つギアトリンガーが持ち手になり、各々の武器が合わさる事によって、巨大な剣が完成する。

「私のトンファー、ここだよね!？」

「ロッドかここって」

「俺のロケット、剣に突き刺さって、大丈夫なのか?!」

「なるほど、このようになりますか」

「名付けて！破邪全力剣!!」

ほら、背中支えて支えて!!」

俺はそう言うと、未だに混乱しているメンバーに指示をしながら、そのまま俺は構える。

「ぐっ、こんなっ、事で」

「邪気…退散!」

その掛け声で巨大な円を描いた後に、唐竹割りのように勢いよく振り下ろし、それと同時に伸びた巨大なエネルギー刃で、そのままメガネジレに向けて振り下ろす。

「がっがあああ!!」

その雄叫びと共にメガネジレはそのまま真っ二つに切り裂かれ、そのまま爆散する。

「ふう」

「ねえ、これって、本当に合っているの?」

「さあ?」

「だけど、これで事態は解決だよね!」

「だと良いけどな」

「見て下さい」

そう言っていると、倒されたメガネジレのギアだと思われる物が転がり、そしてそのまま巨大な何かへと変わっていく。

「があああ!!」

「ああ、やっぱりこのパターンか」

「これって、まさか巨大化なのか!?!」

「どうするの、こっちにもいたっけ!?!」

「いますよ、という事でマスター」

「はあ、仕方ありませんね。」

それでは、ボイジャー君、一緒に頼みますよ」

「えっ頼むって、どういう」

紫色の機械の悪魔、メガネジレがまさに街に襲い掛かろうとしていた。

その大きさは既に周りにある建物を遙かに超え、近くにあるビルと同等の大きさまで巨大化していた。

「これで、キサマヲを殺す!!」

それと共に捻れまくった殺意を街に住む人々に向けながら、手には電流を走らせ、襲い掛かろうとした。

その瞬間

「そんな事、させるかよ!!」
聞こえる雄叫び。

それに合わせるように空からメガネジレに向けて、数え切れない程の弾丸がメガネジレに襲い掛かる。

機械の身体に火花を散らしながらも、そのダメージはまるでなく、一瞬怯む程度だった。

何かが攻撃を仕掛けてきた。

それを感じたメガネジレが睨んだ先に見えたのは、二つのマシンだった。

一つは黒いスペースシャトルの形状をした小型宇宙艇。もう一つは緑色の飛行機である。

響渡る3つの声に驚きを隠せないメガネジレを余所に、彼らは合わせる。

「行くぜ、全力合体だ!!」

それと共にその飛行機に乗り込んでいた介人の言葉は合図を送ると共に手に持っていたギアトリンガーの引き金を弾く。

『おお!!』

それに合わせるように二つのマシンは介人の声に合わせるように変形していく。

二つのマシンが形が変わり、それぞれがまるで人の半身を思わせる形へと変わりながら、ゆつくりと宙を飛ぶ介人に重なるようになっていく。

小型宇宙艇に装着されていた巨大なロケットは、そのままマシンの背中に装着されゆつくりと、合わりながら蒸気が鳴り響き、やがて一体化した事によって、一つのロボへと合体する。

【ゼーンカイオーボイオンツ!!】

誕生したロボの名、ゼンカイオーボイオンを証明するように響渡る声。

同時にゼンカイオーボイオンは背中にあるロケットの噴射で巨大な身体を支えられながらも、両手には武器となる剣と盾を構えながら、メガネジレに構える。

「悪いがこつからは全力全開でてめえを倒す!

行くぜ、ボイジャー! バイオン!」

「ああ!」 「了解した!」

介人の言葉に合わせるように合体した二つのマシンであったボイジャーとバイオンは叫び、空を舞い上がる。

先程までの二つのマシンからでは考えられないスピードで空を飛びながら、真つ直ぐとメガネジレへと迫る。

「近づけさせるか！」

それと共にメガネジレはその手を真つ直ぐとゼンカイオーボイオンに向ける。

そこから放たれる雷はゼンカイオーボイオンに襲い掛かるが、ゼンカイオーボイオンを捕らえる事はできなかつた。

「何?！」

驚くと同時に、ゼンカイオーボイオンの持つ盾がその攻撃を防いでいたのだ。

「バカな……こんな小さな盾如きで私の攻撃を防ぐなどできるはずがない！」

その言葉に介人は答えない。

ただ黙つて右手に持つ剣を構える。

それと同時に剣先が光輝く。

「貫け!!」

その一言と共にゼンカイオーボイオンの持つ剣は真つ直ぐに伸びる。

しかしそれはただ伸びただけではない。

剣先はまるでドリルのように回転しながら真っ直ぐに伸びていく。

そしてそれが今、目の前にいる敵を貫く為に

「ぐわあああつ!!」

悲鳴を上げるメガネジレ。

だがそれも無理はない。

彼の持つ機械の身体には既に無数の傷が生まれていたからだ。

「ぐつ、まさかつ、あの一瞬でここまでダメージをつ、だがそれがどうした!!」

その言葉と共にメガネジレはその手にはまるで捻れた電子の塊を思わせる剣と盾を手に取り、構える。

「もうお前の攻撃は通じんぞ! さっきは油断したが、今度はそうはいかん!!」

「……………」

それを聞いた介人は少し考える。

(確かにこいつは強い)

その身に纏う鎧の防御力もそうだが、その攻撃力は凄まじく、まともに喰らえば一撃必殺といっても過言ではなかった。

しかし

「なら、こーういーうのはどうかな?」

その瞬間、ゼンカイオーボイオンの背中にあったロケットが再び展開し、そのまま炎を吹き出し始める。

「何をすするつもりだ!」

その行動に疑問を持つメガネジレだったが、次の瞬間その疑問はすぐに解決された。

「力を借りるぜ、タイムレンジャー!」

「24バーン!タイムレンジャー!」

その音声が鳴り響くと同時にゼンカイボイオンの前にはタイムロボの幻影が現れ、そのまま一体化する。

同時にゼンカイオーボイオンも変形し、それはまさに巨大戦艦というべき存在へと変わっていた。

「なんだその姿は?!」

驚きを隠せないメガネジレを余所に、ゼンカイオーボイオンは変形した事により出現した巨大な砲口を向け、そして発射する。

そのビームの威力はすさまじく、命中した場所を爆発させる。

「うおおおおっ!!!」

それを受けた事で大きく吹き飛ばされるメガネジレ。

だがそれだけでは終わらなかった。

ゼンカイボーイオンは巨大な砲台を背につけ、そのまま再びロケットを噴射させ、加速した状態で一気に接近する。

「まだだあっ!!」

それに対抗するように、メガネジレもまた剣を突き出す。

しかし先程の攻撃により受けたダメージが大きく、既に体力の限界を迎えつつあった彼は突き出した剣を振り下ろす事ができなかつた。

「この私が負けるなどっ、あるわけがないだろう!」

叫びながら振り下ろされる剣に対し、介人は避けようとしなかつた。

それどころか寧ろ自ら向かっていき、そのまま真っ直ぐに刃に向かっていく。

「まだまだ、こっつちだあ!」

【32バーン!ゴーオンジャー!】

その音声で鳴り響くと共にゼンカイボーイオンの両腕には金色のヘリコプターと銀色のジェット機を思わせる腕が生え、そのままメガネジレに狙いを構える。

「トリプターパタリオット!」「ジェットラストラホーク」

その雄叫びと共にメガネジレに向かって無数のミサイルが襲い掛かり、そのままメガネジレを大きく後退させる。

「ぐう」

「全力で決めるぜ!! バイオンセイバーフライングカッター!!」

それと共に再び両手を元の状態に戻したゼンカイオーはそのまま背中 of ジェットの噴射を最大までにすると共にエネルギーを集めたバイオンセイバーをそのままメガネジレを真つ二つに切り裂く。

「がっがああ」

その一撃を食らい、限界を迎えたメガネジレはそのまま膝からゆっくりと倒れ、爆散する。

「はあ、休みなのに、面倒だな」

俺はその日は休日だが、補習を受けていた。

理由はFクラスという事もあり、補習対象を受けていた。

「というよりも、明久は何をそんなに見ているんだ?」

「だって、海城さんの弁当がカレーって、羨ましますよ!!」

そう言いながら、今日持ってきたカレーを見ながら言う。

これはマスターが俺の支援という事で作ってくれたサファリの伝統カレーだ。

それも大盛りという豪華仕様。

「明久はカップラーメンのなんだ、それは」

「64分の1サイズだそうだな」

まあ、そいつの事は良いとして、お前、新聞見たか？」

「どうでも良くないよ!!」

そう文句を言う明久を余所に坂本が持ってきた新聞を見る。

「えっと、これって」

「なんでもゴレンジャー以外にも新たなヒーローが出てきたらしいぜ」

未だに謎に包まれていて、話題が出ているそうだけ」

「ああ、それって丁度僕がメイド服を着て、逃げていた頃か」

「お前はお前で何があったんだ」

未だに疑問がつきない事は置いておき、改めて見る。

今回は召喚フィールドで戦っていないので、時間が止まっていないから世間では当たり前のように公開されている。

だが、元々多くの危機に直面していたこの世界なのか、そういうのには大きな耐性を持つており、次の日には普通の日常を送れるぐらいにたくましい。

「にしても、こいつらの名前、なんだか聞いた限りだとEクラスの奴とあのAクラスの姉妹の名前とよく似ているらしいな」

「まあ噂程度だろうけどな」

地図と宝と欲望

「まさか、登校中に襲い掛かってくるとはな!!」

そう言いながら、俺は目の前に襲い掛かってきた敵を睨み付ける。

そこにはジェットマンをまるで歪な姿へと変えた奴、ジェットシゲンだった。

俺はすぐに他のメンバーにも連絡をつけたが、何時来るか分からない。

「なるべく被害を抑えて、戦うしかないよな!!」

「チェンジ全開!!」

ゼンカイザーへと変身した俺は、そのまま道路に現れたジェットシゲンが空を舞いながら襲い掛かってくる。

「空を飛ぶんだったら、俺も空で対抗するしかないなっ!」

「40バーン! ジュウオウジャー!」

俺はすぐにギアトリンガーにジュウオウジャーギアを装填し、そのまま力を解放する。

それと共に俺のマントから赤い翼を思わせる幻影が現れると共にジェットシゲンに對抗するように空を飛び、その手にはジュウオウイーグルの専用武器である鳥獣剣イー

グライザーを手を持つ。

空を飛ぶ俺達はそのまま空中戦を行うように、手に持つイーグライザーとジェットシゲンの鉤爪同士がぶつかり合う。

青い空の下で戦いながら、地上には未だに登校している学生や出勤中の会社員の姿が見える。

彼らを巻き込まない為にも、俺はなるべく天へと舞い上がりながら、ギアトリンガーをジェットシゲンに向けて引き金を弾く。

「ふんっ、そのような攻撃など、当たらん!!」

それと共にジェットシゲンはそのまま宙で回転しながら、弾丸を避けながら、背中にあるキャノン砲で攻撃を仕掛ける。

俺のよりも強い威力を持つ砲弾に対して、手に持ったイーグライザーを剣の形態から鞭へと変え、その砲弾を巻き付け、そのまま襲い掛かるもう一つの砲弾に当て、攻撃を相殺させる。

「ほう……中々やるではないか」

そう言いながらも、ジェットシゲンは再び空へ飛び上がると同時にそのまま再び接近し、攻撃を仕掛ける。それに対して俺はイーグライザーを構えて迎え撃つ。

だが、このままではジリ貧になると思い、俺は一旦距離を取るように地上に落ちる。

「逃げるのか？」

「いいや、こうするんだよ」

「18バーン！カクレンジャー！」

その音声が鳴り響くと共にカクレンジャーの幻影が現れると共に、俺の身体に一体化する。

「分身之術！」

その言葉と共に俺の身体は一瞬で8人に分身すると共に再びジェットシゲンに攻撃を仕掛ける。

「なにつ」

さすがにこれには驚いたようで、先程までの余裕そうな表情ではなく驚きの表情を浮かべていた。

そして、同時に8人の俺が次々とジェットシゲンに攻撃を仕掛ける。

高速で動く8人の動きに対して、ジェットシゲンは対応できずにいたが、それでもなんとか反撃を行おうとするが、それよりも先に俺達の攻撃の方が早く決まる。

8つの攻撃を受けたジェットシゲンはそのまま地面に向かって落下していく。

「今だっ！」

「なにつ？」

俺の言葉に疑問に思ったジェットシゲンは地上を見ると、そこには俺以外のメンバーが既に待ち構えていた。

【キラメイジャー】【カーレンジャー】【デカレンジャー】【ゴーオンジャーギア】

そこにはゼンカイバイオンはシャイニーブレイカー、ゼンカイボイジャーはガレージランチャー、ゼンカイファリーナはマフラーガン、ゼンカイパトローラはハイブリッドマグナムを手を持っていた。

「二」ビーグルドリフト・IV・バレット「三」

ジェットシゲンを中心にして円を描くようにを滑る様に移動しながらジェットシゲンを四方向からハチの巣にしてワルドが弱った瞬間ガレージランチャーをハイウエイバスター、マフラーガンをフォーミュラーノヴァに合体させて四方向から攻撃を放つ。

先程までの空中戦の影響もあってか、すぐに空中で体制を変える事ができず、そのまま爆散する。

「倒せたか!？」

「いや、まだだ!？」

その言葉と共に煙の中から出てきたジェットシゲンは巨大化し、俺に向かって掴もうとした。

「ぐっ」

「危ない、フアリーナ!」「ああ、確か、こうだったよね!!」

その言葉と共に襲い掛かろうとしたジェットシゲンに對抗するように、パトラーとフアリーナが巨大化し、そのままジェットシゲンに攻撃を仕掛ける。

「よしっ、介人!!」

「ああ、全力で合体だ!」

その言葉と共に、俺はそのままギアトリンガーの引き金を弾く。

それによつて、パトラーとフアリーナの二人はそのまま変形し、各々の特徴である虎型ロボフアリーナタイガーとパトカー型ロボパトラーパトカーへと変形する。

「全力合体!!」

その叫び声に合わせるように二人のロボットが合体する事によつて、新たなロボットへと生まれ変わる。

緑とオレンジの二色で形成され、巨大ロボ、ゼンカイオーパトリーナ。

合体が完了すると共に、その手には専用武器であるパトラーライフルを二丁拳銃で構える。

「さあ行くぜ!!」

そう言つてゼンカイオーパトリーナはパトラーライフルを構えて引き金を引く。

すると銃口からビーム弾が連射され、その先にはジェットシゲンへと向かつていく。

だがしかし、相手もただ黙ってやられる訳もなく、鉤爪を振るい、飛んでくるビーム弾を全て斬り落とす。

そしてそのまま一気に距離を詰めると、今度はこちらから仕掛けてくる。

相手の鉤爪による斬撃に対し、こちらはパトローライフルを振り回す事で応戦する。

お互いに高速移動しながら繰り出される攻撃を避けつつ、時には受け止めながら攻防を繰り広げる。

そして一旦距離を取ると、次はお互い同時に駆け出して接近し、再び攻撃を仕掛け合う。

そんな風に戦いを繰り広げている中、突如として上空に影が現れる。

それは先程までジェットシゲンがいた場所であり、そこに視線を向けるとそこには既に彼はいなかった。

一体何処へ？と思った次の瞬間、背筋に悪寒を感じ取り咄嗟に飛び退くと同時に、今までいた場所に何かが落ちてきて地面が大きく揺れた。

慌ててそちらの方を見ると、そこには大きな翼を広げて空に浮かぶジェットシゲンの姿があった。

どうやらあの一瞬の間に飛び上がって上空に逃げていたようだ。

しかもそれだけでは終わらず、彼の周りを取り囲むように無数のミサイルポッドが出

現しており、そこから一斉に大量の小型ミサイルを発射してきたのだ。

「だったら、これだ!!」

「12バーン！ライブマン！」

すぐに取り出したセントアイギアを発動させると共に、そのミサイルを防ぐように現れたのは、バイソライナーとサイファイヤーの二つのロボだった。

二つのロボはそのままミサイルを打ち抜くと共に、そのままゼンカイオーと合体する事によって、巨大なロボへと変わる。

「行くぜ、必殺全開!!」

それと共にゼンカイオーパトリーナはパトラーライフルを構えると共に、両肩のパーツからエネルギーがパトラーライフルへと集まる。

「パトラーライフルスーパービッグバースト！」

それと共に引き金を弾き、その一撃を真っ直ぐとジェットシゲンを貫く。

「任務完了！」

それと共に俺はそのまま地上へと降り立つ。

同時に変身を終える。

「はあ、とりあえず学校へと向かうか」

「えっ、介人君!？」

「……」

俺がすぐに降りると共に変身を解除させると、そこには丁度吉井達の姿があった。

「……なんで、そこに？」

「いや、実はさつきまで、そこで倒れていたんだけど、起き上がったら、丁度変身を解除している介人が変身を解除しているのを見掛けて」

「ああ、見られた以上は仕方ないな。」

まあ、そういう事だ。

とりあえず、詳しい話は学校に行つてからな」

「うう、まあ良いけどさ」

「色々と聞きたいけど、ここで聞く事じゃないしな。」

「というか他のメンバーは」

「もうどっか行つた」

とりあえず、正体がばれたのが俺だけならば、他のメンバーをばらす必要はない。

そんな事を思っていると、俺達が学校に辿り着くと、何やら騒いでいる様子。

「何があつたんだ？」

そう気になった俺達は人が集まっているポスターへと目を向ける。

そこには「豪華賞品争奪オリエンテーリング大会」が開催されることになったらしい。

問題を解いて宝物のありかを見つけるといふもの。

「これだ!!」

そうしていると、何やら叫びだした吉井。

「どうしたんだろ?」

「さあな、あいつ朝からあの調子だからな」

それを見た坂本も首を傾げたが、そうしていると吉井はすぐに姫路さんの元へと向かう。

だが、どうやら既にチームを組まれているようだった。

「という事で助けてよお!!」

介人だったら、この状況どうにかできるでしょお」

そう言いながら、泣きながら、俺に土下座してくる。

「まあ、介人さん。

これも世の為、人の為。

ここは一緒にチームを組みましょうよ」

そう提案したのは意外にもエマだった。

「珍しいな。

お前はこういうのはサボるかと思っただけど」

「ふふつ、まあ、その代わり。」

「介人さんが見つけた商品で欲しいのがある場合は私を通して下さいね！」

「ああ、いつものエマだわ」

「相変わらず、Fクラスの男子に負けない屑っぷりだな」

「なんとも言うって下さい！」

「そうして、俺とエマ、それに吉井と坂本と木下の5人によるチームを組む事になった。」

「けど、チームを組んだとして、このメンツでどうやってやるんだ？」

「そこは任せてよ。」

「僕達にはこれがある!!」

「そう言い、吉井が手に持ったのは」

「鉛筆?」

「数学にはストライカーシグマV! 現国はプログレム・ブレイカー! そして歴史には」

「シャイニング・アンサー!」

「ようするにただの運試しじゃな」

「それにはさすがに木下も呆れたようにため息を吐く。」

「仕方ないな。」

「()で借りを返すか」

「えっ、どういう事？」

俺はそう言うと共にギアトリンガーを取り出す。

「えっなんで、それを取り出すのっ!？」

「こう使うんだよ」

【4ーバーン！キュウレンジャー！】

俺は吉井達の疑問に答える前にキュウレンジャーギアを装填し、そのまま発動する。

同時に出てきシシレッドの幻影が現れ、そのまま俺の身体と一つになる。

「キュウレンジャー？」

それって、確かAクラス戦で出てきた奴だよな？」

「そんなのがテストと何の役に立つんだ？」

「吉井、とりあえずその鉛筆を貸して」

「えっ、良いけど？」

そのまま渡された鉛筆を持つと、俺はそのまま投げる。

先程と同様に転がった事で出た数字を見て、そのまま答えを書く。

「とりあえず、ここに行くか」

「まさかの運頼り!？」

「さっきのは一体なんだったんじゃ!？」

「ああ、それだったら大丈夫ですよ」

俺の行動に疑問に思いながらも、迷いなく歩く俺と一緒に行くエマに戸惑いながらも3人はついていく。

そうして辿り着いた体育倉庫にある跳び箱を開ける。

「よし、あった」

「マジでか、どういう事なんだ!?!」

そこに商品があつた事に対して、坂本はさすがに驚きを隠せず、思わず叫んでしまう。「ふふつ、先程使ったギアの名は宇宙戦隊キュウレンジャーです。

このことは違う世界で宇宙を救う為に戦ったスーパー戦隊です」

「まさか、宇宙までとはな。

だけど、それと、この状況と何が関係しているんじゃない?」

キュウレンジャーの事を解説されて、納得した様子だったが、すぐに別の疑問が出てきた秀吉がさらに疑問を言ってくる。

「ええ、キュウレンジャーの一人であるシシレッドは宇宙一のラッキーな人物であり、キュウレンジャーギアはそんなシシレッドの能力を発動できるんです」

「なるほど、宇宙一のラッキーがあれば、このバカの鉛筆も必殺の武器になる訳か」

「それって、僕に文句がある訳!」

「ただど、凄いや！」

「見てよ、これ！」

「どれどれ」

そのまま俺達が当てた商品が全員が、それを見た。

「えっと、カップル専用如月グランドパークプレミアムチケット？」

「どこがラッキーだ、この野郎!!!」

それを見た瞬間、坂本はこれまで見た事のない絶叫と共に倒れ込む。

「どうしたんだ、いきなり？」

「雄二は霧島さんと一緒に行けるのが嬉しくて、困惑しているんだよお」

そう言いながら吉井は何事もなかったように呟くが、そんな吉井の胸ぐらを掴む。

「おい、てめえのそのくだらない鉛筆の仕業だぞっ」

「おいおい、このラッキーを理解できないのかよ」

二人は睨み合っているが

「まあまあ、坂本さん。」

「ここは一つ、私から買いませんかあ」

「なっ」

その言葉と共に坂本は驚愕した表情を見せる。

「貴様っ何を」

「別に良いですよ。」

ただ、私には、高額で買ってくれる人に、心当たりがあ、あるんですよ」

「こっこのゲス野郎っ!!」

分かった、買ってやる！」

「毎度」

そのチケットの間に黒いやり取りが目の前で行われた。

「けど、これで証明されたよ！」

この調子で、どんどん使っていけば、勝てる!!」

宝と死亡フラグ

「いやあ、この調子だったら、なんとかなりそうだね!!」

「後ろの光景を見て、よく言えるな」

そう言いながら、先程から覇気がなくなった坂本を見ながら、俺は思わず呟いてしま
う。

「いやあ、別にいつも通りだから、気にしないでよ！」

それよりも次の所へ行こう!!」

その言葉と共に俺達に向かってのは、教室だった。

その教室にある一つの机だった。

「ここに何が？」

「っ！」『立ちました!!』

俺が机の前にした瞬間、聞こえたのは今は別の世界にいるフラグちゃんの声だった。

なぜ、ここでフラグちゃんの声が聞こえたのか分からないが、ゆつくりと俺はその場
から離れる事にした。

「んっこれはお菓子ですか？」

「けど、商品の中にお菓子なんて、あれ、介人さんは？」

俺はその場の全員が気づかないようにこっそりとトイレに向かった。

そして、数分後、俺が教室に戻ってくると、そこには体育座りで座っている木下と死体のように倒れている吉井達の姿があった。

「ありがとう、フラグちゃん。」

君のおかげで、助かったよ」

『いや、こんな惨劇を見て言った台詞がそれですか!!』

なぜか幻聴のはずのフラグちゃんの突っ込みが聞こえたが、とりあえず俺はゴーゴーファイブのギアを使い、蘇生を行った。

「介人、貴様よくも僕達を見捨てたな!!」

「酷いですよ!」

ヒロインである私を見捨てるなんて!!」

「いやあ、何か聞こえるが、とりあえず、次を回すか」

何か外野が五月蠅いが、とくに関係ない。

俺はすぐに次を当てる為に鉛筆を取り出す。

「いや、待て!」

それは本当にラッキーなのか!

さつきから、誰か一人は絶対に不幸になっているぞ!!」

「ええ」

だが、坂本はすぐに俺を止める。

「そんなに不幸になっているか？」

「いや、なっていますよ！

その証拠にさつきなんて、私達思いつきり死にかけましたよ!!」

あの後、何が起きたかについては詳しく聞いていない。

聞こうとしても、なぜか言わなかった。

おそらく、身内の犯行だと考えるべきで、こいつらの事だ。

次の機会の時に俺をそれを喰わせようと考えているだろ。

「けど、残りはかなり少ないぞ。

このまま何もしないのはどうだか」

「うぐっ、確かに。」

問題を解くにも時間がかかるし、だけど、これに頼つたら、確実に何か起きるし」

そう言いながら、吉井は頭を悩ませる。

すると

「・・・そうだよ、わざわざ問題を解く必要はないんだ!!」

「とうとうと?」

その言葉に俺達は思わず首を傾げる。

「答えになりそうな全ての座標を片っ端から潰していくんだ!!」

「けど、それって、かなり無茶な作戦では?」

「どの道、このまま解決手段はない!!」

「だったら、やるしかないだろ!!」

その坂本の一言に俺達は頷き、そのまま探し始める。

その道中は様々な事が起こり、何度かあったものの結局見つからずに屋上へ戻ってくる。

「やばい、結局見つからない」

「僕なんて、酷い目にあつたのに」

「というよりも、なんで秀吉さんはチャイナ服を着ているんですか」

「そう言いながら、ボロボロの状態になっているエマ。」

その中でエマがふと、何かに気づいたのか、そこにあるタイルを手取る。

「これって、まさか最後の商品じゃないですか!!」

「えっ嘘、ラッキー!!」

その言葉と共にその場にいた全員が笑みを浮かべるが

「あら、それはどうかしら？」

「えっ？」

聞こえてきた声、それと共に振り返るとそこにはなぜか木下によく似た女性に確か坂本の恋人の子で確か霧島という子。

それに加えて、緑髪の子にパトローラとフェアリーナまでいる。

「これって、もしかして、ピンチか？」

「介人さん、あなた、私的な理由でセンチタイギアを使いましたね」

「正義の味方として、それはどうなんだ!!」

「えっ、センチタイギアを知っているという事はまさか!!」

ここまで堂々と言うという事はまさかこの場にいる全員がゼンカイジャーの事情を知る訳になる。

「まさか、インチキをする奴がいるとはね」

「別にルールは破っていないだろ。」

センチタイギアを使うなって書いていないし、禁断のギアまでは使っていないだろ」

「禁断のギア!!」

なにそれ、初耳なんだけど!!」

ある意味、この学園においては最強になるギアの為、俺は使用は硬く禁じているが、そ

れには吉井達は思わず見つめる。

「まあ、とにかく、ルールによれば召喚獣バトルで奪い取るのはOKだよな」

その言葉と共に、瞬く間に召喚獣フィールドが展開され、対決する事に。

その戦力差は圧倒的であり、なんとか日本史なので、俺は得点は高いが、それでも勝てる可能性は低い。

「どつどうしよう!!」

介人、なんとか勝てる方法は」

「ない!!」

「そんなあ!!」

俺が断言した言葉に、吉井達は絶望するように俯く。

「あら、それは敗北宣言かしら?」

「いいや、これを使うんだ」

その言葉と共に俺はそのままマジレンジャーギアを装填する。

【アルティメット!マジレンジャー!】

その音声が届り響くと共に俺の召喚獣の手にはマジレンジャーが使用したアイテム、マジフォンが現れ、そのまま番号を押す。

「ジー・ジー・ジゼル!!」

その言葉と共に光はそのまま秀吉とエマの元にチアリーダーのポンポンを出現させる。

「・・・これは一体なんじゃ？」

それと共に秀吉とエマの格好はチアリーダーの格好になった。

「えつと、原点では魔法戦隊マジレンジャーに出るマジブルーとマジピンクがチアリーダーングアクションで敵を翻弄した後、敵を吹き飛ばす技です」

「なっなんて、素晴らしい力なんだ!!」

それに感銘したのはこの場では吉井だけだった。

「許さない」

「秀吉、あんたねえ」

「この場で巫山戯るとはっ」

「覚悟しろ!!」

「あははははあ、うわあ、すごい事になっている」

相手側の殺気が倍増しており、霧島は分かるが、なぜ木下の姉まであんなに怒っているんだ？

「おい、これからどうするんだ!!」

「えっ、これで終わりだけど？」

「はあ!!」

その中で一番震えている坂本は思わず声を出してしまう。

「どういう事ですか!!」

まさか、私のサービスカットの為に!!」

そうエマが巫山戯た事を言っている間にも、チャイムが鳴り響く。

「えっ?」

それはオリエンテーリング終了の放課後チャイムだった。

「これって、まさか」

「召喚獣バトルで奪えるのはあくまでもオリエンテーリングの間だけ。

それが終われば、商品は奪えないだろ」

「まさか、これを最初から狙って」

俺の考えが分かると共に目を輝かせる。

「さてつと、オリエンテーリングも終わった事だし、逃げるか」

【18バーン!カクレンジャー!】

その言葉と共に俺はカクレンジャーギアを使う。

「忍法、消身之術」

それと同時に煙とともに俺達は姿を消す。

「あつああ、待ってえ!!!」

遠くから俺達を追いかける声が聞こえたが、今はどうでも良い。

5日連続スーパー戦隊最強バトル 1日目宿命なるレッド

「(ト)は一体？」

気づけば、俺はどこか知らない謎の空間に飛ばされていた。

ふと、周りを見渡せば、そこには俺だけではなく、どうやら歴代のスーパー戦隊の先輩達も集まっているらしい。

疑問に思いながら、俺は首を傾げていると、目の前に謎の少女が現れる。

その少女の説明によれば、彼女によると、主催地の惑星ネメシスで開催される「スーパー戦隊最強バトル」に優勝すれば、500年に一度の宇宙の奇跡「メビウス・コネクト」でどんな願いでも叶うという。

「スーパー戦隊最強バトル？」

「なんだか、どこかでっつて」

「そう俺が疑問に思っていると共に俺はそのままどこかに飛ばされた。」

「その飛ばされた先には、どこかの部屋だった。」

「(ト)が集められたメンバーか」

俺はそう言いながら、周りを見渡す。

そこには俺と同じように学生服を着ている人もいれば、どこかのアイドルを思わせるような人になかなかワイルドな感じがする人。

それに

「つて、ジュラン！」

お前も同じチームなのか！」

「あつ介人か!!」

ふと、部屋の隅を見ると、そこには見覚えがある奴がいた。

「あれからは回復したのか」

「おう、今はリハビリをしている所だけど、どういう訳だが、今はこの空間に飛ばされたんだよ」

どうやら、ジュランも同じチームらしい。

あれからそれ程経っていないはずなのに、懐かしく思える。

「ふむ、どうやら思った以上に知り合いが多いようだな。

とりあえず、自己紹介からするか」

そう言い、先に話しかけたのは、眼鏡をかけた人物だった。

「俺は怪盗戦隊ルパンレンジャーのルパンレッド、雨宮蓮だ」

「えっそれって」

ある意味、俺達にとっては大先輩にあたる人だ。

まさか、一緒にチームになるとは思わなかったの、驚きを隠せなかった。

「一応、同じくルパンレンジャーのルパンホワイト、マリア・カデンツァヴァ・イヴよ」
「ルパンホワイトって、あんまり聞いた事ないな？」

「変身した回数はそれ程ないから、仕方ないわね。

とにかくよろしくお願いね」

「だったら、次は俺だな。

俺は動物戦隊ジュウオウジャーのジュウオウライオン、トリコだ！」

そうしていると共に来たのは、俺達よりも一回り大きな体格をしたトリコさんだった。

「それじゃ、俺も。

俺は機界戦隊ゼンカイザーのゼンカイザー、海城介人です！」

「同じくゼンカイジュランこと、ジュランだ。

よろしく頼むぜ、パイセン」

「海城。

もしかして、ゴレンジャーと関係しているのか？」

「まあ、俺の爺ちゃんという事になるかな」

「へえ、それは爺ちゃんに当たった時には面白そうになるな」

それを言われると、確かに気になる所でもある。

「スーパードೈブス！&！スーパージェントルマン！」

それでは、5試合連続勝ち抜いた人の勝ちとなります！

それでは、まずは第一回戦！転生者チームVS生真面目チームです!!」

その言葉と共に映し出されたのは、俺達のチームだと思われる転生者チームとその相手である生真面目チームだった。

そこには雨宮さんことルパンレッドと、生真面目チームからはパトレニー号だった。

「えっ、まさかのこの組み合わせかよ！」

それにはジュランも驚きを隠せない様子だったが、それとは裏腹に雨宮さんは笑みを浮かべていた。

「俺と戦っていたパトレニー号じゃないけど、これは確かに面白くなりそうだ」

その言葉と共に雨宮はそのまま会場へと向かっていった。

俺達はそのままテレビ画面を見てみると、そこには既に戦闘を行う為なのか、怪盗の衣装を身に纏った雨宮さんとパトレニー号の変身者だと思われる人が見つめ合う。

「まさか、他の世界にもルパンレンジャーがいるとはな」

「俺もまさかパトレンジャーがいるとは思わなかった。

けど、まあ、せつかくだ。

どっちが上か、戦ってみようじゃないか」

「例え、別人だろうと、怪盗には負けない」

その言葉と共に既に戦う気があるのか、互いに変身アイテムであるVSチェンジャーを構えていた。

「それではルール説明です！

このバトルエリア内でそれぞれの力や技をぶつけ合い、星のエネルギーの結晶ジエムを手に入れることが勝利条件となっており、ジエムさえ獲得すればそのチームは勝利となります！

それでは、試合開始です！」

その言葉を合図に、上空からゆっくりと光を放ちながら、彼らから少し離れた場所にジエムが落ちてくる。

「RED！0・1・0！マスカレイド！」〔1号！パトライズ！〕

「怪盗チェンジ」「警察チェンジ！」

「ルパンレンジャー！」〔パトレンジャー！〕

その音声で鳴り終わると共に、二人共既に変身を終わると共にゆっくりと走り出す。

スピードは雨宮さんの方が上手く、先にジエムを手に入れるというゲームにおいては既に雨宮さんの方が状況的には有利だ。

だが、それと同時に日頃から警察として、護衛任務も多く熟している事もあり、パトレン1号はその的確な射撃で雨宮さんの妨害を行いながら、確実にジエムへと近づく。だが、同時に雨宮さんも冷静にその攻撃を回避し、距離を詰めていく。

「さすがにやるな」

「そつちこそ」

互いの戦い方を見極めたのか、どちらも距離を保ちつつ戦い続ける。

「だけど、そつちのルパンレンジャーはこれを使ったかな」

「なに？」

その一言と共に場は変わった。

「ペルソナ、アルセーヌ！」

その一言と共に雨宮さんの背後から青い炎と共に現れたのはシルクハットと紳士服を身に着け、背中に黒い翼を生やした存在だった。

「ペルソナだどっ！」

それを知らなかったパトレン1号は思わず叫んでしまう。

「どうやら、そっちのルパンレンジャーは知らないようだな」

「ああ、だが、負けるつもりはない！」

【警察ブースト！】

その音声と共にパトレン1号は消火器型のスプラッシュバスターという右腕と一体化した銃に変化する。

それを合図にアルセーヌは黒い炎を、パトレン1号はスプラッシュバスターから消化液を放つ。

炎は瞬く間に鎮火するが、それでも互いに譲り合う事なく、激闘は続いていく。

その様子を見つめていると、隣で見ていたジユランはどこか不満げだった。

「なんか、思っていたのと違うな。」

もつとこう、派手というか、そういうのを期待していたんだがな」

「いや、これでも充分派手な部類だと思うぞ」

「そうかしら？ 私としては、もうちよつと地味目な方が良かったわね」

そんな事を言っている間にも、二人の対決はいよいよクライマックスを迎えようとしていた。

「決めるぞ、アルセーヌ！」 「了解した！」

その言葉と共に雨宮さんはVSチェンジャーを構え、アルセーナは手をかざす。「ジョーカー・マキシマムドライブ！」

その音声と共にアルセーナの手から放たれた衝撃波によって、パトレニー号が放った消化液が吹き飛ばされる。

同時にVSチェンジャーから放たれた赤と黒が入り交じった弾丸が真つ直ぐとパトレニー号を吹き飛ばす。

「ぐっ」

それに合わせるように、雨宮さんはそのままジエムを手を取った。

「WINNER！ 転生者チーム！！」

「よっしゃあ！！」

それを見ると共にジュランと共に喜ぶように手を叩く。

「おめでとうございます、雨宮さん」

「ありがとう。」

それにしても、まさか異世界のルパンレンジャーがあんなに強いとは思わなかった。

「こりゃ、他の世界も楽しみになって来たぜ」

「こちらとしても、そちらの世界は興味深くて仕方がない。」

また、機会があれば会いたいものだ」

「俺もだよ。」

それじゃ、次の試合もあるみたいだし、俺は行くぜ」

それだけを言い残して、雨宮さんはそのまま会場を後にしていた。

「あれが雨宮さんの実力か」

「ええ、流石と言うべきでしょうね」

そう、俺達が思っていると、何か他のチームの対戦で何かが起きているようだ。

「なんだ?」

俺達はそれを見ると、そこに映し出されていたのは

「レッドのパワー!ゼンカイレッド!」

そう名乗る謎の奴が現れた。

「知り合いかしら?」

「知らない!知らない!」

本気で知らない俺達は同時に首を横に振る。

5日連続スーパ―戦隊最強バトル 2日目最強の技術とパワー

前回まで、見事雨宮さんが勝利を収めた所までは良かった。

だが、その後、突然別のチームで戦っていたのは、俺達も知らない謎のゼンカイレッツドだった。

「本当に知らないのね」

「当たり前だ！」

というよりも、レッド枠は俺、ゼンカイジュランだから」

「まあ、別に良いけどさ」

そんなやり取りをしている間にも次の試合の発表が行われる。

「次の試合は転生者チームVS飛行チーム!!」

それと共に出てきたのは、どうやらマリアさんとトリコさんの二人が選ばれていた。

「どうやら、私達の出番ね」

「それじゃ、ちよつと行ってくるぜ！」

その言葉と共に二人はそのまま次のバトルフィールドへと向かっていった。

「結局、さっきのゼンカイレッドは一体何者だったんだろうか?」

「気にしていても仕方ないんじゃない?」

それよりも、ほら、さっそく始まるみたいだぜ」

それと共に俺達が見た先には既に二人が変身を行う場面だった。

「怪盗チェンジ」「本能覚醒!!」

それと同時にマリアさんは先程まで雨宮さんが変身していたルパンレッドを白くした姿、ルパンホワイト。

そしてトリコさんは黄色いライオンを思わせる戦士、ジユウオウライオンへと変身する。

それに合わせるように相手側も現れた。

「嵐のスカイツクパワー!ゴセイレッド!」

「孤高の荒鷲!ガオイエロー!」

その名乗りと共に、マリアさんとトリコさんの二人は互いに頷くと同時に戦いが始まる。

マリアさんの手には先程の雨宮さんが使った武器と同じVSチェンジャーでの牽制をゴセイレッドに行っていく。

だが、それに対して、ゴセイレッドもまた手に持った細身で強靱な刃のスカイツク

ソードで切り裂きながら、接近を行っていく。

「へえ、やるじゃない」

「そつちこそ、やるじゃないか」

互いの実力を認め合ったのか、マリアさんもゴセイレッドは距離を取りつつ、遠距離攻撃で攻め立てていくが、それを全て防いでみせる。

それと共にマリアさんはすぐに距離を離そうとしたが、ゴセイレッドはなんと腰に装着されたままのゴセイブラスターを放った。

「っ」

突然の攻撃に驚きを隠せず、接近を許してしまい、ゴセイレッドが迫る。

「まさか、銃を近距離に近づける為に使うとは」

「しかも、完全にあの剣の方に目を向けていた」

完全に接近戦重視だと思わせておき、実は隙を狙っていたのだ。

「これで終わりだ！」

そう言い放つと共に振り下ろされるスカイックソード。

「まだよー！」

だが、その瞬間、マリアさんの左腕の籠手が現れ、その攻撃を防いだ。

「えっ、あれって」

「あれはアガートラム。」

「マリアの持つシンフォギアだ」

「ここでもまた、聞いた事のない武器！」

そうしている間にも、籠手から短剣を引き抜き、それに連なつて引き出された無数の短剣を周囲の空中に展開させる。

「っ」

それを見てか、すぐにその場から離れようとするが、その前にマリアさんは右手のV Sチエンジャーを放ち、それに合わせるように左手の短剣で切りかかる。

「ぐあっ」

それを受けると共にスカイツクソードが弾き飛ばされる。

同時にマリアさんはそのまま上空に飛び上がり、同時に両手を広げ、周囲に展開していた短剣を一斉に放ち、ゴセイレッドを一気に貫いていった。

「マジかよ、とんでもないよ、マリア先輩は」

「どうやら、凄いのは向こうもだぜ」

ジュランはマリアの戦いを見て、驚きを隠せなかったが、俺はもう一つの試合を思わず見ていた。

ジュウオウライオンの戦い方。

それは悪い言い方をすれば力任せだが、それは規格外の力任せだ。

本来ならば崩せないだろう山を軽々と殴り壊すと共に、空を跳ぶガオイエローの道を塞いでいく。

「うおおおおおつ」

だが、ガオイエローはその拳の一撃を受けても尚立ち上がり、そのままジュウオウライオンに向かって走っていく。

「はあああああああ」

それを見たジュランは慌てるようにして声を上げる。

「ちよつ、おい！あいつ、大丈夫なのか!？」

「ああ、問題ない」

「どうして分かるんだよ」

「見ればわかる」

俺の言葉と共に二人の勝負は決まる。

ガオイエローの鋭い蹴りに対し、ジュウオウライオンは受け止めるのではなく、あえて前に出て懐に入り込む。

「何?！」

「野生解放!!」

その言葉と共に全身の毛が逆立ち、そのままその巨体を持ち上げると、そのまま地面へと叩きつけた。

「ガハッ」

その衝撃と共に地面に大きなクレーターができると共に、ガオイエローは変身解除されてしまっていた。

「そこまで、勝者は転生者チーム！」

その戦いを見て、俺達は哑然とするしかなかった。

「まさか、本当に勝ってしまうなんて」

ある意味、究極の技術と究極のパワー。

その二つが合わさった戦いという事もあって、俺達は完全に言葉を失っていた。

だが、そんな中で再び異変が起きた。

【怪盗チェンジ！】【警察チェンジ！】

「っ」

響渡る音。

同時にマリアさんとトリコさんが目にしたのは、黒いルパンレンジャーとパトレンジャーだった。

「なんだ、あの二人は？」

突然の乱入者に驚きを隠せない中で、その二人はそのまま無言でマリアさんとトリコさんに襲い掛かる。

「くっ」「いきなり何しやがる!!」

咄嗟の判断でそれぞれ避ける二人だが、その姿は先程までの物とは違い、まるで別人のようであった。

「一体、どういう事なの？これは」

「分からない。だが、嫌な予感がする」

そう言いながら二人が構えている間にも、二人はこちらを見つめてくる。

「貴方達は一体、何者かしら」

そう、マリアさんは対峙している黒いルパンレンジャーに向けて言う。

「……」

だが、未だに無言のままだった。

そうしていると共に黒いパトレンジャーはそのまま手に持ったVSチェンジャーをトリコさんの懐で攻撃を行う。

「なっ」

「トリコさんっ」

咄嗟に後ろに下がるが、それでも完全には避けきれず、吹き飛ばされてしまう。

「くっ」

「引くぞ」

「ああ」

倒れているトリコさんに向かうマリアさんを見て、黒いルパンレンジャーが黒いパトレンジャーはそう言うと共に、その場から去って行く。

「一体、なんなんだよ、あいつらは」

ジュランのその言葉に誰も答える事ができなかつた。

5日連続スーパー戦隊最強バトル 3日目恐竜パワー炸

裂！

「前回に引き続いて、現れたあいつらは一体何者なんだ」

ジュランはそう言いながら、未だに状況を飲み込めなかった。

一回戦で現れたゼンカイレッド、二回戦で現れた黒いルパンレンジャーとパトレンジャー。

この三人は俺達のメンバーは勿論、原点のスーパー戦隊も知らない存在だ。

「ある意味、それが共通点とも言えるがな」

未だに謎に包まれている存在に対して、雨宮さんは言う。

「この大会自体も怪しい所がある以上、油断はできないわ」

そう言いながらも、マリアさんは少しだけ息を荒げていた。

「マリアさん、大丈夫ですか？」

「ええ、なんとかね」

そう言いつつも、マリアさんは少し辛そうな表情を浮かべる。

「それでは準々決勝は、転生者チームVSスピードチーム！」

それと共に発表されたのは、ジュランだった。

そして対戦相手はレッドバスターだった。

「ここまで来たら、俺も先輩達に良い所を見せないとな！」

「ああ、頼んだぜ！」

「だが、気をつけろよ。」

おそらくは、奴らの仲間が出てくる可能性がある」

雨宮さんからの言葉を聞くと共に、ジュランは頷くと共に、そのままバトルフィールドへと向かう。

「悪いが、速攻で決めさせて貰うぞ」

「スピードチームだから、早く決めたいか？」

「だったら、俺達も乗るぜ」

その言葉と共にジュランはギアトリンガーを取り出す。

「16バーン！」

「チェンジ全開！」

【バーン！バーン！バーン！バーン！ババババーン！ゼンカイジュラン！】

その音声と共にジュランはゼンカイジュランへと変身し、ジュランソードとジュランシールドを構える。

「それじゃ、行くぞ！」

その言葉と共にレッドバスターは一瞬で、その姿を消した。

さすがにスーパージョウ戦隊の中でも屈指のスピードを持つだけある。

「確かにレッドバスターは早いけど、こつちだつて、まだまだ負けていないんだぜ！」

「2バーン！バーン！バーン！バーン！バーン！ババババーン！ジャツカー！」

その音声が鳴り響くと同時にジュランの前にジャツカー電撃隊の一人であるスパーードエースが現れ、そのままジュランと一体化する。

同時にジュランも同じくその姿を消した。

「あれは一体っ」

「俺達ゼンカイジャーはゼンカイギアを使う事で他のスーパージョウ戦隊をイメージした力を使えるんだ。」

あれはジャツカー電撃隊のスピードエースの透視能力や遠距離の音を聞き取り、さらには加速能力が使えるようになったんだ」

「私達の事に驚いているけど、貴方達が色々ともんでもないわよ」

そう言いながらマリアさんは呆れ果てた様子で言う。

だが、それでも俺は確信していた。

今、目の前にいる二人は確実に強いと。

だからこそ、今の俺にはこれしかできない。

「スピードアーツ！」

そうしている間にも、ジュランの手にはスピードエースの武器である弓矢を手に、放っていた。

レッドバスターもすぐにイチガンバスターでビームを放ちながら、それに対応する。だが、お互いに高速移動を行っているせいか、なかなか当たらない。

しかも、互いに一撃必殺の力を持っているだけに、迂闊に近づく事もできずにいた。「このままだと不味いな」

ジュランはそう言いながら、高速移動を行っているレッドバスターはそのままイチガンバスターで必殺技を放つ準備をしていた。

「イツツタイムフォーバスター！」

「やべえ!?!」

それを見たジュランは咄嗟に横に飛ぶ。

それと同時にレッドバスターの放った光線が先程までジュランがいた場所を通り過ぎて行った。

「危ねえ」

そう言いながら、ジュランは地面に着地する。

だが、その間にレッドバスターは既に次の攻撃の準備を行っていた。

「これで決める!!」

【イツツタイムフォーバスター!】

そう言うと共に、レッドバスターはソウガンブレードにエネルギーが溜まり、そのままジュランに接近する。

「だったら、こっちは!」

【21バーン!メガレンジャー!】

その音声が鳴り響くと共にジュランは手に持っていたジュランシールドを投げ、その上にジュランが乗る。

すると、ジュランシールドはまるでサーフボードのように自在に動き、レッドバスターの攻撃を避ける。

「そんなものっ」

レッドバスターはそのまま攻撃を続けて、次々とジュランシールドを攻撃する。

だが、ジュランシールドは破壊されたが、それはジュランはそのままレッドバスターの背後へと回る。

【32バーン!ゴーオンジャー!】

その音声と共にジュランとレッドバスターの間には道路ができ、ジュランは高速移動

して、接近する。

「サーベルストリート!」

それと共にジュランは手に持ったジュランソードでレッドバスターをすれ違い様に切り裂く。

「くっ」

レッドバスターは未だにエネルギーが溜まった状態のままのソウガンブレードで、その一撃を受け止める。

だが、ジュランの斬撃の威力の方が上だったのか、そのままレッドバスターは吹き飛ばされる。

「くっ」

「ジェム、頂きい」

それと共にジュランはジェムを取る。

「勝者、転生者チーム!」

「よし!」

「何とか勝ったぜ!」

その言葉と共にジュランが言っていると、何か気配を感じ、後ろを見つめる。

そこにはリュウソウジャーによく似た戦士がいたが、スーツの上から目玉があしらわ

れた装甲を胸部に纏っており、ベルトはリュウソウバツクルではなく目玉状になっている他、マントを羽織っている。

「なんだ、お前はっ！」

「リュウソウモリア」

その言葉と共にジュラン達が襲い掛かってくる。

5日連続スーパー戦隊最強バトル 4日目越えるべき祖父の壁

「本当に、あいつらは一体何者なんだっ」

この大会で何度も現れている謎の戦士達。

その正体は未だに分からず、これまで4人の戦士が現れた。

そんな戦いの中で俺は未だにもやもやとした気持ちが残っていた。

「未だによく分からないからな。」

これまで分かっている事と言えば、この大会に出場するスーパー戦隊を襲っている事ぐらいだな」

「という事は、次の試合でも」

その不安に伝えるように次の試合が発表される。

「次は準決勝！転生者チームVS国際チーム！」

それと共に発表されたのは、俺となんと爺ちゃんだった。

「おいおい、マジかよ」

「まさか、アカレンジャーと戦うなんて」

俺も正直言つて驚きを隠せない。

だが

「なぜだか、今はとんでもなくワクワクしてきた」

その言葉と共に俺はそのままバトルフィールドに向かった。

そこには既に変身を終えている爺ちゃんこと、アカレンジャーがいた。

その姿は初代スーツの姿であり、最新型ではなかった。

「まさかお前と戦う事になるとはな」

「ああ、悪いが爺ちゃん！

全力全開で倒させて貰うぜ」

その言葉と共にギアトリンガーにゼンカイザーギアを装填する。

【45バーン！】

「チェンジ全開」

【ババン！ババン！ババン！ババン！ババン！ババン！ババン！ババン！ゼンカイザー！】

その音声と共に俺はゼンカイザーへと変身する。

ゆつくりと俺と爺ちゃんは試合の合図と共に近づく。

まるで西部劇を思わせる静かな雰囲気の中、俺達は同時に殴る。

「やるじゃねえか、介人！」

「そつちこそ」

そう言いながら、お互いに殴り続ける。

拳に走る痛み。

それを気にする事なく、ひたすらに殴り合う。

「やっぱり、最高だよ！ だけど、勝つのは俺だ!!」

「それはこつちのセリフだ!」

そう言いながら、爺ちゃんが取り出したのはロープ状の鞭、ニューレッドビュートを取り出す。

それに合わせるように俺はギアトリンガーにセンタイギアを装填する。

「1バーン!ゴレンジャー!」

その音声と共に爺ちゃんと同じ武器であるニューレッドビュートが手元に現れる。

「はあああ!!」

互いに武器を手にとると同時に互いに鞭が激突する。その衝撃によって互いの腕が痺れるが、そのまま振り抜き、お互いを吹き飛ばす。

「まだだ!」

「17バーン!ダイレンジャー!」

その音声と共に俺の手にはダイレンロッドを持ち、対して爺ちゃんもまたニュー

レッドビュートを変形させる。

「ヤリビュート！」

同時に爺ちゃんの武器も槍へと変形すると共に再び激突する。その一撃一撃の重さは今まで戦ったどの敵よりも重く、その一撃一撃が必殺の威力を持っている。

だが、それでも俺は負けるわけにはいかない。

何故なら、俺は今、この時だけはスーパージョー戦隊最強の男、アカレンジャーと戦っているからだ!!

だからこそ

「全力で勝つぜ!!」

「ヒーロー！スーパージョー！タイム！ゴッゴ！バンバン！ダイゼンカイ！」

再度ハンドルを回すことで発動。エネルギーを銃口と頭上に集結させ、頭上に巨大なゼンカイジャーのロゴを形成。

トリガーを引くことで強力なビームを真っ直ぐと爺ちゃんに向かって発射する。

「レッドビュートパンチ！」

その言葉と共に爺ちゃんはニューレッドビュートを振るう事で先端に付いている赤い球体をビームに激突させる。

そして、そのまま弾き飛ばし、俺の顔面に直撃した。

その一撃を受けて俺は吹き飛ばされる。

だが、爺ちゃんの方も反動が大きかったのか、少しふらついている。

「っ」

同時に見えたのは真ん中にはジェムが落ちており、同時に俺達は走り出す。

爺ちゃんが先に手を伸ばし、ジェムを取ろうとするが、俺も同時に手を伸ばす。

「っ！」

「はああー！」

その瞬間、互いの手がぶつかり合い、共に弾かれる。

そのまま、俺も爺ちゃんも地面に転がる。

「よしっ、取ったぜ!!」

その言葉と共に俺の手にはジェムを確かに掴んでいた。だが、爺ちゃんはその様子を見て笑う。

「どうやら、何時の間にかすっかりと越えられたようだな」

それと共に俺達は互いに握手をしようとした時だった。

「いいや、ただ衰えたただけだ」

「っ」

その言葉と共に見つめた先にはゼンカイレッド、黒いパトレンジャーとルパンレン

ジャー、リュウソウモーリアだった。

「お前達は」

俺達が戸惑っている中、彼らは変身を解除し、俺達の前に姿を見せる。

現れたのは

「お前達は、確か理乃と組んでいた奴らー！」

そこにはかつて理乃と組んでいたジュラン達のコピー体だったステレンオー、ガルプレス、サクシーザー、クーライザーの4人だった。

「一体なんです」

「俺達はあの時の存在ではない」

「なに？」

「数多くの転生者達の恨み、それを募る事によって誕生したいわば、悪のスーパー戦隊。

つまりは」

その言葉と共に再び姿が変わる。

「レッドのパワー！ゼンカイレッド!!」

「ルパンブラック」

「パトレン—1号！」

「リュウソウモーリア！」

その言葉と共に、空には暗雲が浮かび上がる。

「あれは一体っ」

「どうやら、想像よりも早く復活するようだな」

「どういう事なんだっ」

そう言っている間にも、その影は巨大な悪魔へと変わっていた。

「おそらく、ジエムはあの悪魔を復活する為に必要な力だ。

なぜ、スーパー戦隊を集めたのかは理由は分からない。

だが、このままではっ」

そう爺ちゃんが言いかけた所で消えてしまう。

おそらくはこの場所から転移されただろう。

同時に悪魔はそのまま奴ら4人の所に現れたのは、俺を歪な姿へと変わった存在だった。

様々な本の意匠が施された全身に、頭部に当たる部分はミイラのように醜悪化したゼンカイザーが本から飛び出した造形になっている。

また本から出られず何かを叩いている様にも見える。腰のバックルには黒十字王を連想させる十字の装飾が施されている。

「さあ、ゼンカイザー」。

貴様をここで倒す」

その言葉と共にゆつくりと奴らは迫ってくる。

「まったく、とんでもない事になったな」

「ああ、本当になあ!!」

その言葉と共に出てきたのは、俺と同じメンバーであるジュラン、雨宮さん、マリアさん、トリコさんだった。

「皆っ!」

「介人、どうやらここからが正念場のようだぜ!!」

「ああ」

ジュランの言葉に頷く。

「チェンジ全開!」「怪盗チェンジ!」「本能覚醒!!」

俺達は各々の変身アイテムを使い、その姿を変える。

「秘密のパワー!ゼンカイザー!!」

「恐竜パワー!ゼンカイジュラン!!」

「ルパンレッド!」

「ルパンホワイト!」

「サバンナの王者!ジュウオウライオン!!」

俺達5人は声を合わせるように言おうと共に合わせる。

『俺達、スーパー戦隊!!』

その言葉と共に各々の武器を持つ。

「行くぜ、全力全開だあ!!」

俺達は一斉に走り出す。

そして、戦闘が開始された。

戦いが始まり、最初に接近してきた雨宮さんにルパンブラックが蹴りを放つ。

「ぐうー!」

その一撃を受けて吹き飛ぶが、彼は空中で体勢を整えて着地する。

同時に雨宮さんは迫っているパトレンナー号に向けて、VSチェンジャーによる牽制を行う。

その一撃を受け止めようとするが、雨宮さんの攻撃は受け止められるが、マリアさんはそれに合わせるようにVSチェンジャーによる牽制を行う。同時に雨宮さんの攻撃を弾かれ、その隙を狙ってジュランとトリコが迫る。

だが、パトレンナー号もすぐに反応して、その攻撃を回避する。

同時にその背後からはジュランが拳を、トリコが足を振り上げるが、その一撃も回避される。

「ちいー！」

「相変わらず、すばしっこい奴めえ!!」

その言葉を聞きながら、俺はそのまま3人から距離を取る。

「どうやら、ジエムを通して、かなり強くなつていやがるぞ、介人！」

その言葉と共にジュランは迫り来るリュウソウモーリアからの攻撃を受け止める。

「ああ、そのようだな、ジュラン!!」

同時にリュウソウモーリアに対して攻撃を仕掛けるのは雨宮さんだ。

「だけど、負ける訳にはいかないなあ!!」

「ええ、その通りね！」

【スーパー・快盗チェンジ!!】 【超・警察チェンジ!!】

雨宮さんと MARIA さんはそのままパワーアップ形態であるスーパーパンレッドとスーパーパンホワイトへと姿が変わる。

それを見たルパンブラックとパトレンジャー号は二人に対して攻撃を仕掛ける。

だが、それよりも早く、二人が攻撃を仕掛ける方が早かった。

【イタダキ・ド・ド・ドストライク】

雨宮さんはその手にはルパンマグナムを召喚し、MARIAさんは両肩にあるキャノンを構える。

「スーパースペリオルストライク！」

二人の同時の必殺技はルパンブラックとパトレン—1号直撃した。

その威力は凄まじく、瞬く間に撃破される。

それに合わせて、ジュウオウライオンはスーパーライザーへと手に持つ。

「滾るぜ！王者！」

「ライブマン！ギンガマン！ガオレンジャー！ジュウオウライオン！ロアーライオン！」

スーパーライザーが鳴り響くと同時にジュウオウライオンの姿は徐々に変わっていき

その腕には本能覚醒の時のよりも巨大で機械的な爪が装着され、脚にはジェット機を思わせるアーマーが装着される。

「さて、食事前の運動といきますか!!」

そう言い放つと共にジュウオウライオンは駆け出す。

同時にリュウソウモリアは剣を取り出し、振り下ろすが、それをジュウオウライオンは両手の爪で受け流す。

同時にジュウオウライオンはそのまま右腕の爪を突き刺すが、奴はそれを後ろに下がる事で回避する。

だが、それだけでは終わらない。

ジュウオウライオンは左腕の爪を横薙ぎに振るう。

同時にその一撃はリュウソウモリアの胴体を切り裂く。

「ぐっ」

「さあ、メインデイツシュの時間だ！」

「ローラーライオン！FINAL ATTACK！」

その音声が鳴り響くと同時にジュウオウライオンの背後に現れたのはローラーライオンの力を貸している三人の戦士、イエローライオン、ギンガレット、ガオレットの三人の戦士だった。

「ライオンバズーカ！」「ガオメインバスター！」

イエローライオンとガオレットは各々の武器を手に持ち、構える。

「唸れ、ギンガの光！」

ギンガレットの言葉と共にジュウオウライオンの爪は獣装の爪へと変形する。

同時にジュウオウライオンは駆け出し、一気にリュウソウモリアの前に接近する。

「獅子釘パンチ!!」

その叫び声と共に、ジュウオウライオンの背後から迫るイエローライオンとガオレットのエネルギーを浴びる事によって、全身が光り輝く。

そして、そのままリュウソウモーリアの胴体を殴り、その衝撃は奴の体を貫いた。

「ごはっ！」

それと同時にリュウソウモーリアは倒れ、爆発を起こす。

「ふう、あとは二人」

「だったら、介人の偽物は俺が相手だ!!」

その言葉と共にジュランはそのままキシリユウゼンカイジュランへと姿を変える。

風を纏う剣二本を両手に持ちながら、そのままゼンカイレッドへと接近する。

「ふっ、レッドになれない貴様に負ける俺ではない!!」

その言葉と共にゼンカイレッドはギアトリンガーから炎の刃を出し、ジュランと激突

する。

「それはこっちも同じことだぜー」

その声に合わせるかのようにジュランは上空に飛ぶ。

同時に背中中の翼を広げて、加速して迫る。

だが、それに対して、ゼンカイレッドはさらに火力を上げ、対抗する。その瞬間、周
囲に爆風が吹き荒れる。

「行くぜえ!!」

その爆風の中で再び通常形態になったジュランはそのままジュランソードを真っ直

ぐとゼンカイレッドに振り下ろす。その一撃に対し、ゼンカイレッドはギアトリンガーを構える。

「何度やつても無駄だ！」

「いいや、これで終わりだ!!」

その言葉と共にジュランはギアトリンガーに向かってジュランソードを叩きつける。

それにより、ジュランソードは砕け散るが、代わりにジュランはそのまま手に持ったギアトリンガーを回す。

【ヒーロー！スーパーゼンカイタイム！ゴッゴッ！バンバン！ダイゼンカイ！】

「はああっあ!!」

そのままジュランは引き金を弾き、ゼンカイレッドに向けて、エネルギーを放つ。

「ぐっ、こんな所でっ負けるとはっ」

その言葉と共にゼンカイレッドは爆散する。

「よしっこれでっ!!」

各々が倒した偽物の戦隊。

だが、その怨念というべき存在はゼンカイザーの偽物へと注ぎ込まれていた。

「なっ!!」

「怨念が溜まったぜえ!!」

その雄叫びと共に、俺達は全員吹き飛ばされる。

「おいおいっ、まさかここでパワーアップかよ」

既に先程までの爺ちゃんとの戦いもあつて身体がボロボロだった。

「まったく、お兄はいつも無茶をする」

「えっその声って?」

5日連続スーパー戦隊最強バトル 5日目 最強兄妹 タツグ

「りっ理乃!？」

「なんでここに?」

「ジュランが勝手に飛び出したって、連絡があつてね」

「いや、飛び出したというよりもここに連れて来られたんだけど!!」

「まあ、どっちでも良いけど。」

とりあえず、そこにいる奴の事を気に食わない事だけは分かったから」

その言葉と共に理乃が取り出したのはギアダリンガーだった。

「えっ嘘!？」

「まさか、理乃も」

【回せー!】

「チェンジ爽快!」

【ヨーソロー! ソーカイに、レボリユーション!】

その音声と共に理乃の姿は変わった。

それはエンデが変身していたツーカーイザーとは色違いの銀色という感じだった。

「ふう、という事で海賊のパワー！ツーカーイザー!!」

「ツーカーイザー!？」

また、奇妙な名前だね」

ツーカーイザーへと変身した理乃。

その姿はエンデが変身したツーカーイザーとは違い銀色をベースにした姿となっており、派手というよりも落ち着きのある印象があった。

手に持つギアダリンガーからもカッツトラスを思わせるサーベルが出ており、ゆっくりと構える。

「さて、爽快に決めさせて貰うわよ」

だが、それはまるで嵐の前の静けさという表現の方が合っており、次の瞬間には奴の前へと一瞬で詰め寄る。

「なっ」

そのあまりの速さに驚きを隠せない奴はすぐに手に歪んだ形の銃を手に取り、理乃に襲い掛かる。

だが、理乃は剣を振るう事なくただ立ち尽くすだけ……そう思った時だった。

——キイインツ!! 金属と金属が激しくぶつかり合う音が鳴り響き、奴の手から

弾かれる。

何が起こったのか分からないといった表情を浮かべた奴だったが、すぐに理解する事になる。

「なっ」

それはあまりにも早すぎる理乃のギアダリンガーによる斬撃だった。目にも止まらぬ速度で振るわれた一撃は見事に奴の持つ武器を叩き落としていたのだ。

そしてさらに追撃するように理乃の攻撃が続く。

先ほどよりも早く放たれた一撃により今度は銃を持つ腕ごと切り落とされる。悲鳴を上げる間もなく奴の腕からは大量の血しぶきが上がり、地面へと倒れこむ。

「舐めるなあ!!」

奴はその叫びと共にその腕から生えたのは別の腕だった。

それはまるで恐竜のティラノサウルスを思わせる物であり、真つ直ぐと理乃に襲い掛かる。

「あらら、すごい再生力ね」

理乃はそれを冷静に見つめると再び素早く後ろに下がると共に取り出したのはセンタイギアだった。

「29バーン！マジレンジャー！」

その音声か鳴り響くと同時に理乃の前に現れたのは、マジレンジャーと戦った戦士である魔導騎士ウルザードだった。

ウルザードの幻影が現れると共に、そのまま理乃と一体化すると同時にその手にはウルザードが使ったジャガンシールドを手に持っていた。

「ドーザ・ウル・ザード！」

理乃のその言葉と共にジャガンシールドから狼にも似た魔導弾が放たれ、真つ直ぐと奴に襲い掛かる。避ける暇もない程の高速で迫りくる攻撃を避ける事も出来ず、直撃すると共に爆発が起こる。

その衝撃によって大きく吹き飛ばされる。

「お次は、これ」

【8バーナー・バイオマン！】

その音声と共に出てきたのはバイオマンと激闘を繰り広げたバイオハンター・シルバが現れ、そのまま理乃と一体化する。

同時にギアダリンガーも剣から銃へと変形し、そのまま奴へと狙いを定める。

それと共に放たれたエネルギー弾はまさに音速というべき速さで連続に放たれ、奴に襲い掛かる。

避ける暇もなく全て命中した事で、そのまま吹き飛ばされる。

「理乃、それって」

「ほら、私って、結構悪だったから。」

その影響もあつて、センチタイギアを使うと歴代のスーパー戦隊と関係が最も深い敵と繋がる事ができるらしいの」

それは確かにウルザードもバイオハンター・シルバは歴代のスーパー戦隊を苦しめた敵だ。

だけど

「ウルザードはマジレンジャーの父親で最後は味方になってくれた。

だから、余計に頼もしいぜ」

俺の言葉を聞くと嬉しかったのか少し照れるような仕草を見せる。

そんな理乃の姿を見ながら俺は笑みを浮かべながら前を見る。

まだ意識があるのか苦しそうな表情を浮かべている。

「それじゃ、一気に決めるよ、お兄」

「ああ分かった!」

その言葉と共に俺達は同時にセンチタイギアを装填する。

【35バーン! ゴーカイジャー!】

その音声が届り響くと同時に俺の横にはゴーカイレッド、理乃の横にはバスコが現

れ、そのまま一体化する。

それと同時に俺の手にはゴークサイサーベル、理乃の手にはカリブラスタを手に持つ。

「ファイナルウェーブ！」「ヒーロー！スーパーゼンカイタイム！ゴッゴー！バンバン！ダイゼンカイ！」

その音声が鳴り響くと共に、俺達は引き金を弾く。

それと同時にゼンカイジャーのシンボルマークのビームが真っ直ぐと理乃のビームが合わさる。

「ゴークイスクランブル！ゼンカイブラスト&スラッシュュ!!」

そして、そのシンボルマークに向けて、俺達はクロスするように斬撃を放つ。二つの必殺技を受けた奴はそのまま地面に倒れる事無く、爆散した。

「それにしても、結局、この大会は一体なんだったんだろう？」

「さあね。」

けど、どうやら無事に終わったようね」

その言葉と共に、俺達の身体は徐々に光の粒子へと変わっていく。

それは大会が終わり、あと少しで元の世界へと帰る合図だった。

「なんだか、少し寂しいぜ。」

もうちょっと、このチームで戦ってみたかったぜ」
ジユランは少し言う。

「そうだな。」

でも、きつとこれから先も会う機会がある」

「その時は俺がとっておきの奴をごちそうするぜ」

「あまりカロリーが高くないので頼むわよ」

そう言っている間にも、雨宮さん、トリコさん、マリアさんが徐々に消えていく。

「それじゃ、俺も帰ったらリハビリを続けるわ」

「元気でな、ジユラン」

「おう、介人もな」

それと共にジユランもまた消えていった。

「にしても、理乃。」

お前、その姿になれるんだったら、なんで早く言わなかったんだ？」

「これ、まだ調整が全然できていないからね。」

という事で、本格的な出番まで、少し待っていてね」

「いや、待っているも何も、一緒に住んでいるから、何時でも知らせられるでしょ」

「あのエマが何をするか分からないでしょ」

「まあ、確かに」

俺達はその言葉と共に、徐々に再び、元の世界に帰って行った。

野望に満ちた如月グランドパーク

「介人さん！」

「さっそくですが、この遊園地、行ってみませんか！」

「んっ?」

特にやる事がなく、暇を持て余していた時、エマが突然何かのチケットを渡してきた。気になって、それを見てみると、如月グランドパークのプレミアムチケットだと書かれていた。

「それって、お前がこの前、坂本の奴に売った奴じゃないのか?」

「いやあ、あの後、実はモニタリングして欲しいというバイトが来たのでね。」

その中で、まあ別に迷惑をかけない人物として、介人さんに頼もうと考えたんですよ」

何だ、その面倒な条件は? 俺以外にも適任者がいただろうが。

そう思っている

「という事で、さっそく行きましょう!」

「うわあ、お前?!」

俺は無理矢理、手を引かれて連れていかれる。

そして、そのまま電車に乗せられる。

おい、まだ行くとは言ってるねえぞ！ それに、これ電車賃とかどうすんだよ！！
そんな事を考えている間にも、どんどん電車は進んでいき……。

そうして辿り着いた如月グランドパーク入場ゲートの前の近くには、坂本と霧島さんがいた。

「あれ、坂本達もか？」

「介人、それにてめえは!!」

その言葉と共にエマに向けて、凄い殺気を放つ坂本。

「おい、どうしたんだ、坂本？」

「こいつが俺が如月グランドパークのプレミアムチケットを持っている事を情報で霧島に売りやがったからだ！」

「ええ、私はあなたにチケットを売っただけで、口止め料は貰っていませんからねえ」

「クソツ、こいつ……」

なるほど、そういう事だったのか。

「まさか、介人も手を組んでいたとは」

「えっ、手を組んでいたって、何をだ？」

「……まさか、お前、知らないのか？」

「だから、何をだよ？」

すると、呆れた表情をする坂本。

だが、同時に希望を見つけたように笑みを浮かべる。

「良いか、このままでは俺は翔子と！」

お前はそこのゲスヤロウと結婚する事になるんだぞ！」

「結婚って、マジか!!」

「ああ、だから、ここは協力してぎゃああ!!」

「逃げるのは、許さない」

坂本が俺に協力を求めるように言うが、それよりも先に坂本は霧島さんにアイアンクローを喰らう。

ふむ、どうやらこのままでは危険なのはよく分かった。

「ありがとう坂本。」

俺はなんとしても生き残るよ」

「まつ待て、俺を置いていくなあ、それでもヒーローかあ！」

「ヒーローは時に残酷な決断に迫られる事もあるのだ。」

という訳で、さらばだ」

その言葉と共に俺は逃げだそうとした時だった。

「そうはさせません！」

スタッフ！」

俺が逃げだそうとした瞬間、エマの言葉に合わせて、俺を囲むように黒服のスタッフが現れる。

「おい、これはどういう事だ？」

「私達は最初からあなた達の行動を見ていました。

なので、ここで逃がすわけにはいかないのです」

「おいおい、完全に包囲されているじゃねえか！ 何だよ、この展開!？」

「という事で、ここにいる間はギアトリンガーは預からせて貰いますね」

「あつてめえ!？」

何時の間にかギアトリンガーがスタッフの手の中に収まっている。

このままじゃ、やばい。

【36バーン！ゴーバスターズ！】

「なっ!？」

聞こえてきた音と共に俺の前にレッドバスターが現れ、そのまま俺に吸い込まれる。

同時に目の前には鶏の絵があり、動きを止められる。

「なっ、何が起きた!？」

「特命戦隊ゴースターズの一人であるレッドバスターのウィークポイントであるニワトリを見るとフリーズし、身動きできなくなってしまうです。

ニワトリの覆面や絵を見たり「ニワトリ」という単語を聞いたりしただけでも、フリーズしたり、あるいはそこまで行かずとも動作が極端に鈍くなったりしてしまうんです。

そして、この遊園地にはニワトリに関連する物が瞬時に出るようになっています」

「おいおい、なんて無駄に凝っているんだよ。」

「こんな所にまで仕掛けがあるとは思わなかったぞ。」

「という事で、大人しく捕まってください。」

「それとも、まだ抵抗しますか？」

「くうく！ 卑怯だぞお!!」

「そう言いながら、悔しがりながらも、俺は抵抗するのを止めた。」

「素直でよろしい」

「その言葉と共にエマは俺の頭を撫でる。子供扱いかよ。」

「こうして、俺はあっけなく捕らえられてしまったのであった。」

「同時に俺は坂本の方へと眼を向ける。」

『とりあえず、手を組むぞ、坂本』

「アイコンタクトで話しかけると共に坂本も頷く。さて、ここからは共同戦線だ。」

「それでは皆さん、これからモニタリングを始めましょうか！」

「おー!!」

そうして、俺達による如月グランドパークのモニタリングが始まった。

『それで、どうするつもりだ?』

『まずはギアトリンガーを取り返したい。』

取り返す事ができれば、すぐにセンタイギアを使い、ここから脱出する』

『問題はどうかやって取るかだな』

現在、俺達は動く事ができず、周りを囲まれている状態。

『本当にそんな事ができるのか?』

『やらなければ、二人共、終わりだ』

そうしていると、目の前に係員が出てきた。

「本日はプレオープンなのですが、チケットはお持ちですか?」

「……はい」

「これでいいですか?」

その言葉と共に霧島さんとエマの二人がチケットを取り出す。

「はい、拝見しマー……」

すると、霧島とエマが差し出したチケットを見たそいつの表情が固まった。

「あの、どうかしました？」

「あ、イエイエ、そんなコトはないデスよ？ デスが、ちよつとお待ちくだサーイ」

係員はそう言つて後ろを向き、携帯電話で電話を始めた。

「――私だ。例の二人組を発見した。すぐにウエディングシフトの準備を始めろ。確実に仕留める」

『了解』

「待てやコラ、なんだ今の不穏な話は」

聞こえてきた声に思わずツツコミを入れる。

「報酬はしつかりと用意していますよねえ」

「勿論デス」

それと共に係員から明らかに賄賂を受け取っているエマが見えた。

「やはり、あいつ、裏で手を組んでいやがった!!」

俺はそう言っていると

「それでは、せつかくなので記念写真を撮りたいと思います。

写真を撮るのは、如月グランドパークの新マスコットのニワトリちゃんです」

その言葉と共に出てきたのは明らかにニワトリの着ぐるみであった。

「はいっつ」

完全にフリーズをしている間に、エマはそのまま腕を組んできて

「ほら、介人さん。」

スマイルスマイル！」

そう言いながらエマの奴は俺の頬を無理矢理引っ張り笑顔にさせる。

「うぐう」

「それじゃ行きまショー！ 3、2、1」

それと同時にシャッターが切られ、写真が取られる。

「ありがとうございます。」

それでは、次のお客様、どうぞお

「ぐっ介人!!」

俺の状態を見ていた坂本は慌てて俺の元へ駆け寄る。

「大丈夫か!？」

「問題ない。」

この屈辱、確実に全力で返す」

俺は怒りを抑えるようにしながら、そう答える。

くっそ、何でこんな事に。

そう思いながらも、見るとそこには坂本がアイアンクローをされながら、霧島さんと

記念写真を撮っている光景だった。

「まあ、これは良いか」

今は、何よりもギアアトリングーを取り返す。

衝撃に耐えろ

如月グランドパークに無理矢理参加される事になった俺は、エマに連れて行かれる形で遊園地に回る事になった。

最初は坂本達と共に一緒に行動するつもりだったが

「いやあ、共謀して、脱出されても面倒なので、別行動させますねえ」

その言葉と共に、坂本達とは別行動させる事になった。

「それじゃ、どこを回りましょうねえ。」

なんだって、ここのアトラクションは今日限定ですが、無料で遊べますからね」

「はあ、仕方ないか」

最終的には、この施設で最後の難関である結婚式だと思おう何かを乗り越えれば、問題ない。

「おお、あれなんてどうでしょうか、介人さん！」

「なんだ？」

そう言つて、エマが勧めてきたアトラクションは『大観覧車』だった。

「あー……あれか」

「乗りたいです！」

「はいよ」

そう言いながら、俺達はその大観覧車に乗ろうとすると

「おい、その兄ちゃん。

カップルかい？ なら、二人で乗れる特別仕様があるんだが、どうだい？」

「へえ、良いですねえ、乗っちゃいましょうよお！」

「まあ別に良いけど」

そんな会話をしていると、係員のお兄さんが案内してくれた。

「こちらになります！ ごゆっくりどうぞ！」

「はい！」

そう言いながら、ゴンドラに乗り込む二人。

向かい合わせになるように座る中、ゆっくりと上に上がっていく。

「わあ……」

外の景色を見て感動するエマを見ると、普段の様子とは違う事に俺は驚く。

「普段は金にがめつくて、強欲で、何時も厄介な事ばかりしているのに、こういう時には普通の女の子みたいに見えるな」

「それ、本人の前で堂々と言いますか！」

「だって事実だろ」

「むう……」

そう言うのと、少し頬を膨らませながらも窓の外を見るエマ。

そして、ふと思つた事を呟く。

「ねえ、介人さん」

「ん？」

「私と一緒にいて楽しいですか？」

「いきなりなんだ？」

「いえ、ちよつと気になつてしまつて……」

そう言う彼女の顔はどこか寂しげにも見えた。

「まあ、退屈はしないな。」

普段、色々と世話なつてゐるし」

「そつか……良かった」

そう言いながら微笑む彼女だが、また不安そうな表情を浮かべていた。

「それじゃ、一つだけ、お願いしても良いですか？」

「なんだ、いきなり結婚式に行くとかは無理だぞ」

「いえ、今はそれはどうでも良いんです」

「だつたらなんだ？」

俺はエマの真剣な表情に思わず息を呑む。

一体、エマは何を

「降りたら、私を抱き抱えてくれませんか」

「いきなり何を言っているんだ、お前」

「だから、抱き抱えるんですよお！」

「そういう意味じゃない！」

あまりにも突拍子もない発言に俺は戸惑う。

なんだろう、これは夢なのか？

「だって、だって、今、自分で歩くと確実に出ちやうんですよ!!」

「出ちやうって、まさかお前」

その一言と共に俺は察してしまった。

「うつつうう、こんなの、ヒロインとしてやばいですよお。」

ハーメルン内でも、こんな事をしたヒロイン、いませんよお」

「分かった分かったから!!」

とにかく、落ち着け!!!」

このままではまじいと感じたのか、とりあえず宥める事にした。

ゴンドラ内で、パニック状態になっている彼女を何とか抑えた。

「とにかく、降りたら速攻トイレに向かって下さい!」

なるべく、刺激を与えないように、お願いします!!!」

「ああ、分かっているって」

「絶対ですからね!」

「はいはい」

それからしばらくして、ようやく大観覧車を

「あれ、止まっている?」

「えっ?」

その言葉と同時に、外から悲鳴が聞こえてきた。

「キヤアアアア!!!」

「おいつ、今の悲鳴は何だよ!」

それと共に外の光景を見ると、そこにはかつて、俺と一緒に戦ったブルーンと同じくボウケンジャーのダイボウケンをベースに様々な悪の組織の武装が施された存在が暴れていた。

見ると、既に他のメンバーが戦っている様子だ。

「まさか、ここでワールドが現れるなんて」

「なんで、こんな時に！」

「こんなピンチの時にい!!」

そんな事を叫びながら、彼女は俺の腕を掴む。

「ああ、こんな時に、あつ」

見ると、ゴンドラからそう遠くない位置に丁度ジェットコースターが走っていた。

「エマ、ギアトリンガーは持っているか」

「えっそりや、取り上げた時に持っていますか」

「だったら、返せ。」

その代わり、絶対にお前を送り届けてやる」

「介人さん。」

くっ、ヒロインの沽券には帰れませんねっ」

そう言って、エマはそのまま俺にギアトリンガーを渡した。

「だったら、行かず、チェンジ全開!」

【ババン!ババン!ババン!ババン!ババババン!ゼーンカイザー!】

その音声と共に俺はゼンカイザーに変わると同時にエマを抱き抱えて、そのままゴンドラのドアを蹴り飛ばす。

「行くぞ、エマ」

「絶対にそつと降りて下さいよ！」

これ、絶対に衝撃が凄い奴ですよねえ!!」

「保証はできない!!」

「全力全開だあ!!」

「ひゃあああ!!」

そう言いながら、俺達は一気に飛び出す。

同時に、俺達に気付いたワルドが攻撃を仕掛けてくる。

俺はそれをかわしながら、ジェットコースターに飛び乗る。

「秘密のパワー！ゼンカイザー!!」

「大きな声で言わないでくださいよお!!」

上手くジェットコースターに乗り込む事に成功した俺は、そのままジェットコースターの上に乗りながら、ポーズを決める。

走り出したジェットコースターの上で俺はエマを抱き抱えたまま、名乗る。

「とりあえず、まずは送ってからだな」

「12バーン！ライブマン！」

その音声が鳴り響くと同時に俺の足下にはイエローライオンのマークが入ったジェットスケボーが召喚し、そのまま乗り込む。

「ひゃあああ!! スケボーの振動があ!!」

抱き抱えられたままのエマも絶叫を上げる。

そんな事は気にせず、俺はそのままトイレに向かって走る。

その間にも、ワルドの攻撃をかわす為に、アトラクションを破壊しながら逃げる。

そして、どうにかトイレに到着すると、すぐに扉を開けて

「よっ!! いしよお!!」

そのままトイレの中に放り投げた。

その直後、トイレの個室から水が流れる音が聞こえてきた。

俺はそれを確認すると同時にワルドの方へと目を向ける。

「待たせたな、ワルド!」

「!!「いや、どういう状況?!」!!」

俺の一連の行動を見て、ワルドもそうだが、他のメンバーも驚きを隠せない状態だった。

「色々ピンチだったからな。

にしても、あのワルド、厄介そうだな」

「ああ、能力が驚く程に多くて、対処が難しい」

「何か手はないか」

そう呟く声を聞きながら、

「あいつはボウケンジャーの能力。

だったら、これとこれ、それとフアリーナ達はあとでこれを頼む」

そう言いながら、俺は取り出した3つのセンタイギアの内、2つを渡した。

「これを一体」

「なるほど、そういう事ですか」

いち早く俺の作戦の意図に気づいたバイオンはそのままギアトリンガーにセンタイギアをセットする。

「36バーン！ゴースターズ！」

その音声と共にバイオンの手元にはイチガンバスターを召喚し、カメラモードでワルドを見る。

「場所は特定しました」

「了解」

それと共に俺の目の前に映し出されているワルドの位置を見る。

同時に

「42バーン！ルパンレンジャー！」

その音声が届き響くと共に介人の手にはレッドダイヤルファイターがあり、そのまま

走り出す。

「何をするつもりか、知らんが無駄だ!!」

ワルドは介人の存在に気づいたのか、次々と攻撃を繰り出す。

だが、その攻撃は全て弾かれていく。

何故なら、その攻撃全てに対して、バイオンがイチガンバスターを使い、弾いていた。

そして、俺はそのまま接近すると、レッドダイヤルファイターをそのままワルドに押しつける。

【0・3・0】

「なっ」

その音声が鳴り響くと共にワルドの身体に収まっているプレシヤスが次々と解放されていく。

それと共に、ワルドの力が弱体化しているのが目に見えて分かる。

「どっとうなっているだっ」

「ボウケンジャーでプレシヤスの能力を使っているならば、ルパンレンジャーの能力を応用すれば奪えると思ったからな」

「それで場所の特定のためにこれを使った訳ですね」

そう言い、イチガンバスターを構えたバイオンが言う。

「ぐっ貴様らあー！」

「ああ、あと悪いが、こっちも忙しいんだよ」

【14バーン！ファイブマン】

その音声が届くと共に、俺の背後にいたファリーナがバズーカ砲へと変形していった。

そして、二人がそのままファリーナを掴み、そのまま撃つ構えを取っていた。

「なっ！」

「それじゃ、永遠にアドウ」

その言葉と共に俺が離れると同時にバズーカの一撃がワルドに炸裂した。

同時にワルドは爆発と共に消えていった。

「なんとか、なっただか」

「まさか、ここでワルドが出てくるとはな」

そして、そのまま俺は変身を解除する。

「というか、お前達がいるという事はあの時やったのは、やっぱり」

「あつバレちゃった？」

俺の一言に特に気にした様子なく答える。

まったく。

「そういえば、エマは？」

俺は気になり、エマが入っただろうトイレを見る。

そこには、少しだけボロボロになったエマが立っていた。

彼女は俺を見ると、そのまま駆け寄ってきた。

「介人さんのせいでえ、介人さんのせいでえ」

「ああ」

俺はそれだけで察してしまった。

ああ、まあ仕方ないか。

「さて、そろそろ帰るぞ」

「いや、まだメインイベントが終わっていませんよっ!!」

予定は遅れましたが、まだランチに「ああ、エマ」なんですか？」

「さっきのワルドが暴れたせいで、エマちゃんの分のランチが中止になったの」

「えっ」

「だから、その、ウエディング体験は、中止になったの」

「うわあああああん!!!」

「こうして、波乱万丈な結婚式は終わりを告げたのでした。

「いや、勝手に終わらせないでくださいよおおおおおおお」

そう叫びながら、俺の腰にすがりつくエマ。

「ええい、離せ!!」

こっちは結婚式なんて、やるつもりはないんだから!!」

既に如月グランドパークから出たが、未だに諦めていないエマが俺から離れようとしていない。

「せつかく、準備してきたのいいい」

「お前なあ、そもそもなんで、そこまで結婚式に拘るんだ？」

「やっぱり金か？」

「まあ、それはありますが」

「ほれみたことか」

「ですが、他にも理由はあるんですよ」

そう言つて、エマは真剣な表情だった。

「他に？」

「どういう事だ？」

「いえ、その」

「んっ？」

「私を、正面から見てくれた、初めての人だったから」

「はあ？」

俺は思わず呆れた声を出してしまふ。

「なつ何ですか、その反応」

「いや、だって、正面からつて、何時も見ているだろ。」

今更、何を言っているんだ？」

「いいじゃないですかああ！ 私にとっては重要なんですう！ もうこうなれば、介人さんには責任を取ってもらいます」

「はあ、そんないきなり言われても、決めれるかよ」

そう言いながら、歩いていく。

「ほら、さつさと帰るぞ、エマ」

「まったく、介人さんはあ」

文句を言いながらも、どこか嬉しそうな顔をしながら、俺の後を追いかけてくる。

「本当に、ありがとうございます。」

私の硬い殻を砕いてくれたあなただからこそ」

「なんか言ったか？」

「いいえ、何も！」

それよりも早く帰って食べましよう！

今夜は焼き肉ですよお!!」

「おい、ちよつと待て! その前に買い物だろ!!」

俺は慌てて止めようとするも、既に走り出している。

全く、どうしようもない奴だな。

「でも、こういうのも悪くないか」

俺はそう思いながら、彼女の後を追った。

暴走と迷宮

その日、文月学園は奇妙な出来事が起きていた。

広がっている召喚獣フィールドは学園中にまで広がっていた。

何よりも可笑しいのは、学園を覆い尽くす程の吉井の召喚獣達だった。

「吉井、お前は何か悪さしたのか」

「なんで、一番初めに僕を疑うんですかあ」

それは吉井は思わず反論したが

「何をやったんだ、明久」

「早く白状した方が良いぞ」

「誰も攻めないから」

「皆まで」

クラスメイト達は容赦なかった。

「まあ、実際に召喚獣で様子が可笑しいのは、明久さんだけですからねえ」

そうエマは遠慮無く言った。

「それは、まあ、だけど、僕だって、何が起きているのか、さっぱり分からないんだから」

「まあ、明久にそれが分かる知能があったら、苦労はしないよ」

「介人も酷いや」

そう言っている間にも、大量に召喚された召喚獣達は姿を消していった。

だが、それとは別に明久以外の全ての召喚獣達が、そのまま窓の外から出ていった。「一体何が起きたんだ？」

と、雄二が呟く。

その答えを知っている者はいなかった。

だが、そこで教師の一人が入ってきた。

「吉井君に介人君はいますね。」

「はい、少しこちらに」

「えっ?」「俺達が?」

何が起きているのか分からず、そのまま俺と吉井達は共に呼び出された先に向かう。

そこにはこの学園の学園長である藤堂カヲルがいた。

そして、彼女はこう告げる。

「実はね、召喚獣システムが暴走してしまっただよ」

「どういう事だ?」

雄二が尋ねる。

「何者かによつて、システムを暴走させられたみたいだねえ。

こちら側ではアクセスはできないんだよ。

だから、お前さん達には直接サーバールームに侵入して、修理を頼みたいんだよ」

「修理つて、僕はともかく、なんで介人達もなんだい？」

「そいつらはこういう厄介事には結構便利だからねえ」

「ああ、なるほど」

「どうやら、向こうにいる学園長は俺達の事情については既に知っているようだ。

「知っているという事か」

「そりゃあねえ。

「そもそも、ここのフィールドで時間を止めるように色々と許可を出しているのは私だからね」

「それを考えれば、納得だな」

「これまでの戦いでなぜ召喚フィールドの中でワールド達と戦った時に時間が止まったのか。

それは学園長自らが介入した結果、そういう仕様になったのか。

「しかし、どうやって修理を行うんだ？」

雄二が尋ねた。

確かに、システムの暴走と言われても、どうすれば良いかなんて思いつかない。すると、学園長が説明を行った。

「サーバルームに入って、ケーブルを繋いでくれ。」

そうしたら、私が外部の端末で防犯システムを切って、扉を開ける」

「物理干渉ができる観察処分者なら簡単ですね」

吉井の言葉に全員が反応する。

「だけど、介人達はどうやって」

「まあ、なんとかできるだろ。」

とりあえず、俺達はさっさと行くぞ」

その言葉と共に俺達はそのままサーバルーム近くにある通気口へと近づく。

「それで、これからどうするんだ？

とても、この大きさはじゃ」

「こういう時には色々と便利なものがあるんだよな」

そう言い、俺はセンタイギアの一つを取り出し、そのままギアトリンガーに装填する。

【43バーン！リュウソウジャー！】

その音声と共にリュウソウジャーの武器であるリュウソウケンが現れ、そのまま俺の手元に来る。

同時にリュウソウケンにあるリュウソウルを入れる。

【チーソウル！ミニミニ！】

その音声に鳴り響くと同時に、俺達の身体は瞬く間に小さくなり、目の前にある通気口に簡単に入れるぐらいの大きさへと変わる。

「おおっ！」

「凄いな」

「これがあれば、楽勝です」

「まあ、本来はこっちの方がメインだったりするんだけどな」

そうやって、俺はそのまま通気口へと入る。

そうしていると、やがて吉井の召喚獣が見えた。

「お待たせ！って、なんで小さくなっているの!？」

「色々と便利なものがあるんだ。」

とりあえず、お前が案内しろよ。

「こっちは通信機を持っていないんだから」

「ああ、分かっている！任せてよ」

そうして、吉井の先導の元、俺達はサーバルームへと向かう。

しかし、その道中には、思いも寄らない敵が待っていた。

突然、地面から出てきた召喚獣の紋章。

それと共に出てきたのは、なんとボイジャー、ファリーナ、パトラー達3人の召喚獣だった。

それだけではなく、背後には坂本と土屋の2人の召喚獣が立っていた。

「完全に囲まれているな。

ならば、仕方がない。

「いっちょ倒すとしますか」

「なんだか、自分の召喚獣と戦うのは、少し複雑だけど、やるしかないよな」

「そう言いながら、ボイジャー達も各々のギアトリンガーを取り出す。

「『チェンジ全開』」

それと共に、俺達は各々が変身を完了させる。

「それじゃ、行くぜ、全力全開だあ!!」

その言葉を合図に、俺達は各々が戦う相手に向かって行く。

ファリーナ達は自分達の召喚獣達と対峙し、俺はそのまま坂本の召喚獣に近づく。

「といつても、そもそも俺達って、戦えるのかって?！」

そう思っていると、本来ならば触れる事ができないはずの召喚獣の拳が俺に当たった。

「どうやら、召喚獣フィールドが暴走しているせいで、物理干渉ができるようだなあ！」
そう言うと、そのまま俺と坂本は殴り合いを始めた。

その様子を見ていた他の皆はそれぞれに召喚獣と戦闘を始める。

だが、そんな中でも、俺達は互いに殴る蹴るを繰り返す。

だが、やはりというべきか、俺の攻撃は当たるが、向こうは当たらない。

戦闘経験の違いと、操縦者がいない事もあり、こちらが有利だ。

有利なんだが

「嘘!!」

「あつ」

俺達が戦っていると、どうやら明久がやられてしまった。

「どうするっ?」

「さすがに、このまま進むのは危険かもしれないな」

物理干渉ができる召喚獣達がこれからどれぐらい出てくるか分からない。

通信が安全に行いながら、ナビができる明久がいらない以上、このままでは危険だ。

「ここは一時撤退しかないな」

俺はそう言い、センタイギアの一つを取り出し、そのままギアトリンガーに装填する。

「41バーン! キュウレンジャー!」

その音声と共に俺の前に現れたのはヘビツカイシルバーであり、そのまま俺と一体化する。

同時に俺は残りの召喚獣達に目を向けると、その場にいる全員がその動きを止まる。

「それじゃ、全員、撤退するぞ！」

そう告げると、俺はその場から離れる。

そうして、俺達は無事に皆がいる司令室へと戻ってきた。

「それにしても、どうする？」

そう言いながら、吉井が現在は補修室から戻ってきた。

「作戦を続けます。」

「回復試験を受けて下さい」

既に疲労している様子だが、このまま吉井の召喚獣なしでの行動は俺達にも危険だろ。

「だけど、よほど高得点じゃないと一発でアウトよ」

その美波の言葉にも納得だ。

「仕方ない。」

緊急時だ、あれを使うしかないか」

「あれ？」

そう言いながら、俺はとあるギアを取り出す。

「それって、確かセンチギアだったけ？」

「ああ、その中でも、これは禁断のギアだ」

「きつ禁断だつて!?!」

俺の言葉に全員が反応した。

まあ、確かに危険な代物だからな。

だけど、今はそんな事を言っている場合ではない。

俺はそのギアを装填し、そのまま引き金を弾く。

「14バーン！ファイブマン！」

その音声と共に現れたのは、ファイブマンであり、彼らはそのまま明久へと吸い込まれる。

「んっ、さっきのは一体」

「とりあえず、さっさと回復試験を受けてみな」

「えっうん」

その言葉と共に、明久はそのまま回復試験を受ける。

「禁断つて言うから、構えたけど、結局あれは、何のギアなんだ？」

「それは見ていたら、分かるよ」

すると

「なっ何っ!？」

「一体何が起きているんだ!？」

「明久が、これまでにないレベルの点数を次々と取っているぞ、これは一体!？」

「このギアには教師で兄弟であるファイブマンの力が宿っており、このギアを使えば、どんな馬鹿でも学校の成績がトップになる知能を一時的に得る事ができる!」

「それは確かに、ある意味、この学園では禁断のギアだ!？」

それはテストの点数がそのまま強さになる召喚獣にとっては、まさに禁断のギアだった。

「介人さん、それを私にも使って下さいなあ」

「お前は関係ないから、駄目だエマ」

「そんな事言わずに、お願いしますう」

「ダメなもんはダメー!ツ!!」

俺がそう言うと同時に、そのままセンチギアをそのまま仕舞った。

「とにかく、これで明久は問題なく回復するはずだ」

「さて、とりあえず、もう一回侵入するか。」

今度は無事に辿り着けると良いがな」

そう言いながらも、嫌な予感を感じながら、再びサーバルームへと向かう通気口へと入っていく。

突入、サーバールーム

舞台は再びサーバールームに続く通気口の中にいるが

「いやあ、楽で良いなあ」

「いや、皆手伝ってよ!!」

そう言いながら、俺達は明久の後ろに続く形で歩いている。

というのも、既にファイブマンギアで極限まで強化された点数によって、並大抵の召喚獣では倒せないからだ。

「まあまあ、そろそろ目的地であるサーバールームなんだからよつと」

俺はそのまま目的のサーバールームに入ってしまった。

中は薄暗く、明かりもついていない。

ただ、機械の音だけが響いている。

「なんというか、不気味だな。」

さてつと、さつさと繋げてつ」

そう言う前に、襲い掛かってきた攻撃に俺達はすぐに避けた。

同時に召喚フィールドは消滅し、明久の召喚獣は消えてしまう。

「一体、何が」

「なるほど、単純なミスじゃないとは思っていたけど、まさかワルドの仕業だったとはな」

その言葉と共に、俺達の目の前に現れた存在を見る。

そこに立つのは、見た目は漆黒のロボだが、頭部が隼、左腕がイルカ、右腕がライオンの意匠となっている。

「ワルドって、あいつが」

「キカイノイドじゃないのか？」

「いいや、おそらくはライブマンのワルドだろうな」

それと共に俺は目の前にいるワルドを睨み付ける。

「お前がゼンカイジャーか」

「ああ、そうだ、てめえは一体何者だ？」

「俺はライブツノ。お前らと同じ正義のヒーローだ」

「……………嘘をつくくんじゃねえ!! そんなふざけた格好をした正義の味方がいるわけないだろう!!」

思わず怒鳴ってしまうが、奴は構わず続ける。

「いいや、俺は正義のヒーローだ。」

なぜならば、この世界の為に愚かな馬鹿共を肅正するのだからな」

「肅正だと？」

「ここまで召喚獣達が暴走している事件に何か関係しているのか？」

「この学園のFクラスは問題児で溢れている。」

「奴らをこのまま放置しておけば、いずれこの世界を破滅に導くことになるだろう」

「どういう意味だよ」

「馬鹿な奴を放っておけば、平気に犯罪を起こす。」

ならば、その前に裁く必要があるだろう。

その為には、この学園のシステムを利用して、排除する必要がある」

「ああ、そうかよ。」

「だけどな、そもそもためえがこんな事を行っている事態に問題があるんだろうが」

「ふんつ、お前達と話すことはない。」

「なぜならば、初めから同意を得ないつもりだからだ」

「そう言つて、奴は手に持った銃を俺達に向けた。」

「「「チェンジ全開!!」」」

それと共に、襲い掛かってくる銃撃に対して、俺達はすぐにギアトリンガーの引き金を引く。

同時に目の前にギアが現れ、銃の攻撃を防ぐと共に、俺達の身体を通り抜ける。その姿が変わり、そのまま俺達は名乗り出す。

「秘密のパワー！ゼンカイザー！」

「宇宙パワー！ゼンカイボイジャー！」

「パトロールパワー！ゼンカイパトラー!!」

「格闘パワー！ゼンカイファリーナ！」

「二二4人合わせて、機界戦隊ゼンカイジャー!!!」

同時に名乗りを上げると同時に、俺達は走り出してそれに合わせて、ライブツノーに向かつていく。

同時にワルドの方も、こちらに向けて銃を撃ち込んでくる。

それに対して、俺達もまたギアトリンガーの引き金を引く。撃ち込まれた銃弾に対して、俺達の攻撃は相殺される。

その間に俺は接近し、拳を振るう。

しかし、それは受け止められてしまった。

更に蹴りを放つがそれも止められる。

「ふんっ！」

それと共に、背後から攻撃を仕掛けようとしたファリーナの一撃を簡単に受け止め

た。

そして、そのまま投げ飛ばされてしまう。

一方でパトローラは逆にライブツノーに接近し、パトローラロッドで振り下ろす。

しかし、ライブツノーはそれを難なくかわす。

さらに腕を振り上げることで、パトローラを叩きつける。

そのまま吹き飛んだパトローラは壁に激突した。

「どうなっているんだ、奴は！」

「ライブマンは元々は天才達が自身で作り出した戦隊だ。

それは敵も同じだ。

つまり」

「そう、俺は敵対していた天才達の頭脳がここにある訳だ」

そう言うと共に、ライブツノーは頭を指で軽く叩く。

先程から攻撃が通じないのも、機械と一体化している事によって、その計算能力が格段に上がっているのだろう。

「ならば、勝つ方法はないのかっ」

「ああ、私の計算は絶対だ」

だが

「ああ、確かに一回じゃ無理かもしれない。

けどな、十回、百回、何度だって、挑戦すれば、手ぐらいは出てくるさ」

「なに？」

「全力全開！」

何度だって、トライしてやるぜ！」

「愚かな」

そう言うと共に、奴は俺達に銃口を向ける。

「それに、てめえが言っていた正義、本当に正しいのか、どうか、確かめさせて貰うぜ」
だが、それよりも早く、俺はセンタイギアをギアトリンガーに装填し、そのまま発動させる。

【28バーン！デカレンジャー！】

その音声と共に現れたデカレンジャーの幻影が現れ、そのまま俺達と一体化する。

同時に手にはデカレンジャー達のSPライセンスが現れる。

「なんだ、それは？」

「ライブツノー！文月学園によるテロ行為の疑いにより、ジャッジメント！」

「テロ行為だどっ！」

その言葉に怒りを隠せない様子だったが、ライブツノーには上の赤い×と下の青い○

が交互に点滅する。

ライブツノの目の前には1分間を示すアナログ時計が現れ、そこから判決が下されようとしていた。

「有罪!!」

「なっなんだとっ!」

そんなでたらめをつ」

「悪いが、その言い訳は神様にでも言え。

とにかく、分かったか。

てめえは正義のヒーローじゃない、ただの最低な犯罪者だ」

「ふざけるな!俺は正義のヒーローだ!」

「だったら、その頭脳で少しでも考えてみるんだな」

その言葉と共に俺達は取り出したセンタイギアをそのままギアトリンガーに装填する。

【マジレンジャー!】 【ゴセイジャー!】

その音声が鳴り響くと同時に俺の手にはゴセイレッドのスカイクソード。

ボイジャーの手にはテンソウダー、パトラーとフリーナの手にはマジフォンがあつた。

「行くぞ!!」

それと共に俺は走り出す。

「その程度で、何が」

しかし、ライブツノーは俺の後ろから来る攻撃に、驚きを隠せない様子だった。

マジレンジャー達の魔法の力とゴセイジャー達の天装術の力を合わせ、火・大地・風・水・雷の力を纏ったゴセイヘッダー達が俺の背中を追う。

俺はその内、ドラゴンヘッダーに乗りながら、ライブツノーへと接近していく。

そして、ライブツノーが反応する前に、ライブツノーの身体に切りかかる。

それと同時に、ライブツノーは両腕でガードをする。

「これはっ、計算がっ追いつかないっ」

計算を行うよりも早く、未知の領域である魔法や天使の力が合わさった攻撃にライブツノーは混乱していた。

ライブツノーの攻撃を潜り抜け、ライブツノーの目の前に、俺はその手に持ったスカイックソードを構える。

「ゼンカイダイナミック!」

そう言うと共に、ライブツノーの胴体を切りつける。

それによりライブツノーの装甲は破壊され、そのまま倒れ込む。

「よしっ、これで」

「あれ、待って、このパターンは」

そう言っている間にもライブツノーの身体が徐々に巨大化しそうになっていた。

「どっとうするっ!？」

そう、周りが騒ぐ中で

「ボイジャー、少しの間、これを使ってくれ」

「えっ、これって」

それと共に、俺はそのままセンチギアをひっくり返す。

「という事で、パトローラ、ファリーナ。」

さっさと、巨大戦だ」

「えっ何を言っているのっ」

俺の言葉にファリーナは驚いていたが、パトローラは

「何か考えはあるんだな」

「勿論」

「ならば、信じる」

「お姉ちゃん!」

パトローラの言葉にファリーナは驚くが、そのまま俺と共にライブツノーに向かって行

く。

【メガレンジャー!】

その音声が届り響くと共に、メガレンジャー達の幻影が現れ、同時に俺達は別の空間に飛び込む。

「ここはっ」

「メガレンジャーの力で、デジタル空間ハイウェイに飛び込んだ。

ここだったら」

「なるほど、巨大化しても、どうにかなる訳ね」

その言葉と共にライブツノーは巨大化する。

「それじゃ、二人共、行くぞ!」

「ええ」「分かっているわよ!」

2人はその言葉と共に虎型ロボフアリーナタイガーとパトカー型ロボパトローラパトカーへと変形する。

「全力合体!!」

その叫び声に合わせるように二人のロボットが合体する事によって、新たなロボットへと生まれ変わる。

緑とオレンジの2色で形成され、巨大ロボ、ゼンカイオーパトローナ。

合体が完了すると共に、その手には専用武器であるパトリーナライフルを二丁拳銃で構える。

そのまま、俺はゼンカイオーパトリーナに乗り込む。

「行くぜ、全力全開！」

その言葉に合わせるようにゼンカイオーパトリーナは真つ直ぐとライブツノーに向かって行く。

ライブツノーは銃口を向けて攻撃して来るが、それを全て避け、逆にライブツノーに命中させる。

同時にライブツノーの装甲が碎け散り、そのまま倒れる。

「どうやら、やられたシヨックで自慢の頭脳は使用できないようだな」
「だったら、このまま攻め込む！」

それと共に銃を再びライブツノーに撃ち込み、更にダメージを与えていく。

ライブツノーも反撃としてレーザー光線を放ってくるが、銃を防ぐ。

そして、その隙を狙って、俺はライブツノーの身体を駆け上がる。

「行くぜ、全力全開！」

同時に手に持ったトンファアを構え、そのまま接近する。

「ファリーナトンファア・ラツシュ!!」

そう叫ぶと同時に、俺の攻撃に合わせて、ゼンカイオーパトリーナが動き出す。パトリーナが両手でライブツノの身体を掴み、振り回し始める。

その勢いでライブツノの装甲が剥がれ落ち、内部の機械が露になる。

その内部に向けて、両手のトンファーを叩き込むと同時に、内部から火花が飛び散り、爆散する。

「よっしゃあ！」

とりあえず、戻るぞ!!」

それと共に、俺達は現実世界に戻るのであった。

結果として、サーバーームの修理は無事に完了した。

だが

「おい、どういう事だい。

プログラムがめちゃくちゃになっているんだがあ」

そう、今にも怒りそうな表情の学園長。

「どつどつという事なんですか、これは」

エマは若干、怯えた様子だったが

「いやあ、巨大化しそうだったから、デジタル空間に飛び込んだけど、まさかそこで暴れたせいでプログラムがめちゃくちゃになるとはねえ」

その言葉に、学園長は俺達を睨み付ける。

「あんたら、全員補修」

「そんなあ!!」

その言葉に悲鳴を上げるファリーナ。

しかし、それも仕方がない。

だって、俺達がやった事は、完全に暴走しているコンピューターに近づき、そのデータを破壊するという行為なのだから。

こうして、俺達は、暫くの間、補習を行う事になったのである。

騒動な海賊

その戦いは、人影のない砂浜で行っていた。

俺はその手に持ったギアトリンガーを真つ直ぐと目の前にいる敵に向けて、引き金を引く。

しかし

「炎のたてがみ」

奴はそのまま手を真つ直ぐとこちらに向けると、手のひらから凄まじい炎を放射し、ギアトリンガーの弾丸を燃やした。

「ちっ、ギンガマンの力はやっぱり厄介だ」

その言葉と共に、目の前にいる敵、ギンガバルバンに向けて、ゆつくりと構える。

「ふんっ、まさかたつた一人で俺に戦いを挑むとはな」

そうギンガバルバンは挑発とも言える発言と共に、鋭い目つきで睨みつける。

「こちとら、メンバーのほとんどが学生なんだよ。」

本当だったら、授業を受けなきゃいけないけど、残念ながら俺は不良だから、こうやって学校をサボって、てめえを倒しに来たんだよ」

その言葉に、俺はニヤリと笑う。

確かに、普通の高校生ならば、学校に行っている時間帯だ。

「それは悪かったな。」

「だけど、まあ、俺には関係ない話だぜ!!」

その言葉と共にギンガバルバンはその手に斧、刀を構え、こちらに向かってくる。

「ちっ!」

俺はそのままセンチギアを手に持ち、ギアトリンガーに装填する。

「40バーン! ジュウオウジャー!」

その音声と共にジュウオウイーグルの鳥獣剣イーグライザーを手に持ち、そのまま構

える。

そして、それに対抗するように、ギンガバルバンもそれぞれの武器を構える。

一瞬の間を置き、互いに駆け出す。

それと同時に、ギンガバルバンの持つ2つの武器による斬撃が襲ってくる。

それをなんとか防ぎつつ、反撃の一手を放つ。

「ぐっ!」

十重二十重に織り成す剣戟。

一進一退の攻防が続く刹那、その均衡を崩したのは——俺だった。

「40バーン！ジュウオウジャー！」

それと共に、腕に翼が生え、そのまま宙へと飛ぶ。

そして空中にて旋回しつつギンガバルバンへ急降下する。

「うおおお!!」

「ぬうんツ……!?!」

ギンガバルバンはそれを受け止めるが、衝撃を完全に殺しきれずに後退する。

すかさず俺は追撃をかける。

「17バーン！ダイレンジャー！」

その音声と共にもうイーグルライザーを手放し、両手にはダイレンジャーを使用した

円形のカッター、大輪剣を持つ。

そして、そのまま連続攻撃を仕掛ける。

ギンガバルバンもそれに対抗し、斧と刀を振るい対抗してくる。

だが、さすがに空を自由に飛び回る相手には分が悪いのか、徐々に劣勢に立たされていく。

その中でギンガバルバンは

「花びらのツメ！」

そう言って地面に手をつき、そこから無数のツタを伸ばす。

それに絡め取られないよう上空に飛び上がる。

しかし

「それはもう見飽きたんだよ！

嵐のはばたき！」

すると今度はギンガバルバンの周囲に竜巻が発生させる。

それによって、俺はコントロールを乱され墜落してしまう。

「くそっ……！」

再び空中戦に持ち込もうとするが、その隙を与えずにギンガバルバンは攻撃を繰り返してくる。

そして

「雷の雄叫び」

ギンガバルバンは雷のブレスを放ちながら、落雷のような一撃を放ってくる。

「っ」

真っ直ぐと迫り来る攻撃に対して、俺は反応する事はできずにいた。

しかし

「3！バーン！ゲキレンジャー！」

「激技！狼狼蹴！」

「なっ」

ギンガバルバンに向けて、突然現れたバイオンがエネルギーを片脚へと集中、飛び上がった。ギンガバルバンへ回転蹴りを繰り出す。

それによって、無理矢理狙いを逸らされ、俺に雷は当たらなかった。

「遅れてしまって、申し訳ない」

「問題ない。」

それよりも助かった」

そのまま、俺とバイオンはそのまま並び、目の前にいるギンガバルバンに構える。

「くくく……ハアハッハッ!! やるじゃねえか! てめえみたいな奴と戦うのは初めてだぜ! このギンガバルバン、今最高に楽しい気分だああ!!」

「そうか。」

だったら、そのまま終わらせてやるよ」

その言葉と共に、俺達は同時に頷くように、そのまま各々センタイギアを装填する。

【33バーン!シンケンジャー!】【43バーン!リュウソウジャー!】

それと共にシンケンジャーの刀、シンケンマルとリュウソウジャーの剣、リュウソウケンをその手に持ち、二刀流の状態になる俺達。

侍と騎士の二つの力を合わせると共にゆっくりと構え、同時にギンガバルバンに斬り

かかる。

ギンガバルバンはその攻撃を受け止めるが、それでも勢いまでは殺せず、どんどん押されていく。

「ぐう!!」

ギンガバルバンもまた、自身の武器にアースの力を宿させ、対抗していく。

しかし、それは俺達も同じく、シンケンマルにはモチカラを、リュウソウケンには騎士竜の力が宿り、その威力は増していく。

そしてやがて、俺のシンケンマルはその名の通り刃先が恐竜の顔のようなキョウリュウマルに、バイオンのリュウソウケンはより強力なりユウソウカリバーへと変わる。

「秘技! 武竜剣陣」

俺達の必殺技が直撃した事で、遂にギンガバルバンの鎧に大きな亀裂が入る。

「この俺がつ、こんな所でっ」

ギンガバルバンは膝を着くと同時に、彼の変身は解除される。

どうやら、これで戦いは終わりらしい。

「……………」

「まだ、やるか?」

俺は倒れている男に向かって、そう問いかけるが

「いや、もういい。」

俺の、負けだ」

その言葉と共にギンガバルバンに変身する為のギアは破壊される。

それによつて、男はそのまま気絶した。

「ふう、なんとかなった。」

にしても、今日はなんであいつら集まらなかったんだ？」

そう言いながら、俺は今回、集まらなかったメンバーに対して、少し文句を言う。

「それが、少し厄介な事になりました」

「厄介な事？」

バイオンの言葉に、俺は首を傾げる。

海賊な妹

「まさか、こんな授業中に出てくるなんて」

そう言いながら、文月学園から出てきたボイジャー、ファリーナ、パトローラの3人はエマから受けた連絡を元に目的地である砂浜へと向かっていた。

既に向かっている介人がワールドと戦っている情報を聞いており、3人は焦りながら、向かう。

「それにしても、今度のワールドって、確かどんな奴だっけ、姉さん」
走りながらも、ファリーナはふと気になった事をパトローラに聞く。

「聞いた話だと、海賊が関連しているワールドと聞いたけど、そこまで詳しい事はっ」

そう言いながらも、既に人が少なくなった頃になると共に、彼らの前に一つの人影が立ち塞がる。

その容姿はまさに銀色の海賊と言うべき姿であり、その手には大きな舵輪を思わせる剣を手持っていた。

「まさか、あれが目的のワールド？」

そんな疑問に思うよりも先に、海賊はそのまま3人に向かつて行く。

「うわっ、なんだが、話を聞いてくれそうな雰囲気じゃないなっ」

その言葉を表すように、海賊はそのまま3人に向けて、斬りかかってくる。

それに合わせるように、3人もまたギアトリンガーを取り出し、そのまま自身の変身に使う為のセントイギアをセットする。

「「チェンジ全開!!」」

それと共にハンドルを回しながら、チェンジする事によって、3人はそのままゼンカイジャーへと変身する。

「悪いけど、出てきた以上はさっさと倒されてよね!」

その言葉と共にファリーナはその両手に装備したトンファーで海賊に攻撃を仕掛けていく。

トンファーによる打撃を受けた海賊は大きく吹き飛ばされるが、それでもすぐに起き上がる。

「余所見は厳禁よ!」

だが、その時には既にパトローラの姿はなく、彼女は海賊の背後に回ると同時に蹴りを放つ。

「これで決める!」

それによって大きく体勢が崩れた海賊に対し、今度はボイジャーが手に持った大砲で

あるボーイジャルキャノンの引き金を弾く。

それにより、ボーイジャルキャノンによる一撃が、真つ直ぐと海賊に向かって襲う。しかし

「この程度で、ゼンカイジャーと名乗るとはね」

「えっ」

海賊はその一言と共に剣にあるスイッチを押す。

すると、ファリーナの身体には舵輪型のロックオンマークが現れ、同時にファリーナと海賊の間に縄が現れる。

そして、そのままファリーナに引き寄せられるように海賊は移動し、そのままボーイジャルの攻撃を避けた。

「なっー!」

突然の事で驚きを隠せないファリーナに対して、海賊はそのまま蹴り上げる。

「ファリーナっ!」

それによつてファリーナは空中へ投げ出され、動揺しているパトローラへと狙いを変えた海賊は剣を折リたたむと同時に、その引き金を弾く。

すると、銃弾がパトローラに襲い掛かり、彼女も同じく空へと飛ばされる。

更に追撃するように、2人の方へ向けて海賊は飛び上がり、手に持った剣を振るう。

その攻撃に合わせるように、ボイジャーもまた砲撃を行うが、それら全てを弾き飛ばす。

その間にもファリーナは何とか着地するも、そこに待ち構えていたかのように海賊が襲いかかり、ファリーナの首を掴む。

「かつ……あつ」

息苦しさに悶えるファリーナであつたが、海賊はそのまま振り回し、地面へと叩きつける。

それと同時に、地面に大きなクレーターが出来るほどの衝撃を受け、ダメージを負う。

「ぐうっ!？」

「っー」

その光景を見たパトローラはすぐに怒りと共に、手に持ったギアトリンガーにセンチギアをセットする。

【20バーン！カーレンジャー！】

音声が発ると共に、パトローラの両足には車を象ったタイヤが装着されると共に、そのまま海賊に向かって走り出す。

「ふうん、カーレンジャーなんだ。

だったら、こっちも」

「えっ」

その言葉と共に海賊の手元に来たのは、SDを思わせるキャラだった。

「行くよ、アヴィ」

「了解っぷー」

その言葉と共にアヴィと呼ばれた存在はそのままセンタイギアに代わり、手に持った舵輪の中へと挿入する。

同時に襲い掛かるパトローラに対して、海賊はまるでサンバを踊るように動きながら、その攻撃を捌き始める。

しかも、それだけではない。

「はあー」

【ヨーソーロー・クルマジックに、レボリユーション——ン——ン】

その音声と共に、海賊の身体に車を思わせる鎧が装着され、その姿を変える。

「なっ」

驚きを隠せないパトローラに対して、海賊は足にあるタイヤが走り出し、そのまま真っ直ぐとパトローラに向かう。

そのスピードはカーレンジャーの力を得ていたが、海賊の速さはそれ以上であり、気付いた時にはもう目の前まで迫っていた。

慌てて防御しようとするパトローラであったが、それよりも早く海賊の拳が腹部に直撃する。

その一撃を受けたパトローラは大きく吹き飛ばされ、壁に激突してしまふ。

「さっきのは、カーレンジャーの？」

一体、どういう事なんだ」

それを見て、驚きを隠せないボイジャーに対して、海賊は笑みを浮かべる。

「少しは分かっているようね。

少しは見所はあるようだけど、駄目ね。

来て、ビヤツコ」

「よっしやあ、出番やなあー！」

それと共に海賊の手には別の存在が現れ、そのままセンチギアに変わる。

【ヨーソロー！キリーヨクに、レボリューション——ン！】

それと共にまるで龍舞を思わせる動きと共に、その姿を変える。

先程までの車を思わせる鎧から一転、まるで中国の鎧を思わせる軽装備であった。

「さっきのも、まさか、海賊というのは、以前介人が言っていたゴーカイジャーのマジア」

「違うよ。

そもそも、私はマジアじゃない」

「えっ」

「それじゃ、そろそろ終わらせるよ」

そう言うと、海賊は手に持つ剣を振りかざす。

それに対して、ボイジャーは咄嗟にボイジャーキャノンを構えて、引き金を引く。だが、その攻撃は海賊に当たる前に消えてしまう。

そして、その隙を狙って海賊の刃が迫る。

しかし

「そこまですておけ」

その攻撃を止めたのは、介人だった。

「介人！」

それに一安心した様子だったが、介人は何やら呆れた様子で海賊を見ていた。

「なんでこんな事をしているんだ、理乃」

「理乃？」

その言葉に疑問に思っていると、海賊はそのまま変身が解除される。

そこに立っていたのは赤い髪に文月学園の制服を着崩している少女が立っていた。

「こつちに帰ってきて、お兄が新しいメンバーを集めたと聞いたから、少し腕試しで戦ってみたの」

「おっお兄?」

混乱しているファリーナはそのまま立ち上がる。

「ああ、悪いな。」

こいつは海城理乃。

俺の妹だ」

「妹……ええ!?」

突然の事に驚くしかないファリーナに対し、理乃は不思議そうな表情をする。

「どうしたの? そんなに驚いて」

「いやいやいやいや、いきなり現れたと思ったら、妹とか言われても。」

それに、腕試しって」

少し納得がいかないようにファリーナはそのまま理乃に尋ねる。

「別に。」

ただ、ジユランさん達のように戦えるかどうか試しただけ。

けど、とんだ期待外れだった」

「おい」

「だって、全然強くないじゃん」

「お前なあ」

「まあ、いいわ。」

とりあえず、今度こそ帰る」

そう言いながら、理乃はその場を後にする。

「大丈夫か、2人とも」

「はい、なんとか」

何とか立ち上がったフェアリーナはそのまま倒れているパトラーの方を見る。

その顔には怒りの色が見えていた。

だが、それは当然の事だろう。

何しろ、自分の仲間を馬鹿にしたような発言を受ければ怒るのは当たり前だった。

だから、介人はその怒りを止めるつもりはなかった。

「なあ、介人。」

ずっと聞きたかったんだけど、俺達以外のゼンカイジャーって、そんなに強かったのか」

その言葉に少し不安を覚えるように、ボイジャーは尋ねる。

それに対して、介人は

「ああ、強かった。」

あいつらは、今でも俺の大切な仲間であり、絶対、お前達よりもずっと強い」

そんな事ない。お前達も強い。

そんな言葉を3人はどこか期待していたが、帰ってきたのは、無情な事実だった。「でも、それはずっと一緒に戦ってきたから、一緒に強くなったからだ。」

まだまだ皆とは、まだまだこれから、全力全開で一緒に戦えば、強くなれる」「そう、なのか」

その言葉を聞いて、ファリーナは思わず落ち込む。

だが、それでもまだ希望はあった。

「けど、お前達は強くなる。」

絶対に」

「えっ?」

「確かに、最初は弱かったかもしれない。」

けどな、それはスーパージョウの誰かが通る道で、俺達が通った道でもある。

だから、お前達にはまだ成長の余地がある。

もつと、自分に自信を持てば、きつと強くなれると俺は信じてる」

「……」

「ああ、もう、難しく考えるのは止めた!」

その言葉と共にファリーナは立ち上がる。

「弱い事ばかり気にしていても駄目ですよ、姉さん！ボイジャー！」

今は、もう、あの生意気な理乃を見返すだけ強くなる！それだけです！」

「ふっ、そうだな。」

それなら、早速特訓を始めるぞ！」

「そうだね!!」

そう言つて、フアリーナとボイジャーも立ち上がっていく。

「だけど、お前達、まだ学校、終わっていないぞ」

「「あっ」「」

「まったく、もう」

そうして、介人もまた立ち上がり、四人は教室へと戻っていくのであった。

「くそっ」

一方その頃、理乃は悪態をついていた。

何故、兄がああ3人の面倒を見るのか。

自分より強いはずなのに。

「少し荒れていますよ、理乃様」

「なに、文句あるの、バイオン」

そう言いながら、後ろから近づいてきたバイオンに悪態を吐き続ける。

「いえ、私はただ、介人様にご迷惑をおかけしないように」

「うるさい」

「申し訳ありません」

その言葉と共に、バイオンはそのまま姿を消す。

「……ふん」

理乃は先程までの戦いを思い出す。

全く相手にならなかった。

だからこそ、理乃は

「私は、今度こそ、お兄の約に立つ。

その為に、この力を手に入れた」

そう言いながら、ギアダリンガーとソーカイザーギアを見つめる。

立ちましたという声と共に

「介人さん、お願いします。」

私の隣にいてくれ」

そう言いながら、エマは俺に縋りつくように言う。

「嫌だ」

「何かをして欲しいなんて言いません。」

ただ、隣でいてくれるだけで、十分なんです」

必死に目に涙を溜めながら、頼むエマ。

しかし、俺はそれを否定する。

「絶対に嫌だ、諦めて」

「そんなんっ」

その言葉と共に、俺はすぐにその場から離れようとする。

しかし、ガシッと俺の足を掴む。

「お願いします、捨てないで下さいっ！」

「全力で断る！」

必死に、捨てられないように俺の足にしがみ付くエマ。

「ただ、隣にいてくれるだけで良いんです！」

隣でテストの解答を見せてくれるだけで良いんでからあ!!」

「絶対嫌だああああつ!! お前のテストの点数が酷いの知ってんだよおおおつ!!」

必死に懇願するように叫ぶエマだったが、それを拒絶するかのようにつぶやき声を上げる。

「うわーん！ 介人のバカアアアッ！」

そう言いながら、エマはそのまま、まるで子供のわがままを行うように

「ばか、ばか、ばかあ……」

と呟き続ける。

「おい、落ち着けて」

そう言っても、エマは泣き止まず、ずっと俺に罵言雑言を浴びせ続けていた。

そして、暫くすると、段々と落ち着いてきたのか

「見せてくれないと、私、何をするか分かりませんよ」

「うわあ」

脅してきた。

「本当に何しやがる気だよ!？」

「さあ?」

しかし、それでも俺は首を横に振る。

「ダメなものはダメだ」

「どうしてもですか?」

「ああ、どうしてもだ」

しかし、まだ食い下がるように見つめてくる。

「じゃあ……、私のこと嫌いなんですか? やっぱり」

「いや、それは今、関係あるか?」

というよりも、お前はある程度、俺よりも頭良かっただろ」

「いやあ、実はここ最近ゲームばかりしていて、勉強してなかったんですよ」

「だからと言って、俺に助けを求めらんじゃねえええつ!!」

思わず叫んでしまう。

「だってえ……」

「大体、何でそんなにも必死になるんだよ」

「そりゃあ、私の成績が悪いと、介人さんへの給料も来なくなりますからね」

「……ちよつと待て。」

給料? 俺、これまで活動してきた中で、お前から給料貰った事ないぞ」

「あつ、やべえ」

「・・・まさかとは思うけど、これって、お前の自業自得なんじゃないか？」

「いえ、あの、そのですね……」

えっと、あれですよ、あれ」

「どれだよ」

「ほら、あれです」

私が頑張れば、きっと介人さんは助けられると思ったので」

「・・・とりあえず、お前にはもう二度と頼まないようにするわ」

そう言いながら、俺はエマの元から離れる。

「あつ、ごめんなさい！ 冗談です！ 冗談！」

まあ、その給料に関しては、大きな出来事があるのでえ、その為に貯めていますか

らあ」

「はあ？」

何か隠しているようだったが、実際に貯めているのは嘘はついていないようだ。

嘘をつくとか、かなり目が泳ぐのである程度分かるが、それにしても

「なんで、頬を赤くしているんだ？」

「そ、それよいい、今日は良い天気なので、一緒にお出かけしましょう♪」

「いや、これから学校だろ」

「休んで行きましようよ」

「無茶言うな」

そう言つて、俺はエマの手を離す。

「あつ……」

少しだけ寂しそうな表情をするエマ。

「なんだよ」

「いえ、その」

なんか、可笑しいぞ、こいつ。

これまで、こいつは文月学園一の屑女と呼ばれる程の屑だったはずなのに、最近はどうもおかしい。

「なんか、隠しているのか?」

「そつそんな事は」

そう言いながら、エマは未だに隠そうとしている。

そう疑問に思っていると、後ろから気配を感じた。

「エマっ」

「えっうわあ?!」

気配を感じ、俺はそのままエマを抱えてその場を転がる。

同時に姿を現したのは忍者服を着て狐面を着けた鬼の怪人がおり、その忍者服には赤・青・黄・白・桃の手裏剣が重なったマークが付いている。

「まさか、いきなりマギア。」

それもニンニンジャーのワルドとはな」

「拙者は忍者鬼月。」

これよりの目的で、貴様が邪魔になったと判断した為、ここで暗殺させて貰う」

その言葉と共に鬼月は俺達に向けて、手裏剣を投げる。

俺はすぐにギアトリンガーを手に持ち、向かってくる手裏剣に向けて引き金を弾きながら、センタイギアを挿入する。

「チェンジ全開！」

【ババン！ババン！ババン！ババン！ババババン！ゼンカイザー！】

そして俺の姿はゼンカイザーへと姿が変わると同時に、そのままギアトリンガーを持ちながら、目の前で襲ってくる鬼月に向かって走り出す。

ゼンカイザーとなった事で身体能力が大幅に上昇している今なら行ける筈だと思っていたが、次の瞬間、予想外な事が起きている事に気付く。

それは鬼月の攻撃だった。

鬼月はなんと右手に持った短刀から風のような刃を放ち、それが俺の首筋に当たりそうになる。

「うわあ、危なっ!？」

それを間一髪で避け、なんとか難を逃れた。

しかし、それで終わりではなかった。

今度は左手を向けて、そこから火炎弾を放つ。

まるで、忍術のように次々と攻撃を放って来る。

「だったら、忍者には忍者！」

カクレンジャーだっ！」

その言葉と共にカクレンジャーギアを手に取り、そのままギアトリンガーに装填する。

「18バーン！カクレンジャー！」

その音声が鳴り響くと同時にニンジャレッドの幻影が現れ、そのまま俺と一体化する。

それにより、ニンジャレッドが最も得意とした忍術、分け身の術による分身の術を行なった。

「ほう」

分身した俺の姿を見て、鬼月は感心するように声を上げる。

「この数を相手に勝てるか？」

そう言いながら、俺達は一齐に動き出し、俺を含めた三人の俺と対峙する。

「流石にこれは厳しいだろ」

「ああ、そうだな。」

だが、その前にお前を倒す」

「やってみるがいい」

そう言った後、俺は一気に加速して、鬼月に接近すると、蹴りを放った。

それに対して、鬼月はそれを片手で受け止める。

「ふんっ」

「ぐっ?!」

そのまま押し返され、俺は後ろに下がる。「なかなかのパワーだ」

「そりやどうも」

「では、こちらからも行くぞ」

そう言うと、鬼月は自身の身体を回転させ、竜巻を発生させる。

それによって周囲の木々が吹き飛び、その威力は凄まじいものだった。

「うおおおおおっ!!」

それに巻き込まれそうになった俺は慌ててその場から離れようとするが、竜巻は追いかけるように移動してくる。

「くそっ」

このままだとやられると判断し、俺は一旦距離を取る。

「逃げれると思うな」

その一言と共に鬼月は先程よりも強力な風の渦を作り出し、俺を飲み込もうとする。

「ぐっ」

その圧倒的な力に俺は避ける事も出来ず、ただ耐える事しか出来なかった。

そんな中、ふと視界の端で誰かが動くのを感じた。

俺は視線を向けると

「立ちました!」

「えっ?」

聞こえたその一言と共に、俺を掴んだ人物を見つめる。

「こんな台風に巻き込まれたら、死にますよ、介人さん」

「フラグちゃん」

それは、俺がこの世界に来る前のパートナーである死神のフラグちゃんだった。

突然の事で驚きを隠せない中で

「そういう事だ！」

それと同時に鬼月を打ち抜く音。

その声にも聞き覚えがあり

「ジュランもって」

「よう、介人。」

久し振り」

そう言いながら、挨拶してくるジュランを見て、俺は思わず固まってしまった。

「お前、小さくなっていないか」

それは、まさにSDのゼンカイジュランというべき姿であり、俺はジュランの姿を見て、固まっていた。

「実は、ジュランさん達のメインボディの修理にはまだまだ時間がかかりまして、それでも介人さんの力になりたいという事で、カッター君やリッキー君達のデータを参考にこうやって戻ってきたんですよ」

固まる俺の代わりに、フラグちゃんが説明してくれたが

「いや、さすがにこれで」

「ちちっ、この俺には実は驚くべき機能が追加されているんだ。」

という事で、カモン、ゼンカイガッターイギア！」

「えっ?」

それと共に俺の手元に来たのは、手の平サイズのゼンカイイーグルだった。

しかし、以前はコックピットになっていた部分はまるでゼンカイギアを入れるようなパーツが追加されている。

「という事で、介人。」

その中に俺のギアを入れるんだ」

それと共にジュランはそのまま俺にゼンカイジュランのギアを投げる。

「よく分からないけど、やってやるか」

その言葉と共に俺はゼンカイガッターギアにジュランのギアを入れる。

「16バーン!ゼンカイジュラン!」

「それをギアトリンガーにセットです」

「ああ!」

それと共に俺はギアトリンガーにゼンカイガッターギアをセットする。

「スーパーチェンジ全開!」

「スーパー!ババン!ババン!ババン!ババン!ババババン!アームド!ゼンカーイ

!」

その音声で鳴り響くと同時に、俺の身体にはジュランを思わせる赤いアーマーが装着

され、二の腕には16番という数字が目立つ腕輪が装備される。

それと共に、俺の手にはジュランが機械変形した姿であるジュランテイラノを思わせる巨大な剣を手を持つ。

「なんだっ、これは?!」

「ジュランさんを鎧のように身に纏う事でパワーアップした姿、その名もアームドゼンカイザーです!!」

そして、手に持つ武器は龍獣奏撃剣です」

「おお、なんだか分からないけど、燃えてきたぜ!」

それと共に俺は自分の身体ぐらいはあるだろう龍獣奏撃剣を振り回しながら、構える。

「それじゃ、格好良い所を見せようぜ、介人!」「ああ!」

ジュランの言葉と共に、龍獣奏撃剣を構えて、俺は鬼月に斬りかかる。

それに対して鬼月は風の刃を作り出し、俺に向かって放つがガキイツン!

その攻撃は全て弾かれる。

どうやら、このアームドゼンカイザーの力で強化された俺の装甲は並の攻撃では傷一つ付かないようだ。

そのまま、一気に鬼月に接近した俺は龍獣奏撃剣を振るう。

その一撃の威力は強く、振るうだけで突風が吹き荒れる程だった。

「先程とは違うようだな。」

だが」

それと同時に鬼月は分身を生み出し、一斉に攻撃を仕掛けてくる。

「介人、龍獣奏撃剣にセンタイギアを入れろ」

「どこか」

それと共に、俺はそのままセンタイギアを入れられるだろう部分に次々と入れていく。

「１ーバーン！ マスクマン！ １ーバーン！ ダイレンジャー！ ３ーバーン！ ゲキレンジャー！」

その音声と同時に三大スーパー戦隊の力の源であるオーラ、気力、激気が刀身に束ねる。

それにより、龍獣奏撃剣は巨大化し、まるで中国刀を思わせる形へと変わる。

「ファイティング・スピリッツバースト」

同時に周りに襲い掛かる鬼月に向けて、龍獣奏撃剣で切り裂く。

周りを囲んでいた鬼月は、それによって切り裂かれ、消滅していく。

その威力は凄まじく、一振りで数十体の鬼月を消し飛ばし、同時に姿が消えるのを確

認する。

「ふう、なんとかなったか」

そう言いながら、変身を解除する。

「久し振りで、なかなか良かったじゃないか、介人」

「おうよ、サンキュージユラン」

俺はそのまま久し振りに会ったジユランとハイタッチする。

「にしても、なんだか修羅場だな」

「えっ?」

その言葉に俺は振り向く。

「なんで、まだ担当じゃないあなたがいるんですか」

そう言いながら、フラグちゃんを睨むように言うエマ。

対して、フラグちゃんは

「いえ、私はまだ介人さんの担当から外れた訳ではありません。

第一、あなただつて介人さんの担当なんですか? さつきから、ずっと見てましたけど

随分と横暴なやり方してますよね?

そんなのが介人さんの担当として務まるとは思わないのですが……」

「何を言うんですか。」

介人さんだったら、私の方が相応しいに決まってるでしょう。

それに私の実力なら、あなたのような小娘なんて簡単に倒せるんですよ」

「へえー、面白い事言ってくれんじゃないですか」

エマとフラグちゃんの言い争いを見ると

「結局、これってどういう状況な訳？」

「とりあえず、学校に行くか」

俺はジュランを連れて、そのまま2人を置いていく事にしたのであった。

悩みの先に

その日、ボーイジャルは思い悩んでいた。

文月学園で起きるワルドとの戦いの中で自分は役に立っているのか。

ゼンカイザーとして活躍する介人を初め、多くのメンバーが集まり始めたが、その中でボーイジャルは目立った活躍をしていない。

最初は介人とのタッグで2人で戦っていたが、メンバーが増える内に、その活躍は少なくなり、最近では彼の妹である理乃から、力がない事を突きつけられた。

「強くなりたい。」

けど、そんな簡単に強くなんて」

そう思い悩んでいた時だった。

「少し隣良いですか、若人よ」

「えっ?」

誰もいないはずの教室から聞こえた声に、思わず振り向く。

そこには誰もおらず、見えるのは先程まで机の上にはなかったフィギュアのような何かだった。

「これは」

「おう、俺が話しかけたぜ」

「えっ?!」

その言葉に驚きを隠せず、後ろに倒れる。

「痛ったたあ」

「おいおい、そんなに驚く事かよ」

「驚きますよ!」

というよりも、誰ですかあなたは?」

突然現れた人物に驚きを隠せないボイジャーは思わず質問する。

「俺か?」

俺はジュラン、ゼンカイジュラン!

まあ、お前のパイセンという感じだな」

「ばいせん? ああ、先輩か!」

「そういう事」

それと共にジュランは軽い感じで言うと、そのまま机に座る。

「あの、その姿は一体?」

「ああ、これの事については、また今度。」

それよりも、何か悩みがあるようじゃないか？」

「えっ」

凶星を突かれてしまい、思わず黙ってしまふ。

「話したら、少しは楽になると思うぜ？」

まあ、パイセンである俺にドーンと相談してみなさいって」

「……分かりました。」

実は

その言葉と共に、ボイジャーは自分の思いをジュランに話す事にした。

「成程ね、要するに自分だけが役に立ってないんじゃないかと思ってる訳だ」

「はい、そうなんです」

「確かに、介人の妹ちゃんの言う通りかもしれないねえな。」

「だがよ、そんな事は気にする必要なんてないんだぜ」

「えっ!?!」

ジュランの言葉に驚いたボイジャーだったが、続けてジュランは続ける。

「いいか？」

「一緒に戦う中で、強さは確かに大事だ。」

「けどな、大切なのはそればかりじゃないんだぜ」

「大切……」

「そうだ。」

力だけじゃなく、他の部分だって重要だ。

誰かのために頑張れる優しさや勇気も必要だし、時には自分が傷つく事も恐れずに立ち向かっていく姿も必要なんだよ」

「……」

「結果出すまで、全力全開だ！」

「っ！」

「介人がよく言っていた言葉だ。」

この世界で、一緒に戦ってきたお前なら、分かるだろ」

ジュランから言われた一言を聞いたボーイジャーは改めて思う。

（そうだったのか……）

そして、今まで悩んでいた事が晴れた気がした。

同時に、自分の役割を見つけたように思えた。

それと同時に、決意を固める。

「んっ？」

「なんだこれは？」

そんな彼らが考えていると共に、囲い込まれる空間。

それと共にボイジャルが見えたのはまるで炎の竜を思わせる怪人だった。

一步、歩けばたちまち炎に包まれ、空間の補助がなければ、すぐに火事になりそうな程だった。

その身体にはまるで救急隊員を思わせる鎧を身に纏っているが、その本人が火事を起こしている皮肉な形だった。

「ありや、ゴーゴーファイブパイセンのワルドかつー！」

「っ」

それを見ると同時にボイジャルは飛び出す。

「ボイジャル」

「ジュラン先輩。」

見ていてください。

俺も俺ができる事をやってみます」

「・・・ああ、分かった」

それと共にジュランは頷く。

「行ってこい、後輩ー！」

「はいっ、チェンジ全開ー！」

それと共にボーイジャーはゼンカイボーイジャーへと変わると同時に、背中にあるジェットを噴射させながら、ワルドに向けて殴る。

「貴様は」

そう言いながら、ワルドはボーイジャーに向けて言う。

「宇宙パワー！ゼンカイボーイジャーだ！」

それと共にボーイジャーは手にボーイジャーキャノンを持つと、そのまま後ろに下がりがら、攻撃を行う。

ボーイジャーキャノンから次々と放たれるミサイルは真つ直ぐとワルドに向かって、襲い掛かる。

しかし、ワルドはその手に槍を持つと共に、襲い掛かるミサイルを全て斬る。

「なっ」

「我の炎の前に、燃え尽きろ」

同時にワルドはもう片方の手に銃で真つ直ぐとボーイジャーに向けて引き金を引く。

銃から溢れ出る熱線はボーイジャーの肩を掠める。

だが、その威力は凄まじく、直撃を受けた部分はドロドロに溶けている。

それを見ていたジュランは思わず呟く。

「ボーイジャー！」

その瞬間、ボイジャーキャノンは爆発し、周囲を巻き込む程の爆風を生み出す。しかし、ワルドはそれを予測していたかの様に、爆心地から離れる。

その結果、ボイジャーは吹き飛ばされてしまう。

そして、地面に倒れたまま、動けなくなる。

「ふんっ、この程度か」

そう言い、ワルドはその場から去ろうとする。

「結果出すまでっ」

「っ」

それは動けなくなったはずのボイジャーから聞こえた声だった。

「全力っ、全開だああ!!!」

ボイジャーは倒れていた状態から立ち上がると、両手に持っていたボイジャーキャノンを構える。

だが、先程の一撃でダメージは大きく、ボイジャーキャノンの砲身は変形している。

それでも、ボイジャーは諦めずに構えた。

「無駄な事を」

「本当にそう思うなら、お前の負けだ」

それと共に、ワルドは真横から衝撃を受ける。

同時に見ると、そこには先程までいなかった介人が、ゼンカイザーに変身し、立っていた。

「介人！」

それを見て、笑みを浮かべるジュランとボイジャル。

「待たせたな」

そう言いながら、介人はそのままボイジャルの肩を叩く。

熱線を浴び、溶けているが、気にせず、介人は頷く。

「まったく、お前はいつも遅いんだよ」

そう悪態をつけながらも、そのままボイジャルは笑みを浮かべる。

「さて、介人。

ここままでこいつが頑張ったんだ。

ここからは俺達も良い所を見せようぜ」

「ああ、行くぜジュラン！」

それと共に介人は手に持ったゼンカイガッタイギアを手に持ち、そのままギアトリンガーにセットする。

「スーパーチェンジ全開！」

それと共に介人とジュランはそのまま合体し、アームドゼンカイオーへと変身する。

「秘密の「恐竜パワー!アームドゼンカイオー!」

「宇宙パワー!ゼンカイボイジャー!」

「3人合わせて!機界戦隊ゼンカイジャー!!」

それと共に介人はその手に持つ龍獣奏撃剣を構える。

「全力全開だあ!!」

それと共に介人は走り出し、ボイジャーは手に持ったボイジャーキャノンの引き金を引く。

ワルドはすぐに先程のように槍でその攻撃を切り落とした。

しかし、人の大きさ程あるだろう大剣、龍獣奏撃剣を防御を怠り、その一撃を食らう。

「ぐう!!」

懐に強烈なダメージを感じたワルドは顔を歪ませながら、すぐに銃を取り出そうする。

しかし、今度はボイジャーがギアトリンガーで、その手に向けて攻撃した。

それにより、銃を落としてしまい、二度目の攻撃を受ける。

「これはっ」

ワルドからしたら、先程までまるで虫けら程度の印象しかなかったボイジャー。

しかし、彼の攻撃は全て介人の攻撃の手助けをしており、ワルドの身動きを封じてい

た。

「あんたは確かにボイジャルを1人で追い詰める力はあつたさ。

けどな、ボイジャルの本当の強さは、仲間を支える強さだ。

その強さに比べたら、お前の強さなんて、ちっぽけなんだよ!!」

そのジュランの言葉と共に、介人は手に持った龍獣奏撃剣でワルドに斬りかかる。

その斬撃により、ワルドの手から腕にかけて傷が入る。

それにより、ワルドは思わず膝をつく。

「行くぜ、とどめ全開だ!」

同時に介人は懐から取り出した3枚のセンタイギアを龍獣奏撃剣に入れる。

「16バーン!ジュウレンジャー!27バーン!アバレンジャー!37バーン!キョウリュウジャー!」

その音声が届り響くと同時に龍獣奏撃剣は光輝き、そこにはジュランが変身したゼンカイジュランになる。

「ジュラン先輩!」

「一時的に復活、ゼンカイジュラン!

という事で、決めるぜ、2人共!」

同時に介人の手にはキョウリュウジャーの必殺武器であるケントロスパイカー。

そして、ボイジャルの手にはスーペリアダイノボンバー、ジュランの手にはハウリングキャノンを持つ。

「トリニティ！ダイナソー！」

ボイジャルとジュラン、2人は声を揃えるように引き金を弾く。

それによって、巨大なエネルギーが放出し、二つの光線が一つに交わる。

そして、介人もまた手に持ったケントロスパイカーを投げ飛ばす。

「バスター!!」

同時にケントロスパイカーは巨大な光線と融合し、巨大な恐竜を思わせる姿へと変わる。

る。

そして、その一撃はワールドを貫いた。

その瞬間、ワールドの身体は爆発し、吹き飛ばす。

「よっしゃ、一丁あがり！」

同時にジュランは再び龍獣奏撃剣に戻り、介人とボイジャルはそのままハイタッチす

る。

しかし

「まだだだあ!!」

同時にワールドが校庭に飛び出し、巨大な竜を思わせる姿へと変わる。

「まだ、悪あがきするか。」

介人、ここはあれしかないだろ」

「えっ、まさかこれは」

「そういう事だ、後輩、ついて来れるよな！」

「っはい！」

ジュランの一言を聞いて、ボイジャルはそのまま頷く。

「だったら、行くぜ！」

それと共に介人はゼンカイガッタイギアにあるゼンカイジュランギアを反対にして、そのまま引き金を弾く。

【ビクバーン！】

その音声と共に介人は巨大化する。

それに合わせるようにボイジャルもまた巨大化すると

「それじゃ、行くぜ、全力合体！」

鳴り響く音声と共に、介人達の身体は変形する。

各々が半身と思わせる形態へと変わると同時に、合体する。

それによって、誕生したのはまさに一つの巨大戦艦を思わせる姿だった。

巨大な剣である龍獣奏撃剣はボイジャルの持つボイジャルキャノンと合体する事に

よって、テイラノサウルス型のキャノン砲が特徴的な姿だった。

そして、各々のパーツが合わさる事によって、完成する。

「アームドゼンカイオー ジュラジャル!!」

3人の心が一つに合わさった姿、アームドゼンカイオー ジュラジャルが誕生すると共に、ワルドに接近する。

ワルドは口から炎を吐き出すが、ジュラジャルはキャノン砲を振るうだけでそれを弾き返す。

その隙を狙い、ワルドは剣を振り下ろす。

しかし、それはジュラジャルのキャノン砲の一撃で打ち消される。

「ぐっ」

「さあて、まだまだ行くぜ!」

同時にキャノン砲は大きく口を開くと共に、まるでガトリングを思わせる銃弾の嵐でワルドに攻撃する。

それによりワルドの動きは鈍くなり、次第に弱まっていく。

「さあ、行くぜ、とどめ全開!」

同時にキャノン砲にセントアイギアが次々と装填される。

「9バーン! チェンジマン! 10バーン! フラッシュユマン! 14バーン! ファイブマン

！」

鳴り響く音、それと共にキャノン砲へとまるで虹色を思わせるエネルギーが集つていく。

「『ボイジャル！ギヤラクシーバスター！！』」

それと共に狙いを真つ直ぐと、ワルドに向けると同時に、砲身からは凄まじい光線が放たれた。

その一撃を受け、ワルドの身体は崩れ落ちていく。

それと同時にワルドは人間の姿へと戻り、倒れ込む。

「ふう、なんとか、なつたか」

それと共に合体は解除され、そのまま地面に倒れる。

疲労と共に、一歩も動けない中でボイジャルは

「俺、戦えたかな？」

「さつきまで一緒に戦っていたのに、まだそんな事を言うのか？」

そうジュランは呟き、ボイジャルは少しだけ笑みを浮かべた。

「そうだな、ありがとう、ジュラン先輩、介人」

そう言いながら、ボイジャルは気を失う。

「まったく、無茶をしゃがるぜ。」

まるでお前を思い出すぜ、介人」
「えっ？誰の事」

介人が首を傾げると、ジユランは
「ああ、気にするな」

その一言だけ呟いた。

特別編予告

文月学園の生活に慣れ、ワルドとの戦いを乗り越え、無事に一学期を乗り越えた介人達。

夏休みに入る事もあり、各々が様々な思いと共に、夏休みの準備を行っていた時だった。

しかし、その事件は夏休み初日、それが始まった。

「速報です！」

ただいま、文月学園に在籍している生徒で凶悪犯がいる事が発覚しました。

その凶悪犯の顔がこちらです」

「文月学園に凶悪犯？」

そんな奴、いたっけ？」

「エマさん、何かしましたか？」

「なんで私に一番の疑われるんですか！」

そう言いながら、全員がそのテレビを見ると

「全力罪海城介人。詐欺罪閻魔エマ。脅迫罪罪死亡フラグ。

他にも4名のキカイノイド達による犯罪集団の存在が判明しました」

そこに写されているのは、海城介人を初めとしたエマ、フラグちゃん。

そして、ゼンカイジャーのメンバーであるバイオン、ファリーナ、パトローラ、ボイジャーの4人だった。

「……はああああ!!!」

全く心当たりのな一同は、危険を感じ、家から逃走する。

しかし、既に「介人達を初めとしたメンバー達が凶悪犯一味だ」とする偽りの情報が
大々的に流布される。

それにより、介人達は現在住む街から逃げ出す事になる。

「どうするんだ、介人」

集ったゼンカイジャーメンバーは、街から逃げ出す事に成功した。

「そんなの、決まっている。」

全力で、逃げながら、こんな事をやりやがった奴を捕まえる!」

「捕まえて、どうする?」

「生まれた事を後悔させてやるぜ!」

「さすが、介人さんです!」

「いや、二人共、思いつきり悪者顔になっていきますよ!!」

それによって始まる介人達は無実を証明する為の旅が始まる。

日本中に狙われながらも、犯人の情報を集めていく。

しかし、彼らの行く手を阻むは

「そんじゃこれから、

お前を逮捕させてもらうぜ♪」

「悪いが、警察の世話になる気はない!!」

その裏では

「お兄の無実の証明の為に力を貸して」

「勿論ですよ!」

海賊の金銀コンビ結成。

彼女達が巡るのは、事件に関係のある様々な舞台だった。

やがて辿り着いた先で待ち受ける真実に介人は

「そんなもんよりも」

「んっ?」

「そんな事よりも、焼き肉を食わせろ!!!」

「今、それを言いますか!!」

カオスがカオスを呼ぶ。

何が起きるか分からない特別編。

『劇場版風特別編 特典で世界を再構成する戦隊 焼き肉逃走劇』

「ところで、なんで焼き肉なんですか？」

「なんか、焼き肉を食いたくなつたからだ」

「そんな理由で!?!」

公開日2022年4月29日公開予定

全力麻雀対決

「屋上でご飯を食べようとしたら、何時の間にか文月学園の地下に入ってしまったね」

「思いつきり逆向きに歩いてたからな」

その日、俺達は昼食を食べる為に屋上へと向かっていた。

しかし、辿り着いたのはなぜかあった文月学園の地下室だった。

「それにしても、地下にこんな所があるんだ」

そう言いながら、フアリーナは周りを見る。

大ききとしては教室ぐらいの大ききでしかなく、そこには一つの机があった。

「これは」

「これは、麻雀卓じゃないですか！」

「ああ、麻雀か」

その言葉を聞くと共に、麻雀という事で、賭け事をよく行うエマが詳しいのも納得だ。

「それにしても、なんで麻雀がここに？」

「それは、俺が用意したからだ！」

そう言い、出てきたのは赤い甲冑を身に纏い、その身体には中国の伝説の存在が刻み込まれた人物がいた。

「お前は」

「俺は大連ゴーマ。」

「ここで貴様達の墓場だ」

「墓場って、なんで麻雀があるんだ」

「そこで、俺は思わず突っ込んでしまう。」

「そんなの決まっているだろ。」

「このまま普通に戦っても、負けてしまう。」

「ならば、この俺が最も得意な麻雀で倒す事にした」

「なんで、麻雀で」

「俺は思わず突っ込んでしまう。」

「だが」

「この麻雀卓には気力と妖力が合わさっている。」

「そして、勝負に敗れた者の魂を吸い上げる術を施している」

「なんで、麻雀に」

「介人さん、ここは私に任せて下さい」

「エマ」

そう言い、エマは俺達の前に出る。

「麻雀は私も経験がありますので」

「いや、エマちゃん、最近麻雀クラブから出てきたの知っているぞ」

「なんだか小遣いが無くなったとか言っていたな」

「おい、それって、この前渡した食費じゃないだろうな」

俺の後ろから次々と聞こえてくる言葉を聞き、俺はエマに問い詰める。

「えっ？違いますよ」

そう言うと、エマは

「さあ、勝負だ、大連ゴーマー！」

「本当にふざけるなよ、てめえ!!」

そう言いながらも

「待て、このままでは人数が足りない。

海城介人、それにファリーナと言ったな。

お前らも参加しろ」

「いや、俺、ルールなんて、ほとんど知らないけど」

「私も」

しかし、断る事もできず、そのまま俺達はそのまま席に座る。
「それじゃ、始めるか。」

ふむ、それでは、最初はお前が親だ介人」

そう言い、大連ゴーマは俺に言うが

「なんだとコラ！誰が親だ！お前みたいなかい子供、持った覚えはないぞオラあ！」
いきなり親とは、何を言っているんだ、こいつは。

「いえ、介人さん。」

親というのは、麻雀では一番最初に打つ人の事ですよ」

「そうなのか？」

「はい、ですから、私は介人さんの次になりますね」

そう言いながら、エマは牌を並べていく。

「よし、とりあえず、配るか」

それと共に麻雀が行われていく。

しかし、ド素人である俺とフリーナはそもそも牌というのが何なのかも分からず、ただ牌を見つめていた。

ちなみに大連ゴーマの方を見ると、あいつは既に勝利を確信しているのか笑みを浮かべていた。

そして、麻雀が始まり、一時間が経過するが

「フアリーナ」

「ああ、分かっている」

俺とフアリーナは互いに見つめ合い、ある結論が出た。

「全然ルールが分からない」

ただ麻雀のルールすら分からない俺達にとってはこの勝負はもはや勝ち目がない事は分かっていた。

「くくっ、どうやらここで俺の勝ちのようだな。

リーチだ！」

そう言い、大連ゴーマはリーチ？だったか。

何かを言った。

こうなったら

「ロン！」

「なっ」

俺は思わずロンと言いながら、大連ゴーマやエマがやったように牌を広げる。

「馬鹿な、何をっ」

「これは断么九！」

介人さん、これ当たっていますよ！」

どうやら、本当に当たっていたようだ。

大連ゴーマに取られるのはまずいと思って、思わず言ったけど、当たっていたのか。

「こっこんなの偶然だ」

「ああ、そうだな、偶然だな。」

けどな、フェアリーナ、俺達でも分かる必勝方法が分かったぜ！」

「必勝方法、それは」

「乗りでなんか言えば、なんとかなる!!」

「ええ!!」

俺の言葉を聞き、エマは思わず叫ぶ。

「いやいや、介人さん！麻雀はそんな「それだあ!!」フェアリーナさん！」

「そもそもルールが分からないんだったら、何をしても外れる可能性がある！」

「だったら」

「ああ、乗りに任せてやるぞ！」

「おお、その意気だ、フェアリーナ！　いくぞ!!」

「おうっ」

それと共に俺達は目を開く。

「反撃開始だ!!」

それと共に、俺達はとりあえず、なんとなく揃った牌を並べていく。

「全力!ゴツドハンド!!」

「波波斬!」

「天火星秘技・流星閃光!」

「超鋭鋭過激気斬!」

それと共に俺とフェアリーナはとりあえず適当な名前を言いながら、次々と牌を切っていく。

「こっこんな、無茶苦茶な事で」

「だけど、ほとんどが当たっているとは」

「馬鹿な、何故だ!?!」

そう言い、大連ゴーマは動揺する。

それに対して、俺とフェアリーナは

「さて、次はっ」

「こうなったらっ、はあああ!!」

そう言いながら、大連ゴーマは牌に気力や妖力を込めた。

「なっ何をするつもりだ!」

「これで俺の運を極限に上げた！」

これ以上、キサマラの好きにさせるか」

「上等だ、オラア！」「全力で抵抗してやる!!」

その言葉と共に俺とフェアリーナは同時に構える。

しかし

「まさかつ、これはっ天和」

「んっ?」

俺達が構えていると、なぜかエマが騒ぎ出した。

「天和だっ」

「んっ??」

すると大連ゴーマまで何やら騒いでいる。

「なあ、天和って一体何なんだ?」「さっぱり分からん」

「天和とは、親が既に役ができていた時にできる事です。」

確率は約0.00005%と言われておりまして、そして、今の状況ならば、これは、

私達の勝ちです！」

「おお!!」

そう言いながら、エマは喜ぶ。

「つまり、俺達の勝ちで良いのか」

「ぐつ、このまま、諦めてたまるかあ!!」

そう言いながら、大連ゴーマが立ち上がる。

それと共に、麻雀卓からエネルギーが大連ゴーマに吸い込まれる。

「キサマラから頂いた生命エネルギーで、このまま倒す!!」

「てめえ、負けたからと言って、狡いだろ!!」

「うぐう」

先程までの麻雀の影響もあって、身体が動けない。

「このままじゃ

「まったたく、連れてきたと思ったら、少し面倒になったわね」

「その声は」

聞こえてきた声、それは理乃の声だった。

「お兄にお客さんだけど、まずはこいつからだね」

その言葉と共に手にはギアダリンガーを手を持っていた。

そのままギアダリンガーにセンタイギアを装填する。

「チェンジ爽快!」

それと共に、理乃はそのまま踊り出す。

「なぜ踊るんですか？」

その状況が飲み込めないパトローラは全く大真面目に尋ねた。

「踊りは気にするな」

「いや、そんな事言っても、普通に『ヨーソロー！ソーカイン！レボリユーション！』あつ
そうパトローラが言っている間にも、理乃はソーカイザーへと変わる。

「海賊のパワー！ソーカイザー！」

変身が終わると共に理乃はそのままその手に持ったギアダリンガーを構える。

それに合わせるように大連ゴーマは素早い拳を理乃に向けて放った。

銃弾を思わせる速さで放たれた拳。

それは理乃に向かうが、ギアダリンガーの車輪でその攻撃を受け止める。

それと同時に展開したギアダリンガーの刃で一閃。

大連ゴーマに向けて放つ。

しかし、大連ゴーマはその動きを見切ったように後ろにバク転しながら、構える。

中国武術の達人を思わせる動きで構える大連ゴーマ。

それに対して、理乃は海賊がカットラスを構えるようにギアダリンガーを構える。

「爽快に決めるよ！」

理乃はその一言と共に、ギアダリンガーの引き金を引く。

同時に大連ゴーマの拳に車輪マークが現れ、ギアダリンガーとの間に光の縄が現れる。

その縄に引つ張られるように、理乃は真つ直ぐと大連ゴーマに近づくと、ギアダリンガーで斬りかかる。

「ふんっ！」

大連ゴーマはその攻撃に対して腕でガードしようとする。

だが、そのガードを突き破るように理乃はギアダリンガーを振り抜く。

一撃を受けた大連ゴーマの腕から血飛沫が上がる。

さらに、そのまま二撃目を放つためにギアダリンガーを振るうが、それを察するよう大連ゴーマは距離を取る。

だが、そんなことを許すはずもなく、理乃はさらに追撃を仕掛けようとするが

「天幻星・霧隠れ！」

大連ゴーマの拳から幻の相鉄線が理乃に向かって行く。

幻とはいえ、目の前にいきなり電車が現れた事で一瞬反応が遅れてしまう。

その結果、理乃は幻に飲み込まれる形で吹き飛ばされる。

吹き飛ばされながらも、空中で姿勢を整えるが着地には失敗して地面に叩きつけられる。

だが、それでもまだ戦意を失っていないのか、すぐに立ち上がる。

「こうなったらビヤツコ！」

それと共に理乃の元に来たのは、まるで白虎を思わせる人形が出てきた。

「あれは」

「カッター達のデータを元に作られた理乃さんの相棒の一人、ビヤツコですね」

「中国武術を使えるのは、あなただけじゃないのよ」

「ヨーソー！キーリヨクに、レポリューシヨ——ン！」

それと共にまるで龍舞を思わせる動きと共に、その姿を変える。

先程までの海賊を思わせる格好から一転、まるで中国の鎧を思わせる軽装備であった。

その変化を終えると同時に、一気に距離を詰めて大連ゴーマへ攻撃を仕掛けるが、その攻撃を防がれてしまう。

しかし、力負けている様子はなく、むしろ互角に近い戦いを繰り広げていた。

お互いに一步も譲らない攻防の中で

「ふう、吼新星・乱れやまびこ」

それと共にギアダリンガーの刃が震え出す。

「あれって」

「おそらくは、理乃が使っているのはダイレンジャーの一人であるキバレンジャーをモデルにしている姿だろう。

そして、乱れやまびこはあらゆる音を自在に操る事ができる」

俺の言葉と共に、理乃のギアダリンガーから音が鳴り響く。

それはまるで、スピーカーを通して音を流しているような不思議な音色だった。

その音の波を受けるように大連ゴーマの動きが止まる。

「ぐううっ」

耳を塞ぎながら、苦しむ大連ゴーマ。

その隙を逃すわけもなく、理乃の攻撃が続く。

ギアダリンガーの連続射撃を受け続ける

大連ゴーマだったが、次第にその勢いに圧され始める。

【全速前進！ 回せ回せー！ いっぱーい！ キーリヨクに、弩ツキューン!!】

「爽快に決めさせて貰うよ」

理乃はギアダリンガーを構え直すと、再び大連ゴーマに向かって突撃する。

その時、ギアダリンガーの刃にはまるで虎を思わせるエネルギーが纏っていた。

そして、そのまますれ違い様に大連ゴーマを切りつける。

切りつけられた大連ゴーマは声にならない悲鳴を上げながら倒れこむ。

それと同時に大連ゴーマの姿が人間の姿へと変わる。

「ふう、なんとかなったか」

そう言いながら、俺達は疲れながら、ゆっくりと倒れる。

「介人！大丈夫!!」

「この声は」

聞こえた声と共に見ると、そこにはSDへと変わっているガオーンがいた。

「まさか、お前も来ていたか」

「マジニューとブルーンももうすぐ来る予定だよ」

「そうなのか」

それを聞くと、少し嬉しくなった。

「それで、エマ」

「なんですか?」

その言葉と共にエマの後ろに立った理乃。

その笑みはとても恐ろしい。

「麻雀で金を使ったって、それって、私から借りた金だよね」

「・・・ああ、そろそろ授業ですね、行きますよお」

「待て、糞閻魔!!」

その言葉と共に理乃とエマの追いかけてつこが始まった。

犬猿の2人

その日、何時もの朝ご飯のはずだった。

お決まりとなつている朝ご飯のメニューである目玉焼きとソーセージにサラダ。

そして各々が好みで白飯かパンを選び、食べていた。

家には、基本は爺ちゃんは仕事でおらず、妹である理乃も既に食事を終えていた。

ジュラン達も既に見ない中で、俺はある意味、目の前の光景に悩まされている。

「・・・」

1人は、エマ。

こちらの世界になつてから担当になつた少女であり、金にがめつくして強欲な少女。

学校では屑と呼ばれながらも、ゼンカイジャーとして戦っている時にサポートしてくれる心強い味方？である。

ついでに、ご飯は白飯派である。

「・・・」

そして、もう1人はフラグちゃん。

俺がこの世界に来る前に担当である少女であり、死神とは思えない程に優しい少女で

ある。

最近になって、こちらの世界に来ており、とても心強い味方である。

ついでに、ご飯はパン派である。

以上の2人が、現在進行形で、まるで示し合わせたかのようにお互いを睨み合っているのだ。

ちなみに、他の皆は既に食事を行っている。

「それで、フラグちゃんは何時になつたら、天界に帰るんでしょうか？」

そこで火蓋を初めに取つたのは、エマであった。

何時ものように丁寧な口調で話すが、明らかにさつさと帰れというのが、聞いて分かる。

「別に今は帰る必要もありません。

第一、この世界にいる異常事態を解決しなければならぬので、しばらくは帰れませぬ。

それよりも、エマさんこそ、なぜまだいるのですか？

介人さんのサポートは私がやりますので、戻っても大丈夫ですよ」

そう、エマに対して同じく笑みを浮かべながら返す。

だが、その笑顔は決して笑ってはいないだろう。

むしろ、殺気を放っていると言っても良いかもしれない。

「あのなあ、何時までもそうやって喧嘩しているつもりなんだ？」

俺はそう言いながら、2人に言うが

「別に喧嘩なんてしていませんよ」

「そうですよ、ただ本当の事を言い合っているだけですから」

2人の答えは全く同じだった。

これは完全に意見が対立した時のパターンだ。

こうなった以上、絶対に譲らないだろう。

「それじゃ、俺はそろそろ学校に行くから。」

ほら、エマも早く行くぞ」

「ええ、そうですね。」

なんだって、この作品のヒロインは私ですからねえ！」

そう言いながら、何やら自信満々に笑みを浮かべるエマ。

それに対して、フラグちゃんは

「ええ、そうですね、早く一緒に行きましようか、介人さん」

「はい？」

フラグちゃんの一言に、エマは首を傾げる。

「実はこちらの世界でサポートをする際に文月学園に転入する事になりました。」

まあ、無理矢理転入したので、Fクラスになりましたが、一緒のクラスなので、よろしく願いますね」

フラグちゃんの言葉を聞いて、エマは驚きの声を上げる。

確かに、それは驚くだろう。

「ちよつと待つてください！ 何でそんな事になったんですか!?!」

「当たり前ですよ、介人さんのサポートをしなければならぬので」

「いや、それは困る」

その事態に、俺は非常に困る。

「どうしてですか、介人さん?」

「そりゃあ、あなたのサポートなんていらぬからに決まっているじゃないですかあ」

「いや、それはない」

「だったら、なぜ!」

「行ったら、分かる」

「??」

俺の言葉に疑問に覚えたように、首を傾げる。

だが、既に決まっている以上は、変えれない。

そう思いながら、俺達はそのまま文月学園に向かった。

そして、Fクラスに到着すると同時に

「FFF団、海城介人に天誅下せえええ!!」

「「海城に!!天誅!!」」

「転校生と一緒とは、羨ましいぞお!!」

その言葉と共にFFF団が襲い掛かる。

1人1人はそれ程強くなく、転生者との戦いに慣れてる俺にとっては、あまりたいした事のない相手である。

「こういう厄介な事が起きる訳だ」

そう言いながら、明らかに殺意のある攻撃に対して、カウンターで気絶させながら、フラグちゃんに言う。

「いや、これは明らかに異常すぎる光景ですよ!!」

「そうなのか?」

「そうですね! いくらなんでも、こんな事をする人達がいるなんて・・・」

「まあ、普通ならありえないが、まあ慣れたからな」

そう、こういう事はよくある事なのだ。

「どうですか、フラグちゃん!

「ここで生き残るには、小さなお子ちゃまには無理という事ですよお」
それをエマが挑発するように言う。

「ふんっ、これだからガキは嫌いなんですよ」

「何ですって！」

そう、一発触発になる。

だが、その時

「んっ」

奇妙な気配。

それが戦いの合図だと分かると同時に、すぐに立ち上がる。

「介人さん？」

「出た」

その言葉と共に、召喚獣フィールドが展開される。

それと共に、俺はギアトリンガーを取り出し、走り出すと同時に見えたのは一匹の怪物だった。

ワシの翼、サメの牙、ライオンとトラの爪、ゾウの足を合わせ持つ、狩人を思わせるワルドだった。

「あれは、まさかお父さんの」

「ああ、ジウオウジャーのワルドで間違いないようだな」

ワルドも、こちらの姿を確認すると共に同時にワルドは雄叫びをあげながら、突っ込んでくる。

それに合わせるように、俺もギアトリンガーを取り出し、そのままセンタイギアを装填する。

「チエンジ全開！」

それと共に引き金を引き、俺はゼンカイザーへと変身する。

「秘密のパワー！ゼンカイザー！」

そう名乗りを上げながら、俺はギアトリンガーを構える。

それと同時に、ギアトリンガーを構えてトリガーを引く。

だが、ギアトリンガーの攻撃に対し、ワルドはまるでワニを思わせる巨大な尻尾で弾く。

すると、その衝撃で、俺は吹き飛ばされてしまう。

だが、何とか受け身を取りながら、着地し、ギアトリンガーを再び構える。

「介人さん！」

そのワルドは、おそらくはジウオウジャーの力のほとんどが使えます!!」

ジウオウジャーと言えば、動物の力であるジューマンパワーを使った戦士達。

つまり、相手はおそらく地球上にいる全ての動物の力を使う事ができる。

「面白いじゃないか」

そう言いながら、ギアトリンガーに新たなセンタイギアを装填し、ダイヤルを回す。

そして、そのままレバーを引いた後に引き金を引く。

「地球の動物相手だったら、こっちは星獣のパワーだ！」

【22バーン！ギングアマン!!】

その音声と共に、俺の前にギングレットの幻影が現れると共に、一体化になる。

同時にギングアマンの武器である星獣剣を手に持ち、構える。

それに対して、ワルドは両腕の刃で斬りかかって来る。

それに対し、俺も星獣剣で応戦する。

だが、相手の斬撃の重さは凄まじい。

腕が痺れるような感覚を覚えるが、それでも負けるわけにはいかない。

そのまま鏢迫り合いになるが、その力は互角。

お互いに一步も譲らない状態が続く。

だが、それも長く続かない。

徐々に押し込まれ始める。

そして、腰にあったギアトリンガーが吹き飛ばされる。

このままではまずいなと思った時

「このままじゃ」

「まだ諦めるのは早いですよ」

その状況を見ていたエマが言うと共に、落ちたギアトリンガーを取る。

「何がギアを装填して、援護ができれば」

「無茶ですよ」

「無茶でも、早くしないと、介人さんが」

エマはそう言いながら、必死に悩むように、ギアトリンガーを見つめる。

そうしていると

「おーい、エマちゃん！フラグちゃん！」

聞こえてきた声。

見ると、そこにはガオーンがこちらに向かっていた。

しかし、その距離は遠く、間に合うかどうか

「ガオーンさん！」

「これだったら」

同時にフラグちゃんはそのまま窓から飛び降りる。

「ええ?!」

「私は元々死神なので、これぐらいは平気です。」

それよりも、エマさん、ガオーンさん、頼みましたよ!」

「何がどうなっているか、分からないけど、了解だよ!!」

フラグちゃんの行動を見て、驚きを隠せないエマ。

そして、ガオーンも困惑しているが、フラグちゃんの行動を見て、頷く。

「だったら、こつちも答ええないといけませんね!」

その言葉と共に何時の間にか持っていたゼンカイガッターギアをギアトリンガーに装填し、ゼンカイガオーンのギアを装填する。

「行きますよ、介人さん!」

その言葉と共に

「スーパージェンジン全開!!」

「スーパー!ババン!ババン!ババン!ババン!ババン!ババン!フリーダム!ゼンカーイ!」

その音声と共にこちらに向かってくるガオーンは鎧となりながら、ワルドを吹き飛ばし、そのまま俺に装着される。

ガオーンの特徴的な闘争心を剥き出しにした野獣を思わせる鎧となっており、特に特徴的なのが、右腕にはライオンの牙を思わせる武器、ガオーンフアングが現れる。

「さあ、野生の時間だぜえ！」

同時に俺はまるで野獣を思わせる構えと共に、ワルドへと突っ込んでいく。対するワルドも両腕の刃を振りかざしてくる。

しかし、普段よりも身体の軽いのか、簡単にその攻撃を避ける事ができ、そのままガオンファングを振るう。

その一撃はワルドの腕の刃を砕く。

さらにそのまま連続で攻撃を繰り返していく。

「でしたら、これも試してみましよう!!」

「えっ?」

そう戦っていると、エマが取り出したのは別のセンチタイギアだった。

センチタイギアはそのままセンチカイガッタタイギアに装填されているセンチカイガオンの代わりに装填され、そのまま引き金を弾く。

「スーパー!ババン!ババン!ババン!ババン!ババババン!アームド!ガオレンジャー!」

その音声と共に、ガオンファングとは違う反対側にはガオレッドが使っていた武器である手にはめて使う、籠手状の武器、ライオンファングだった。

「ガオレンジャー先輩の力も一緒か、これは!」

「ああ、やる気満々だぜえ!!」

その雄叫びと共に、俺達はワルドに対して攻撃を続けていく。

先程まで片手だけの牙が、両手に増えた事で、攻撃力は倍になり、スピードは数倍以上がる。

それにより、ワルドは防ぐだけで精一杯の様子だった。

そして、ワルドを踏み台にし、俺はそのまま後ろに下がると、ライオンフアングを変形させる。

それはライオンを思わせる巨大な銃であるガオメインバスター。

「行くぜ!!全力全開だあ!!」

同時にガオーンフアングは変形し、そのままガオメインバスターに装着される。

そして、俺の片腕に一体化し、そのまま構える。

「完成、ガオーンバンカー!」

同時に、俺は三枚のセンチギアをガオーンバンカーに装填する。

「ダイレンジャー!オーレンジャー!キョウリユウジャー!」

センチギアの力が宿ると共にガオーンバンカーの瞳は光輝き、同時に俺はワルドにそのままゼロ距離まで接近する。

同時にガオーンバンカーの牙がワルドを噛み付き、そのまま俺は左手で引き金を引

く。

「ガオーンパニツシャー！シユート!!」

その叫びと共に、ガオーンバンカーの銃口から放たれるエネルギー波がワルドに直撃し、吹き飛ばす。

だが、その威力も凄まじいものだったらしく、地面に叩きつけられ、地面が陥没する。そして、そのままゆっくりと立ち上がる。

だが、その姿は既にボロボロの状態であり、もう戦う力は残っていない様子だった。そして、そのまま後ろに下がると共に爆散した。

「やったあ!!」

それを見ていた、エマとフラグちゃんはそのままハイタッチするが、すぐに相手を見て、そのままプイッとそっぽを向いた。

まあ、エマの事は置いておいて、とにかく勝った事に安堵する。

「さてさて、どうなるのかなあ」

「まあ、長い目で見てみようよ。」

僕だって、なんとかなったのだから」

そうガオーンの一言には本当に説得力があった。

「そうだな」

その一言に同意すると、変身を解く。
とりあえず、一安心と叫んだところだろう。

特別編 全力！焼き肉ロード！

海城家の朝は早い。

海城家の長女である海城理乃は自分の小遣いを稼ぐ為に早朝からバイトに出掛けていた。

普段ならば学生と言う事で、朝のバイトはないが、この日から学生達は夏休みに突入していた。

その事もあって、朝から様々な事を楽しむ為に行動している者達は多く、この家に住む多くの住人もその部類に入る。

しかし、その賑やかな朝食は、静寂で支配されていた。

「・・・」

家主である海城介人と共に朝ご飯を作る事の多いガオーンは特に変わらない様子でお茶を飲む。

しかし、そんな2人を睨み付けるように、ジュラン、マジヌ、ブルーン、フラグちゃん、エマの5人は朝ご飯を用意した介人達を見ていた。

「いや、ぶつちやけ、朝ご飯を用意してくれる介人達に毎日感謝しているよ。」

本当に、けどな、介人、ガオーン」

そう言いながら、ジュランは目の前にある朝食のメニューを見る。

そこにはお粥・ごま塩・漬物。

その内容はまさに修行僧の食事だった。

「俺達は修行僧じゃないんだぞ!!」

その言葉をきっかけに、各々のメンバーが不満が爆発したように湧き上がるように叫び始める。

「これだけじゃ、私達すぐにお腹がすいてしまいますよ!!」

「そうですよ!」

特に、普段からその体型に見合わないフードファイターを思わせる量を食べているマジーンとフラグちゃんの文句は多かった。

「文句を全力で言うのは分かる。

しかし、これを見れば、納得するはずだ」

「なんだよ、赤字の家計簿か?」「それとも大量のガシヤの商品ですか?」

全員の文句を受け止めるように介人は止める。

しかし、それでも止まらない全員はさらに文句を言うように介人達に目を向ける。

そうしている間にも、ガオーンは冷蔵庫の中を開く。

全員がそのままガオーンが開いた冷蔵庫の中身を見ると共に、先程まで文句を言っていた全員が一気に黙ってしまう。

「……これはっ」

そこにあつたのは大量の食品だった。

しかも、ただの食品ではない。

焼き肉の食材としては最高級に近い数々の肉であり、松阪牛から始まり、神戸ビーフ、米沢牛など高級ブランド牛肉ばかりだ。

さらに言えば、ステーキ用の霜降り和牛の塊もあり、その数々の商品にジュラン達は一気に黙った。

「今日から夏休みが始まるからな。」

全力で焼き肉パーティーをしようと思って、前々からガオーンと一緒に計画して、昨日買ってきたんだ」

「ただ、少し予算オーバーしてしまつたし、冷蔵庫に少し空きがなかったから、今日の朝ご飯は少し貧相になつちやつたんだ、ごめんね皆」

そう介人とガオーンは全員に謝った。

しかし

「なんだよ、そういう事だったら、早く言ってくれば良かったのに」

「まったくですよ」

全員は先程までの怒り狂いそうな態度から一変、笑顔を浮かべていた。

「理乃も帰ってきた夕食には、全力で焼き肉パーティーをしようぜ!!」

「おお、全力で焼き肉パーティーだなあ、イエーイ!!」

こうして、海城家の食卓には笑い声が響いた。

しかし

「ギャアー!!」

「何事!？」

海城家に響いた絶叫。

それは突然、彼らの机の上に開いた穴から出てきた何かだった。

机の上に現れたのはオウム型のロボットであり、キカイノイド達とは何か違った雰囲気

気をしていた。

「なんだ、こいつ?」

疑問に思っている一同はそのロボット達を見ていたら

「ここはどこ!?!私は誰!?!オイラはナビィ!!」

突然机に叩きつけられた事で、混乱しているオウム型ロボットは自身の名前だと思われるナビィを告げながら、混乱するように机の上を歩く。

「なんだなんだ、お前さん、一体なんだよ」

いきなりの登場に驚いているジユラン達に、ナビイはそのまま机の上に座る。

「んっ、(ハハ)どん?」

オイラは確かマーベラス達と、あれえ?」

未だに混乱している様子を見せるナビイ。

その様子を見た介人達も少し顔を見合わせていると、ドアを打ち破らんばかりに叩く音。

「なんだなんだ、こんな朝から」

そう言い、ドアの音に気になったエマはそのままドアに近づく。

しかし、それと共に介人は何かを感じたのか、すぐに手にギアトリンガーを取り出す。

「エマ、下がれ!!」

「えっ何を、ぎゃあああ!!!」

介人の言葉を合図に、ドアが爆発する。

「チェンジ全開!!」

吹き飛ばされたエマを受け止めると共にゼンカイザーへと変身した介人は、ドアから現れた存在にギアトリンガーを構える。

目の前にいるのは警察官を思わせる装備を身に纏っており、両肩と上腕部にプロテク

ターを装備している。

そして、身体の一部は赤く染められており、手には赤い車がトリガーのようになっている銃を持ち構えていた。

「あんたは、パトレン1号」

それは、介人にとっては先輩にあたるパトレン1号。

彼が襲撃してきた犯人だと分かり、困惑しているが、パトレン1号はそのまま銃口を介人達に向けていた。

「悪いが、お前達を逮捕させて貰うぜ、勿論、抵抗しても構わない」

そう告げるパトレン1号。

「理由も分からずにはい、そうですか。」

「と言える訳ないだろ」

「ならば、国際警察の権限において、実力を行使する!!」

その言葉をきっかけにパトレン1号は引き金を引く。

パトレン1号の武器であるVSチェンジャーから放たれる赤い光線は介人に当たりそうになるが、介人はそのままパトレン1号を蹴り飛ばし、外へと吹き飛ばす。

「ここは家の中だろうか!」

いきなり攻撃する奴がいるかよ!」

その言葉と共に介人もまた外に飛び出すと共に、ギアトリンガーの引き金を引く。

一撃の威力はパトレン1号の持つVSチェンジャーの方が高いが、介人の持つギアトリンガーはマシンガンを思わせる銃弾の嵐でそれに対抗していた。

家から飛び出し、公道に着地した二人は互いに睨み合う。

ゆつくりと構えながら、睨み合いながら、先に動いたのはパトレン1号だった。素早い動きで距離を詰めてきたパトレン1号に、介人も負けじと走り出す。

そして、互いの拳をぶつけ合った。

力比べでは互角のように見えていたが、徐々にパトレン1号が押され始めた。

「少しは話し合おうじゃないかよ、先輩!!」

そう言いながら、介人は攻めようとしたが、背後から別の殺気を感じた。

すぐに介人はその場を離れると、先程までいた介人のいた場所にはサソリの尻尾があった。

それも通常のサソリではあり得ない大きさだった。

その尻尾の持ち主を見ると、そこにはオレンジ色が特徴的な戦士であるサソリオレンジがいた。

「今度はキューレンジャーのサソリオレンジかよ。

一体、俺に何の用なんだよ!」

その瞬間、介人の姿は青い鎧が特徴的な姿へと変わった。

それこそ、介人とブルーンと合体した姿、アクセルゼンカイザーへと変わっていた。「姿が変わっただと、だが、それがどうした」

その言葉と共に、パトレン1号は再び攻撃を仕掛けてきた。

それに対して、介人は右手に装備したゼンカイブルーンをモデルに作られた盾型アイテム、ブルーン・シールドで防ぐ。

攻撃をガードされたパトレン1号は、すぐに距離を取ると共に、左手に装備しているVSチェンジャーの引き金を引く。

しかし、その攻撃に対して、介人はブルーン・シールドを地面に叩きつけることで、衝撃波を生み出して攻撃を防ぐ。

「はあ!!」

同時にサソリオレンジに対して、ギアトリンガーで攻撃する。

流石にそこまでの攻撃は予想していなかったのか、サソリオレンジは避ける事が出来ずに攻撃を受けてしまう。

吹き飛ばされたサソリオレンジは地面を転がる。

それでも、どうにか立ち上がろうとするが、そこにパトレン1号が攻撃を仕掛けていく。

『どうしますか、介人』

「ああ、このまま戦うのは」

何かの誤解があつて、攻撃を仕掛けていると思う2人。

だからこそ、どのようにすれば良いのか分からず、介人とブルーンは悩んでいたが。「逃げるしかないな」

その言葉と共に、ブルーン・シールドセンタイギアを3枚挿入する。

【タイムレンジャー!デカレンジャー!パトレンジャー!】

音声が届り響くと共にブルーン・シールドをそのまま投げると、変形分割しファンネルの様に浮遊しながらパトレン1号とサソリオレンジに襲い掛かる。それによって二人は回避行動を行う。

それと共に介人は、ブルーン・シールドに別のギアをセットする。

【20バーン!カーレンジャー!】

その音声と共に、介人達はジープタイプの青い車、ドラゴンクルーザーを思わせる姿に変形する。

パトレン1号とサソリオレンジから逃げるように走ると、その後方から攻撃が飛んでくる。

それを全て避けながら、走り続ける。

そんな中、介人は気になっていた。

何故、二人が介人を襲ったのか、その理由が気になったのだ。

「とりあえず、他の皆と合流しないとな」

逃走劇の真実

突然、指名手配をされた介人達。

それと共に、襲い来るスーパー戦隊達の攻撃を掻い潜りながら、その場を逃げていた。「そもそも、俺達が何の罪で追ってくるんだよ」

そう愚痴を漏らしながらも、周りを見る。

「しかし、実際、私達、何か悪い事をしたんでしょうか？」
「そんなのする訳ないでしょ」

気になりながら、ブルーンは首を傾げながらも、マジメはすぐに返答する。

周りには人影がない事を確認する。

「まずは状況を整理しようよ。」

僕達はそのそも、なんで追いかけているんだろう」

ガオーンの言葉に首を傾げる。

「というよりも、オイラの事、忘れられてない」

「そっかいえば」

逃走している間に、すっかり忘れ去られていた存在に気づき、すぐに見つめる。

「確か、ゴークアイジヤーの仲間で」

「オイラはナビイだよ。」

それにしても、ここはどこなんだ？」

「ここはゴークアイジヤーとは違う世界だと思うけど、あれ？」

その言葉と共に、俺はふと疑問に思う。

あの時、襲い掛かってきたパトレン1号とサソリオレンジ。

彼らも、元々は別の世界のスーパー戦隊のはずなのに、なぜ、この世界にいるのか。

疑問に思う、介人を余所に

「介人さん、これ!!」

その疑問を遮るように、エマが取り出したのはスマホの動画だった。

「全力罪海城介人。詐欺罪閻魔エマ。脅迫罪罪死亡フラグ。」

他にも4名のキカイノイド達による犯罪集団の存在が判明しました」

そこに写されているのは、確かに俺達だった。

しかし

「全力罪ってなんだよ!!」

「脅迫罪ってなんですか!!」

あまりにも理不尽な罪に介人とフラグちゃんは同時に叫んでしまう。

「まったくです！」

私が何時、詐欺をしたと言うんですか！」

「いや、わりとやってないか」

介人達に釣られるように、エマも不満そうに呟くが、ジユランはエマに対して苦笑を浮かべてしまう。

一方で、他の者達はそのニュースを食い入るように見ていた。

「なんだか、この世界の罪って変だねえ、全力罪なんて」

「こんなの介人を捕まえるような罪じゃないかよ！」

巫山戯ているのか!!」

ジユランは憤慨しながら、怒りの声を上げる。

「ああ、なんか、納得いかないな」

「うん。まあ、僕達が何をしたというんだらうね」

ガオーンとマジューも同意するように呟きながら、潜伏している店の窓から周りを見渡す。

「でも、どうします？ このままじゃ捕まりますよね」

「そうだな。とりあえず逃げるしかないだろう」

「……」

マジメの言葉にジュランは答えたが、その先には「エマ、何をしているの」

そこには、パチンコを打っているエマの姿があつた。

「いや、今日は新台入替ですの。

あつ介人さん、箱を持ってきてくださいね」

「……」

かなり切迫した状況の中でも、普段と変わらない態度を行うエマ。

それに対して、介人は無言で、エマの腰に手を回す。

「介人さん、いきなりなんですか。」

そういうのはここで「お前は何をしているんじや、ボケ!!」ぎやふう!!」

その一連の動作はとも華麗で素早かつた。

エマの体の前で相手の両腕を交差させ、エマの左手首を自分の右手、エマの右手首を自分の左手でそれぞれ掴む。

そのクラッチを保ったまま、エマの股下に自分の頭を差し込み、肩車のように持ち上げる。

そのまま後方にブリッジしながら倒れ込み、エマの後頭部・背中からアスファルトの床に叩きつける。

「あれは、ジャパニーズオーシャンサイクロンスープレックスホールドですね!!

私、本でしか見たことないので、とても興味深いです!!!」

「誰もエマさんの心配をしていない!!」

アスファルトの床に叩きつけられているエマに対してよりも、介人が放ったプロレス技の方に興味があるようにブルーンは叫ぶ。

「うっわー。すごい綺麗に決まったねえ。」

「流石は介人だよお」

「いや、感心してる場合じゃないでしょうが!!」

介人の見事な投げ技に感動するガオーンにマジーンは突っ込む。

「おい、なんだ物音が、ってお前達は指名手配犯の!」

「しまった、エマのパチンコをしていた音でバレたか!」

「いや、介人さんのプロレス技の音で気づいたんだと思いますよ」

エマは介人の言葉を否定するように、首を振りながら起き上がる。

「そんなことはどうでもいいです! それよりも逃げないといけません!」

「いや、それはそうなんだけどさ。」

今の状態で逃げたら余計怪しまれるんじゃないか?」

ジュランの言葉の通り、現在逃亡中の彼らは完全に悪者状態だ。

その中で

「観念するんだな、海城介人」

その言葉と共に、店の中に入ってきたのは二つの人影だった。

それは将校帽に軍服を身に纏った怪人、シュバルツ將軍。

もう一人は、肩に鉤爪を備え、至る所に三日月の意匠が施された鎧を身に付け、片目の三日月型の兜の様な形状を持つ戦士、ガルザ。

「ああ、あいつらは、トツキユウジャーと戦ったシュバルツ將軍に、キラメイジャーと戦ったガルザ!!」

「はあ、なんで悪者が俺達を」

「お前達を捕まえる為だよ。」

スーパージョーと協力してな」

そう、ガルザは笑みを浮かべながら呟く。

同時にガルザの言葉を合図に、店内にはキョウリユウグリーン、スターニンジャが現れ、介人達を囲んでいた。

「一体全体、どういう状況なんだ」

「……」

その状況の中でも、介人はゆっくりとギアトリンガーを構える。

ガルザとシユバルツ將軍。

その純粋な剣技でも、スーパー戦隊を苦戦させてきた幹部と共に剣の達人であるキョウリユウグリーンと稲妻のような速さで戦うスターニンジャ。

4人の敵に対して、介人は、手に持つマジーン・ロッドで攻撃を受け流すのが必死だった。

「おいおい、この状況どうするんだよ」

「だからと言って、今の私達では」

ジュラン達はすぐにでも助けたかったが、彼らに今はギアトリンガーがなく救援する事ができなかった。

「そうだ、絶望しろ。」

そして、覚えておけ、俺の名は「森の管理人、ビート・J・スタッグだ」んっ?」

その中でガルザが挑発するように言葉を出そうとすると、遮る声が聞こえる。

ガルザと似たような声で、困惑する中で、一同がその方向を見る。

そこにはキカイノイドによく似た存在だが、その容姿からキカイノイドとは違う事がよく分かる。

「ああ、あれは、特命戦隊ゴーパースターズの1人、ビート・J・スタッグだあ!!」

ナビイの言った言葉と共に、一同は驚きを隠せずにいた。

この状況の中で、さらに増える敵。

だが

「なんだ、緑？」

貴様、以前とは何か違うぞ？」

「以前と違う？」

「・・・それって、どういう意味なんだ」

そう疑問に思う中で、響き渡るハーモニカの音。

音が響き、見つめると、森の奥から現れたのは、黒いタンクトップを身に纏った青年であり、ゆつくりとこちらに近づく。

「何か懐かしい気配がすると思っていたが、蘇っていたとはな、シユバルツ」

「貴様は、ザラム!!」

シユバルツと、ザラムと呼ばれた青年。

だが

「違うな、俺は虹野明だ。」

それにしても、こうして見ると可笑しな感じだ。

お前達、本当に俺の知っている奴らか？」

「知っている奴らって、どういう事でしょうか？」

「もしかして」

その言葉と共に、ある可能性に辿り着いた介人はそのままJと虹野の元へと駆けつける。

「すいません、二人共。」

この状況を打開したいので、協力してくれませんか」

「おいおい、何を言っているんだ、介人」

介人の言葉にジュランは思わず困惑する。

それは、まさに叶えられない願いを言うような事。

そう思われたが

「良いだろ、森を荒らす奴らは俺が許さない」

「ああ、俺も少し気になるからな」

「ええ、嘘お」

その願いはあっさり承諾された。

「レッツモーフィン！」「特急チェンジ」

同時にJはスタッグバスターに、虹野はトツキュウ6号へと変身する。

それと共に3人は構える。

「秘密の魔法パワー！レジェンドゼンカイオー！」

「スタツグバスター！」

「トツキユウ6号」

構え、同時に名乗る。

「色々とバラバラだけど、4人揃って、「機界戦隊トツキユウジャー」「特命戦隊ゴーパー
スター」「列車戦隊トツキユウジャー」」

「最後が凄いいバラバラですよ!!」

一体化しているマジーンを含めた4人での名乗り。

それははつきり言って、グダグダだった。

「とにかく、行くぜ、全力全開だあ!!」

そんな状況にも関わらず、介人はマジーン・ロッドを構え、それと共に走り出す。

ガルザに対してはスタツグバスターが、シユバルツに対してはトツキユウ6号が戦
う。

剣技での戦いに対して、素早い動きと共に手に持ったモーフィンブラスターでのビ
ムでガルザに撃つ。

「ええい、鬱陶しい！」

「それはこちらの台詞だ。」

「よくも俺の声をパクったな」

「そつちが勝手に似ているだけだろ!!」

そう言いながら、スタックバスターの攻撃を剣で受け止めたガルザだったが、その威力に押され、後ろに下がる。

一方のシュバルツ將軍には、トツキユウ6号に対して剣を振り下ろしていた。

「まさか、こうしてまた戦えるとはな、ザラム!」

「シュバルツ、お前達のバックに誰がいる!」

「倒せたら、答えてやろう」

トツキユウ6号の言葉に対して、シュバルツは笑う。

その剣を弾き飛ばし、シュバルツは蹴りを放つ。

トツキユウ6号は吹き飛ばされるが、すぐに体制を整え、そのまま走る。

彼らが激闘を繰り広げる中で、介人は

【マジレンジャー!】

音声が届り響く中で、介人の右手にはマジランプバスターを手に持つ。

同時にマジニュー・ロッドを変形させ、巨大な狙撃銃、マジニューシューターへと変形させる。

「スピード相手には、こいつだな」

その言葉と共にマジニューシューターに装填したセンチタイギア。

【ニンニンジャー！トツキユウジャー！】

その音声が鳴り響かせながら、そのまま引き金を弾く。マジーンシューターから出てきた光の球はそのまま戦っている相手であるキョウリユウグリーンとスターニンジャーの元へと向かう。

同時にマジーンシューターを持ち、空を飛びながら、新たなセンタイギアを3枚装填する。

【ダイレンジャー！オーレンジャー！キョウリユウジャー！】

その三枚のセンタイギアには、古から続く摩訶不思議な力を扱う戦隊として、気力、超力、そしてブレイブ。

3つのエネルギーが合わさり、一つの弾丸へと変わる。

それに気づき、2人はすぐに走り出すが、その足下にはバナナの皮があり、そのまま滑ってしまう。

「超気力！ブレイブフィニッシュ!!!」

それと共に引き金を弾くと同時に、マジーンシューターからマジーンドラゴンを模したエネルギー弾が、バナナの皮に滑った2人に向かって放たれる。

その一撃を受けた2人はそのまま吹き飛ばされ、そして、光の粒子となって消えた。

「なっ、どういう事なんだよ、これ」

「どうも変だと思ったが、これが違和感の正体か」
「ちっ」

それを見たシュバルツは舌打ちをすると共に

「ガルザ、戻るぞ」

「良いだろう」

その言葉と共にガルザもまた、目の前にいる虹野を吹き飛ばす。

「待て、シュバルツ！」

虹野はすぐに呼び止めようとしたが、クライナーが彼らの前に走り抜ける。

高速で走るクライナーに道を阻まれ、通り過ぎた先には、既に2人の姿はなかった。

「物真似鎧は消えたか」

「いえ、ただ単に声が似ていただけだと。」

それよりも、介人さん、さっきのは一体」

それは、先程、マジックシューターによって消えたキョウリユウグリーンとスターニンジャーだった。

「ああ、何度も使ったから、最初は僅かな違和感だけだった。

けど、今回で分かった。

あれは、間違いなく」

そう言いながら、消えた2人の場所を見つめる。

「ゼンリヨクゼンカイキャノンで召喚したスーパー戦隊だ」

「ゼンリヨクゼンカイキャノンって！」

それは、かつて介人が使っていた最強の武器。

必殺武器としての高い威力は勿論の事、45のスーパー戦隊を自由自在に召喚する事ができるまさに最強の武器だった。

しかし、ハカイザーとの戦いによつて損傷し、現在は修理中である。

「そのはずだったけどな。」

ますます今回の犯人をぶつ倒したくなってきたぜ」

それと共に介人からは怒りの炎が湧き上がっていた。

「介人さん。」

それはそうですよね、お爺さんの力が、こんな事に使われたら」

フラグちゃんはその涙を流すが

「それもあるが、焼き肉の邪魔をした以上、徹底的にやってやる」

「まだ、焼き肉ですか!!」

それは流石にどうかと思うのだが、確かに介人も許せなかった。

何せ、焼肉の約束をドタキャンされた挙句、大事な祖父の力を悪用したのだから。

焼き肉を阻止された訳

そこには、街中の人々はビルドレッツシャーに気づく様子はなかった。

「これだったら、楽に目的地まで行けそうだな」

そう言っていた彼らだが

「んっ、あれは」

そう、ビルドレッツシャーの横にある窓の外を見つめるフラグちゃん。

「どうしたんだ」

「あれは一体」

その言葉と共に全員が窓の外を見つめる。

そこには数々のスーパードライブ戦隊達が乗る列車型のロボやその敵が乗る乗り物がビルドレッツシャーに向かっていった。

「あれって、パイセン達が乗り込む奴だな」

「そうだな」

「それで、ゼンリョクゼンカイキャノンで召喚された先輩達は操られているよな」

「ええ、間違いありませんね」

「つまり、奴らの狙いって」

「私達ですわね」

そう、確認するように頷く。

「……」

「しつかりと掴まれ!!」

虹野はその言葉と共にビルドレッツシャーのエンジンを全開にさせる。

それを合図に背後から迫る彼らが一斉に攻撃を始めた。「来るぞ!!」

「分かっています!!皆さん、しつかり掴まって下さい!!」

その言葉と同時に彼らは必死になって座席にしがみつく。

同時にビルドレッツシャーにいくつもの砲弾やミサイルなどが着弾し爆発するが、それでもなんとか振り切り逃げ切る事が出来た。

「ぐわあ、目が回るウ!?!」

「きつ気持ち悪いっ」

「吐きそうっ」

その攻撃により揺れ動く車内の中、介人とジュランとガオーンは目を回しながら気分を悪くしている。

「(っ)のままじゃっ」

そんな中、襲い掛かる存在に攻撃する影が見える。

「あれは一体」

「もしかして」

それと共に介人は外を見つめる。

「おーい、介人!!」

「無事か!」

「皆!!」

そこは、まだ合流していないゼンカイジヤーのメンバーであるボイジヤル、バイオン、パトローラ、フアリーナの4人だった。

「だったら、ここは、全力合体だ」

「「合体?」」

そう疑問に思っている間に介人は懐にあるセンタイギアを取り出し、そのままセットする。

「35バーン! ゴーカイジヤー!」

その音声と共に引き金を引くと共に、ゴーカイジヤーのメンバーの幻影がそのまま4人に吸い込まれる。

それと共に4人はそのまま電車のような形へと変形し、ビルドレッツシャーに合体す

る。

「完成！ゼンリヨクレツシャー！」

「これって、一体どうなっているの!？」

「よしっ、これで広くなった」

そうしながら、介人達はそのままゼンリヨクレツシャーに合体して、広くなった事に安堵する。

「それじゃ、一気に全力で反撃だあ!!」

その言葉と移動する先々に線路が出現し、ゼンリヨクレツシャーは空を走る。

空を飛んだままJは周りを見つめる。

「あそこだっ!!」

そう、指を指したのは、何も無いはずの空間だった。

「あんな所に「全力全開だあ!!」ちよっ」

そんな言葉を無視し、介人はゼンリヨクレツシャーをその何も無い空間に突っ込ませた。

そして、それは一瞬の出来事だった。

突然、そこに扉が開くかのように次元の壁が開き、その先には歯車のような空間だった。

「ごっごいつらっ!？」

こんな方法で突っ込むのかっ!？」

他の世界でもっ、とんでもない奴らだなっ」

その中央には、白色が際立つボディに右目にモノクルを着けていて、下半身の部分は可動式で動き、その姿はまるで車椅子に乗った科学者を連想させる存在がいた。

そして、その横には壊れかけているゼンリヨクゼンカイキャノンだった。

「てめえか、この騒動を起こした犯人は!!」

「だとしたら、どうなんだ、ゼンカイザー!!」

その言葉から、介人の事を知っている様子だった。

「誰だあいつ?」

「さあ、知らない」

そう介人の後ろでジュラン達は首を傾げていた。

「我が輩の名はトジテンドの技術開発を担当する最高技官、イジルデー!

平行世界にいた貴様達ゼンカイジャーによって、死んでしまった存在だ」

「俺達以外のゼンカイジャーだって」

その言葉に介人は驚きを隠せなかった。

「それで、その恨みを晴らす為なのか」

「ああ、そうだ。

貴様達は吾輩達の邪魔をした癖に、人間やキカイノイド達に人気があつて、気に入らなかつた！

だからこそ、貴様達の人気を下げる為に行つた」

「つまり、あのニュースとか、全部お前のでっちあげか!!」

「だったら、どうした!」

そうイジルデは怒りの声を上げる。

それに対して

「巫山戯るな!

お前のせいで、お前のせいで!」

それと共に介人は手を強く握り締める。

「介人さん」

「今夜の焼き肉中止になるかも知れないんだぞ!!」

その介人の一言に、その場の全員がこけてしまった。

「介人さん、ここでまた焼き肉なんですか」

「貴様、巫山戯ているのか!!」

あの世界のゼンカイザーみたいにつ、ピザすき焼きのように」

そんな言葉に対して、ジユラン達も呆れてしまう。

そんな中、虹野とJだけは真剣に考え込んでいた。

「なんで、そこまで」

「今夜はな、爺さんや皆も帰っている。

今日はやつと家族や仲間の全員で一緒に食べる焼き肉だったんだ!!」

「介人さん、もしかして」

「今日の焼き肉に拘っているのって、そういう事」

それは、これまで長い戦いの中でバラバラで過ごす事が多かった家族が揃い、ジユラン達を初めとしたメンバー。

そんな彼らと一緒に食べられる焼き肉。

それを介人は心の底から楽しみにしていた。

「結局はくだらない事じゃないか!!」

だが、イジルデは頭をかきむしりながら言う。

「ああ、そうかもな。

けど」

「お前のくだらない復讐よりも、介人の言う通り、焼き肉の方が大事に決まっているだろ

!!」

そう、イジルデ以外のメンバーがそのまま介人に賛同する。

「うるさいうるさい!!」

こうなったら、ここで始末する!!」

そうイジルデは叫び、その手に持ったゼンリヨクゼンカイキャノンを介人達に向ける。

だが

「返しなさいよ!!」

「ふんぎゃあ!!」

そんなイジルデを蹴り飛ばす影。

それは朝にバイトに行っていた理乃と

「お久しぶりです!」

「エンデー!」

今日、遊びに来る予定だったエンデーだった。

「はい、お兄ちゃん、これ」

「サンキュー!」

その言葉と共に、理乃から受け取ったゼンリヨクゼンカイキャノンを手を持つ。

「きつ貴様あ!!」

こうなったら、出る!!」

その言葉を合図に、イジルデの周りには悪のオールスター軍団だった。

「このスーパ―悪者トピアの力が込められたトジルギアで貴様らを倒し見せる」
「だったら、こつちもスーパ―戦隊で対抗してやるぜ!」

その言葉と共に、介人達は構える。

「行くぜ、全力全開だあ!!」

ゼンリヨクゼンカイキャノンのパワー

イジルデとの最終決戦が始まる中で

「というよりも、さすがにこの人数だけで、勝てるの」

ポイジャルは思わず呟いてしまう。

それは、俺達を含めても戦闘ができるメンバーは10人未満。

それに対して、目の前にいるイジルデが召喚したと思われる軍勢は明らかに1000は越えるだろう大軍団だった。

「大丈夫、こつちには、これがあるからな」

「それって、確か、さつき敵から奪った武器？」

「結局、それはなんなの」

そう言いながら、気になったパトーラとフリーナは次々と質問していく。

「こちらはゼンリヨクゼンカイキャノン。

ゼンカイジャーにとっては最強の武器です。

威力はギアトリンガーを遙かに超えるだけではなく、その機能もギアトリンガーを越えています」

そう言いながらバイオンが、ゼンリヨクゼンカイキャノンの事についてを説明する。

しかし、その事を聞いても、未だに信じられない様子だった。

「ギアトリンガーを越えているって、何を」

「まあ見てな」

その言葉と共に、ゼンリヨクゼンカイキャノンにあるダイヤルを回す。

【越えろ！転生者パワー！】

「んっ、聞いた事ないけど、試してみるか」

その言葉と共にゼンリヨクゼンカイキャノンの引き金を引く。

それと共に介人達の前には、5つの人影が現れる。

「これは一体」

「ゼンリヨクゼンカイキャノンは、選んだ力によって、様々な戦隊を召喚する事ができる

んです」

「これは、確かにギアトリンガーの上位互換だ」

そうしている間に、その光はゆっくりと収まっていく。

「ルパトレッド^号」

「ルパンブルー」

「ルパンイエロー」

「パトレン2号」

「パトレン3号」

それと共にゼンリョクゼンカイキャノンによって召喚されたのは二組のスーパー戦隊。

かつて、最初に転生者と戦い、その特典を奪うルパンレンジャー。

そして、転生者を倒したパトレンジャー。

その二組が現れたが

「・・・あれ？」

そうして、召喚されたルパンレンジャーとパトレンジャー。

それを見ていたフェアリーナはゆっくりと首を傾げる。

それは、他のメンバーも同じだった。

ただ2人、その変化に気づいていない張本人達だけだった。

「これって」「もしかして」

そうしながら、ゆっくりと自分達の身体を確認する2人。

「合体しちゃったあ!!!」

そう叫びながら、それに困惑する2人。

「おい、どういう事だ、怪盗！お前の仕業か」

「知らん！というよりも、俺が聞きたいぐらいだ!!」

「おいおい、久し振りの出番じゃのに、なんじゃこれは」

「俺に聞くな」

「わははははっ、なにこの2人、面白い!!」

「あつアストルフオじゃなかった3号さん、笑いすぎですよ」

そうしている間にも

「ふんっ!!」

そうしているルパパトのメンバーに向けて、攻撃を仕掛けてきたのは、ドン・アルマゲだった。

両手にはアルマ剣を持ち、襲い掛かる。

「ふんっ、貴様程度ならば、どうやらすぐに終わりそうだな」

「介人！」

「さっさと行くぞ。」

まだまだ、あの野郎の所まで大量にいるんだから」

そう言いながら、介人はルパパトメンバー達をそのまま放って、走り出す。

「けど、大丈夫なのかよ」

「問題ありません」

心配する他のメンバーを余所に、ルパパトの戦闘は続いていた。

ルパンブルーとルパンイエローの二人組は、その身軽な動きで華麗にドン・アルマゲの攻撃を避けながら、その手に持つVSチェンジャーで牽制を行う。

その隙を狙い、パトレン2号とパトレン3号は同じくVSチェンジャーで援護を行う。

長い間、犬猿の仲である二つの戦隊だが、同じ敵を相手にする時、そのコンビネーションは抜群だった。

ただし

「おい、そつちに動くな」「それはこつちの台詞だ!!」

二つの身体が一つになっているルパンレッドとパトレン1号を除いて。

「もう、どうしてこうなるんだよ!!こいつと一緒になんて」

「それはこつちの台詞だ!だいたいなんだその態度は!俺はお前と違って真面目に戦っているんだ!!」

「だから、こつちだつて真面目だよ。

だいたいなんでお前なんかと」

そんな二人の言い合いを聞きながらも、ドン・アルマゲはその攻撃の手を止めない。

「まったく、うるさい奴等だ。」

少し黙らせてやる」

そう言いながら、手に持っていた剣を振り上げる。

その瞬間、背後に現れたルパンイエローがその腕を掴む。

「おっとっと、そうはさせん」

「むうっ!？」

その予想外の行動に一瞬だけ反応が遅れる。

その間にルパンイエローは素早くパトレン3号の後ろに回り込む。

「それじゃ、行くよー触れれば転倒ー」

その叫び声と共にパトレン3号が取り出したのは黄金の馬上槍。

そして、叫んだ技の通り、その槍に触れたドン・アルマゲを転倒させてしまう。

「いえーいーどうだい、僕の力は！」

ほら、ルパンイエローもピースピース！」

「うげえな、こつちくんな」

「ええ、そんな事、言わずにい」

そうしながらも、抱きつく事を止めなかった。

「ちっ、まったく。」

おい、パトレン2号、さっさと決めるぞ」

「はっはい!!」

その様子を見たルパンブルーはため息を吐きながら、パトレン2号に言う。

それと共にルパンブルーの手には巨大な武器、神器が現れる。

パトレン2号もまた、それに合わせるように、ルパンブルーの武器である神器を再現する。

ルパンブルーの神器は白いのに対して、パトレン2号の神器は黒。

それはあまり意味を持たないが、同時にその神器は巨大な闇の刃が宿る。

「合わせろ!!」

「はいっ!」

ルパンブルーの言葉と共に、二人はドン・アルマゲに向けて、巨大な刃が襲い掛かる。その一撃によって、ドン・アルマゲは吹き飛ばされる。

その余波を受けてか、他の敵が巻き込まれ、倒されていく。

「とんでもないメンバーだ」

「ああ、あの二つの戦隊。

本来ならば犬猿の仲だからな」

そう言っていると共に、ドン・アルマゲは

「ふんっ、なるほど」。

少しは油断した。

「だがなあ!!」

その言葉と共にドン・アルマゲから溢れ出す巨大なエネルギー。その衝撃だけで、周囲の壁が破壊されていく。

「この私の本気が出せば、お前達を倒す事など、簡単だ。

まあ、そこで、仲良く死ぬが良い」

「ああ」「今なんと言った」

ドン・アルマゲの挑発をした。

しかし、それはある意味地雷だった。

同時に動き出したのは、合体したルパンレッドとパトレン1号だった。

「えっ、レッド!」「あの馬鹿!」

その行動に驚きを隠せない中で、ドン・アルマゲの前に立つ。

その姿を見たドン・アルマゲは笑う。

自分の勝利を確信しているのか、その表情からは余裕が見える。

それと共に、自身の武器であるアルマ剣で、攻撃を仕掛けるが

「スナッチ!」

「なっ」

それよりも早く、パトレン1号の手を伸ばす。

同時にドン・アルマゲの手から離れたアルマ剣はパトレン1号の手の中にあつた。

その隙を狙い、ルパンレッドはVSチエンジャーでドン・アルマゲに牽制する。

「ぐっ」

それを受けたドン・アルマゲは動きを止める。

その隙を狙を逃さないようにパトレン1号は手に持ったアルマ剣で切り裂く。

「おおお!!」

その攻撃は見事に決まり、ドン・アルマゲは吹き飛ばす。

同時にアルマ剣を捨て、VSチエンジャーを持ち、二丁拳銃のように二つのVSチエ

ンジャーを構え、引き金をひく。

その連続射撃を受け、ドン・アルマゲは後退する。

「うわあ、あのドン・アルマゲだっけ。」

よりにもよって、あの二人を仲良しなんて言うから」

「ああ、完全にキレたな」

それは二人に共通している事だった。

互いに犬猿の仲である事を認めているからこそ、仲が良いと評価された場合、徹底的に叩き潰す。

二人がいた時でも圧倒する程のコンビネーションだったが、一体化した場合、その強さはまさに規格外だった。

「ぐっ、なぜだ。」

「どうして、私に攻撃が届く？」

「そんな事はどうだって良い。」

「さっさと、消えろ」

そう言いながら、パトレン1号はドン・アルマゲに向けて、銃弾を放つ。

それと同時にルパンレットも同じように銃口を向ける。

だが

「舐めるなよ!!」

その言葉と共にドン・アルマゲは再びエネルギーを発する。

それは、かつて宇宙全体を支配する程のエネルギーであり、召喚された事によって、それを再現していた。

だが

「だったら、奪わせて貰うぜ」

「なっ」

パトレン1号の一言と共に、そのエネルギーは奪われる。

奪う事で、最強の姿へと変わったドン・アルマゲ

それが、反対に奪われるという皮肉な結果だった。

「決めろ、怪盗」「分かっているよ。」

同時にルパンレッドは、パトレナー号から受け取ったエネルギーと共にVSチエンジャーで魔方阵を描く。

そこから現れたのは、全身に青いボディスーツを着たような姿で、手足などに岩のような硬質パーツを纏うセイメンコンゴウ。

赤く、燃え上がる太陽を思わせる身体を持つアポロ。

月の女神を思わせるアルテミス。

無数の棺を担ぎ、細い剣を手を持つ死神、タナトス。

その外見は黒い長ランに白ハチマキを締め、長得物を携えたまさに「番長」を思わせるイザナギ。

そして、ルパンレッドと同じ、ルパンの名を持つ存在、アルセーヌ。

ルパンレッドの持つペルソナ能力を、パトレナー号の強奪によつて手に入れた巨大なエネルギーを元に召喚した6体のペルソナ。

「さあ、サバトの始まりだ!!」

同時に6体のペルソナに合わせるように、ルパパトメンバーが、ドン・アルマゲに向

けて総攻撃する。

その威力に、ドン・アルマゲは

「このっドン・アルマゲがあ!!」

叫び声と共に、爆散する。

「永遠にアドウ」「任務完了!」

その二人の言葉と共に、ルパパトのメンバー達が消えた。

「凄い、これがゼンリヨクゼンカイキャノンの力」

その光景を見ていたバイオンは眩く。

「おらおらあ、どんどん行くぞ!!」

そうしている間にも、次々と襲い掛かる敵に対して、俺はさらにゼンリヨクゼンカイキャノンで次々と召喚していく。

その母、強し

「さつき、何が起きたの？」

そう言いながら、ファリーナは目の前の敵を倒しながら、先程召喚されたルパンレット達の様子に疑問に思う。

「ううん、やっぱり壊れているのを、無理矢理使ったからかな。

本調子じゃないな」

「そんなの、使って大丈夫なのか」

そう、ゼンリョクゼンカイキャノンの不備に疑問に思いながら言う。

「けど、これ程頼れる武器はないからな」

そうしている間にも、介人達の前に現れたのは、2人の幹部だった。

緑色の体色で、肩に機械状の突起がある。

頭部に2本の異なる長さの角とコード状の髪が生えている女性幹部、インサーン。

ガンマンを思わせる機械の女性幹部であり、2丁拳銃を手にしているエスケイプ・エボルブが構える。

「あれが奪われたようね。」

丁度良いわ、実験の為に、それを頂くわ」

「良い物なら、それで良いわ」

「だったら、次は！」

その言葉と共にゼンリヨクゼンカイキャノンを回しながら、再び引き金を引く。

【越えろ！転生者。パワー！】

その音声と出てきたのは、新たに出てきた戦隊。

現れたのはジユウオウイーグル、ジユウオウシャーク、ジユウオウタイガーの3人。

そして、キラメイイエローとキラメイピンクの2人だった。

だが、それはまさに異常な光景だった。

その理由は明白だった。

「腹、減った」

「もう、動けません」

「ふっ二人共、しっかりしてよお」

「おいおい、この調子で大丈夫なのかよ」

「えっと、どうすれば」

それは腹を空かせた事によって、倒れているジユウオウイーグル。

そして、それと同じように倒れているジユウオウシャーク。

そんな2人を起こすように、他のメンバーは起こそうとしていた。

「おっお父さんにお母さん!!」

何をしているんですか!?!」

そう、フラグちゃんは慌てて寄り添う。

「おっお父さんに、お母さん!?!」

その事に困惑するパトーラ。

「ああ、あの2人はフラグちゃんの両親なんだ」

「あっフラグちゃんもいたの」

「まっママ!!」

そうしていると、フラグちゃんが今度、目を向けたのはジュウオウタイガーだった。

「まっママ!?!」

「どういう事!?!」

「俺も分からん!!」

ジュウオウタイガーに対するママ発言に対して、すぐにパトーラ達が介人に聞くが、それは本当に初耳だった介人も目を見開く。

「その、ジュウオウタイガーであるクリスさんは、私が小さい頃に遊んで貰って。

だから、私、クリスさんのような素敵なレディを目指しているのだ!!」

「ああ」

その言葉に介人は、ジユウオウタイガーの言葉使いがどこかフラグちゃんに似ている事に納得する。

「おい、ジユウオウイーグル!!」

お前、こんな美人二人と結婚しているって、どういう事なんだよお!!」

「五月蠅い、今、腹が減って、響いているんだよ」

その言葉を聞いて、誰よりも怒り狂ったのは、仲間であるはずのキラメイイエローだった。

「俺はな、女の子と仲良くなる為に頑張っていたのに、お前はいつも貧乏貧乏と言って、なにハーレムを気取っているんだよ!!」

その言葉には、誰もが同情した。

しかし、そんな事を言っている間にも、インサーンはゼンリヨクゼンカイキャノンを狙っていた。

それに気づいたのは、キラメイピンクだけだった。

すぐさまキラメイショットを構えて撃つ。

「あの、皆さん、もう、敵が迫っていますよ!」

「えっ、そっそうですね!

その、フラグちゃん、二人をお願いできる!!」

「はっはい!!」

「キラメイイエローも、早く」

「まだ、言い足りない事が、ああもう!!」

そうして、ジウオウタイガーとキラメイイエローはすぐにインサーンとエスケイプ・エボルブに戦いを挑む。エスケイプは両手から二丁拳銃を放つ。

それに対してキラメイイエローは、キラメイソードで受け止めた。

それと共にキラメイイエローはそのまま構える。

「雷の呼吸、壱ノ型——」

キラメイイエローが構えると同時に、ジウオウタイガーとキラメイピンクも並び立つ。

「霹靂一閃」

キラメイイエローは雷のようなエフェクトと共にインサーンとエスケイプ・エボルブに向けて放つ。

同時にジウオウタイガーとキラメイピンクも駆け出す。

「へえなかなかやるようね」

「けど、この程度で倒せると思ったら大間違いよ」

エスケイプとインサーンはそれぞれに武器を構える。だが、そんな時だった。

突然として、巨大なビームが放たれた。

それを見た一同は驚く。

「これは」

「私の技術を彼女を改造したわ」

「なかなか良い物でしょ」

それを見ながら、介人達は悩む。

「どうする、このままじゃ」

「ならば、これを飲め」

そう言いながら、Jが突然現れ、懐から缶をジュウオウイーグルとジュウオウシャークに渡す。

「これは、飲み物か」

「いただきます」

そう言いながら、ジュウオウイーグルとジュウオウシャークはそのまま受け取ると、飲み始めた。

「Jさん、それは一体」

「エネトロンだ!!」

「・・・エネトロンって、ええ!!」

「どうしたの、フラグちゃん。」

エネトロンって、なんなの？」

「えつと、その、簡単に言えば、電気の代わりにもなる万能のエネルギーで、おそらく口ポットやキカイノイドは問題ないと思いますけど」

「えつ、それって、人間が飲んでも」

「はああああああ!!」

「力が、湧き上がってきたああああ!!」

「ええええ!!」

エネトロンを飲んだ二人は、まさか立ち上がった。

そのあまりにの気迫に、周りにいたメンバー達が吹き飛ばされていく。

「本能覚醒!!」【ホエール!】

それと共にジュウオウイーグルはホエールチェンジガンを手にも、その姿をジュウオウホエールへと変わる。

「えつ、どういう状況、これ」

「さつさあ、というよりも、エネトロンを飲んで、なんで平気なんですか?」

「えっと、その、私達はトリコの食材を色々食べているから、並大抵の物は食べても、平気なんです」

「そつそういう理由に」

その事に困惑するジウオウタイガー達を余所に、ジウオウホエールはそのままホエールチェンジガンを構える。

「お前達、こつちに来い、一気に決める！」

「えっと、よく分からないけど、やるしかないようだね」

その言葉と共に全員がそのまま集まる。

同時にホエールチェンジガンを中心に、ジウオウタイガーのイチイバル、キラメイピンクの武器であるクロスボウ、そしてキラメイイエローのキラメイソードがセツトされる。

それによって、巨大な弩へと変わる。

同時にジウオウシャークが溢れ出る力をキラメイソードに注ぎ込む。

「神話に伝わりし白き弓よ、その矢で敵を射貫け！癒やしの桃色の光よ、その光で我らを癒やせ！！閃光の黄色よ、全てを置き去りに駆け抜ける！！陸海空を支配し赤き死神が全てを束ねし時！！我が爆裂の牙が、全ての敵を砕け散る！！今こそ目覚めの時、全て敵を吹き飛ばせ！！！」

そのジユウオウシャークの詠唱が終わると共に、巨大で強大なエネルギーが凝縮されていく。

それを見て、一同は唾然としていた。

「「「「エクスプロージョン!!!」」」」

その叫び声と共にインサン達に向けて、放たれた。

「エスケイプ、はや」

そう彼女達と言う前に、その攻撃に、全てを包み込む。

それによって、眼前にいた全ての敵を消し飛ばした。

「ふう、快・感!!」

そのジユウオウシャークの言葉と共に、彼らは消えていった。

「……あの、フラグちゃん」

「……ありがとう、ママ、お父さん。」

私達は進みます!! さあ、行きましよう!!!」

「全力で、なかつた事にしようとしていますよ、この人」

「まあ、そう言うなよ。」

とにかく、全力全開で行くぜ!!!」

その言葉と共に介人達はまたイジルデ達に向かって、走り出す。

目指すは、イジルデがいるだろう、場所。
だが

「おっお前ら、色々は無茶苦茶だあ!!」

彼らは知らなかった。

イジルデがいると思っていた場所に向かう道中で、ジユウオウジャー達の攻撃によつてできた被害によつて、地面にイジルデが瓦礫に埋まっていた事を。

そして、それを彼らが踏んでいた事を。

それに気づいたのは、数分後であった。

ついに揃った、ゼンカイジャー!

「ようやく見つけぞ、イジルデ!!」

その叫び声と共に介人達は睨み付ける。

そこには、既にボロボロとなっているイジルデがいた。

「というよりも、なんでボロボロなんだ」

「さあ?」

「お前らのせいだろ!!」

こうなったら!!」

その言葉と共にイジルデはその場で地面を叩く。

同時に、地面から現れたのは

「なっ」

「嘘だろ!!」

そこに立っていたのは、4つの人影だった。

その容姿は、介人達にとっては見覚えがあり、驚きを隠せなかった。

「あれって」

「ぶつちやけ、俺達じゃないか!!」

そこにいたのはジユラン、ガオン、ブルーン、マジヌの4人。

それもゼンカイジャーへと変身している姿だった。

だが、その4人は全員が、その身体を全身黒く染まっていた。

「そいつらは」

「吾輩が作り出したブラックゼンカイジャーだ。

本当はそこにいる奴らを攫って、お前達に嫌がらせするつもりだったが、仕方ない」

その言葉と共に介人達に向けて、その武器を構えるブラックゼンカイジャー。

同時に生き残っていた敵も自然と集まり始める。

「そんな、偽物とはいえ、ジユランさん達と戦うなんて」

「どうすれば」

「そう言いながら、バイオン達は戸惑う中で

「だったら、乗っ取ったら?」

「そう、悩んでいるとナビイの言葉に、介人は

「乗っ取る。」

「あつ、その手があつたか、皆!!」

その言葉と共に、介人が取り出したのは、一つのセンチギアだった。

【4バーン！キュウレンジャー!!】

そのまま介人はセンタイギアをギアトリンガーに装填し、そのまま回す。

同時に引き金を引くと、そのままキュウレンジャー達の幻影が現れ、そのままSDになっっているジュラン達に向かって吸い込まれる。

「何をしているだ?」

疑問に思うイジルデを余所に、介人は笑みを浮かべていた。

「今に分かるさ。」

それじゃ、理乃!」

「了解、お兄」

そう言い、理乃もまたセンタイギアを取り出し、そのままギアダリンガーに装填する。

【44バーン！キラメイジャー!】

その音声と共に理乃の前に現れたのは、キラメイジャーと戦った敵幹部の1人であるヨドンナ。

そのヨドンナの武器である鞭を手に、そのままブラックゼンカイジャー達を巻き付け、そのまま引き寄せる。

「なつなにをしているんだ、お前達は」

そう、首を傾げるイジルデ。

だが

「こういう事」

そう、なんとブラックゼンカイジャー達はなんとイジルデ達の方へと向く。

それと共にブラックゼンカイジャーの色は、元々のジユラン達へと変わっていた。

「どつどつという事なんだ!?!」

「さつき使ったキュウレンジャーギアで、小さくしたジユラン達をそのままそっちのブラックゼンカイジャー達に乗って貰っている」

「それで、そのまま操った訳」

「はっはあ、ハツキング対策とは完璧なはずなのに!!」

「私達のコピーならば、結構身体の構造も分かれますからね」

「というよりも、腰痛している所まで真似るなよな!!」

そう言いながら、そのまま構える。

「それじゃ、焼き肉版で、全力全開だ!!」

「焼き肉番?」

そう介人の言葉に疑問に思っていると

「カルビのパワー!ゼンカイザー!!」

「えっ」

「ロースのパワー!ゼンカイジュラン!」

「焼き肉って、もしかして」

「塩タンのパワー!ゼンカイガオーン!!」

「焼き肉で、名乗りを」

「ハラミのパワー!ゼンカイマジヌ!!」

「ホルモンのパワー!ゼンカイブルーン!!」

そう、5人まで名乗る。

そのカオスな状況に、残りの4人は困惑するが

「チヨレギサラダのパワー!ツーカイザー!!」

「ナムルのパワー!ソーカイザー!」

「えっと、こうなったら!!」

冷麺のパワー!ゼンカイボイジャー!」

「もう巫山戯すぎるけど、やるしかない!!」

「ビビンバのパワー!ゼンカイファリーナ!!」

「塩キャベツのパワー!ゼンカイパトローラ!!」

「キムチのパワー!ゼンカイバイオン!!」

次々と名乗っていくと共に、その背景には焼き肉のメニューが次々と出て行く。

『11人揃って！機界戦隊ゼンカイジャー!!!』

「これって、馬鹿にされない」

そう言いながら、パトローラは思わず眩いてしまう。

「くそつ、どこの世界でも、やはりゼンカイジャーはゼンカイジャーだったか!!」

「これ、デフォルトなの?!」

そのイジルデの言葉に驚きを隠せなかった。

「こうなったら、やるしかない!」

行けえ、お前達!!」

その言葉と共に、走り出す。

11人揃ったゼンカイジャー達。

各々が持つ固有武器で、襲い掛かる敵に向けて、対抗していく。

ゼンカイジャーに対して、その敵の数は多くいた。

だが

「ボイジャー、いっちょよ見せようぜ、俺達のコンビネーション!」

「ええ、先輩!!」

ジュランが目の前に迫る敵の壁を、そのジュランシールドで押さえつける。

その間にボイジャーは手に持ったボイジャーキャノンで一掃する。

「ガオーン! 私について来てよ!!」

「ああ、もうフアリーナは冷静に戦ってよねえ!!」

その言葉と共にビーストパワーで、縦横無尽に、敵の攻撃を掻い潜りながら、その牙で次々と刈り取っていく。

「それじゃ、パトローラさん!! 又又マジュー!!」

「うわっ、この感じは、ひゃあ!?!」

パトローラにマジューが魔法をかけた事によつて、身体を強制的に動かされる。

それはまるでダンスのような動きであり、それに合わせて攻撃を放つ。

だが、その攻撃に怯むことなく、敵はその攻撃を放ってくる。

「うわああ目が回りますっ、うっ」

「バイオンさん、ここで吐かないでくださいよ!?!」

そうして、ブルーンが上半身を回転させながら、攻撃を仕掛けるが、その様子を見ていたバイオンが思わず吐きそうになる。

「理乃、一気に決めますよ!!」

「勿論! W海賊パワーを見せますよ!!」

【全速前進! 回せ回せ! いっぱい! ツーカイに、弩ツキューン!!】

それと共にギアダリンガーを同時に構えた2人はギアダリンガーを振るい、そこから

斬撃と銃撃が一体化したような衝撃波を放つ。

それにより、残ったのはイジルデを含めて、シュバルツ将軍、ガルザなどの幹部だった。

「ほう、なかなかやるようだな」

「さて、どうするつもりだ」

「くそっこうなったら。」

とっておきだあ!!」

その言葉と共に敵幹部達の身体が徐々に変化する。

「なっなんだこれはっ」

「貴様達よ、吾輩の手となれ！足となれ!!それがお前達の役目だからな!!!」

「なっなにをっ」「貴様あ!!」

敵幹部達の、その言葉と共に、イジルデの身体が徐々に変わっていく。

それはまさに、イジルデ自身が王になったと思わせる姿であり、彼らを踏み台にして、その姿へと変わる。

「これこそ、吾輩の姿！

イジルデウスだ」

その言葉と共にイジデウスは、その身体から、重火器を召喚し、そのまま放っていく。

そのあまりにも高い威力に、その場にいた全員が吹き飛ばされていく。

「なっイジルデ、とんでもないのを隠していやがって」

「どうするのっ」

「こうなったら、ゼンリヨクゼンカイキャノンでつてんっ?」

そうしていると、介人はポケットから何かがあるのに気づく。

気になり、それを見ると、これまで見たことのないセンチアギアだった。

「よく分からないけど、これを使ってみるか!!」

その言葉と共に俺はその手に持ったこれまで見た事のないギアをそのままギアトリンガーに装填する。

【46バン! ドンブラザーズ!!】

鳴り響く音と共に、目の前に現れたのは、これまで見たことのないスーパー戦隊。

その影はそのまま俺を通り過ぎると共に、俺の身体に変化が起きる。

【ロボタロウ!!】

「んっ、あれっ、おお!!」

見てみると、これまでのゼンカイザーの姿をベースにしながらも、背中にはゼンリヨクイーグルを思わせるバックパックがあった。

「おお、俺がロボットか、面白い!!」

これまでのパワーアップ形態とは違う、完全なロボット化。それに興奮を隠せなかった。

「その程度の変化で何ができるんだ!!」

その言葉と共にイジルデウスはこちらに向けて、無数のビームを放つ。

周りは爆風が起きる。

しかし、爆風を飛び出し、空へと飛ぶ。

「はっはあ!?!」

「介人が、飛行機になっちゃたっ!?!」

そう、俺の身体はゼンリョクイーグルへと変形する。

そのまま、襲い掛かるイジルデウスの攻撃を避けながら、そのまま手足を生え、ゼンリョクイーグルから手脚が生えたような、独特の形態になる。

そして、手に持ったギアトリンガーを真っ直ぐとイジルデウスに向けて放っていく。

「うわっぐわあつ、なんだ、その無茶苦茶な戦法はっ」

「もつと、ド派手に!」

「ボイジャー! バイオン!」

「えっ、何を」「了解しました?」

困惑しているのを余所に

「ああ、ほら、これを使ってください」

「こつこれ、どういう事?」

よく分からないファリーナにあるセンタイギアを渡すエマ。

困惑するファリーナはそのまま、そのセンタイギアを使用する。

「40バーン! ジュウオウジャー!」

その音声と共に、俺達の前にジュウオウジャー達の幻影が合わさる。

そして、俺、ボイジャー、バイオンはそのまま横一列に合体していく。

「チエンジツ! ゼンリョクワンツ!!」

「えっええ、介人さん、それはっ」

そうしている間にも、俺達はそのまま三人は合体し、普段よりも大きなゼンカイジャーへと変わる。

「さあ、行くぜ、ゼンカイジャー! ビーム!!!」

そのまま腹部から発射する必殺光線ゼンカイジャービームを放つ。

「なっなんなんだ、こいつらっ!」

吾輩の知っているゼンカイジャーよりも、無茶苦茶で「次だ、ジュラン! ガオーン! ブルーン! マジニュー! 合体だあ」人の話を最後まで聞けえ!!」

同時に合体を解除した介人はそのまま降りる。

「今こそ、全員の力を合わせる時だ!!!」

「「「おう」」」

「ジュランさん達、完全に追いついているけど」

そうしている間にも、ジュラン達のその身体は再び変形していく。

ジュランとガオーンの2体はそのまま介人の腕。パーツになるように変形、それに合わせるようにブルーンは、脚。パーツへ、マジュー又は背中へと装着され、バックパックになっているゼンリヨクイーグルは、そのまま胴体に。

そうした合体が行われ、同時に介人の頭に新たな兜となる。

「全力合体超人！ゼンリヨクゼンカイオー!!」

その叫び声と共にジュラン達の武器。パーツが合わさったゼンリヨクゼンカイソードを構える。

「それは、忌々しいゼンリヨクゼンカイオーのっ」

「全力でチャージ!!」

その言葉と共にゼンリヨクゼンカイソードを掲げる。

それと共に、ゼンリヨクゼンカイザーの身体は黄金に輝きながら、そのまま構える。

「「「っ」っはっ!!さすがにやば」

「逃がすと思っっているか!!」

その言葉と共に、ゼンカイボーイジャー達が、イジデウスの行く道を阻む。

「じゃっ邪魔を」「ゼンリョクセイバーエンド!!!」ぎゃああああ!!!」

そうイジデウスは、そのまま真つ二つに切り裂かれる。

「こっこうなったら、ハカイジユウオー、起動!ポチつとな」
「ポチ?」

そう、イジデウスが最後の絶叫と共に何かボタンを押す。

「何を、なっ」

その言葉と共に現れたのは、巨大な機械のドラゴンだった。

燃え尽きろ、その戦い

「全力全開だあ!!」

その介人の言葉を合図にジユラン達は、そのまま巨大化する。

同時にそのまま各々の合体相手と合体していく。

「完成!　ゼンカイオージュラガオーン!」

「完成!　ゼンカイオーブルマジン!」

「完成!　ゼンカイオーボイオン!」

「完成!　ゼンカイオーパトリナー!」

それと共に誕生する4体のゼンカイオー。

それと合わせるように空から暗雲から現れたクロコダイオー。

理乃はそれに合わせるように、懐から取り出したセントアイギアを構える。

「それじゃ、出番だよ!」

その言葉と共に理乃の所持するセントアイギアは2体のSDであるアヴィとビヤッコとなり、そのままクロコダイオーに向かう。

ビヤッコはそのままクロコダイオーの口の中へと吸い込まれ、その姿を変える。

胴体はトラを思わせる顔が装着され、その姿はまるでウォンタイガーを思わせる姿だった。「完成！ ツーカイオービャッコ!!」

その雄叫び声と共に、アヴィが変形した槍型武器を構える。

「5体合わせて、ゼンカイジャー!!」

「ここで、名乗っている場合か!？」

来るぞ!!」

その言葉と共にハカイジュウオーはその両肩から無数のビームがゼンカイオー達に襲い掛かる。

「合わせろ!」

「ああ!!」

そのビームが出てくると同時にジュラガオンとポイオンはその手に持つ盾を前に出して、襲い掛かるビームを受け止める。

威力は高く、受け止めた2体のゼンカイオーはその攻撃を受け止めるのに必死だった。

しかし、そのハカイジュウオーの意識は完全に2体へと向けていた。

その後ろにいたブルマジンとパトリーナはその隙に宙に飛び、各々の武器を真つ直ぐとハカイジュウオーに向けて放った。

「はあ!!」

「そらそらあ!!」

2体の武器から放たれるビームがハカイジユウオーの火花を散らす。

しかし、ハカイジユウオーはその背中にあるジェット機から炎を灯して、空を飛ぶ2体に攻撃を仕掛ける。

「なっ、空まで飛べるのかよ」

「きやあ?!」

空を飛ぶ2体はそのままハカイジユウオーによって叩き潰される。

叩き落とされた2体に対して、追撃を行うようにハカイジユウオーは再び両肩にあるビームをゼンカイオーに向けて放とうとした。

「ほわちやあ!!」

再び攻撃を仕掛けようとしたハカイジユウオーに向けて、ツーカーイオービャッコが攻撃を仕掛ける。

素早い、中国拳法を思わせる動きと、ロボットならではの人間では不可能な稼働。

それによって放たれる攻撃は次々とハカイジユウオーに向けて放っていく。

やがて、地上へと辿り着くと同時にツーカーイオーはそのまま身体を回転する。

それは先程までのビャッコが中心だったツーカーイオーから、アヴィが中心になった

ツークイオーへと変わる。

「ツークイオーR!」

それと共に両足にある歯車が回転し、そのままハカイジュウオーに向かって行く。

残像を残しながら、ハカイジュウオーへと次々と攻撃を仕掛けていく。

その動きを見破る事が難しく、ハカイジュウオーは周りを見つめる。

「俺達もどンドン行くぜ!!」

「ああ!!」

その残像に入るように、ゼンカイオー達が交わるように攻撃を仕掛けていく。

初めての全員での攻撃。

その連携は凄まじく、ハカイジュウオーを着々と追い詰めていた。

だが

「キシヤアアアアアア!!」

「なっうわああ?!」

それと共にハカイジュウオーの背中の翼が巨大化し、無数の光線がゼンカイオー達に襲い掛かる。

「ぐっ、これはっ」

「マジでやべえよ!!」

それと共に、ゼンカイオー達は火花を散らす。

既に身体はボロボロの状態になっており、危機的状況だった。

「どうする、このままじゃ」

「こうなったら、全力で、こいつに全てをかける」

そう言い、ボロボロの状態のゼンリヨクゼンカイキャノンを取り出す。

「そういう事か。」

「だったら、ここは、お前ら」

「ああ」

「了解です!!」

その言葉と共に、ジユラン達4人はそのままボイオン達の前に立つ。

「介人、今のうちに!!」

「っ悪い!」

行くぞ、4人共!!」

その言葉と共に介人は手に持ったゼンリヨクゼンカイキャノンはそのままゼンリヨクイーグルへと変形し、そのまま宙へと飛ぶ。

それを見たハカイジユウオーはそのままゼンリヨクイーグルに攻撃を仕掛けようとしたが、ジユラン達が攻撃受け止める。

「先輩っ」

「良いから、やれっ!!」

ジュランの言葉を聞きながらも、そのまま合体していく。

ボイジャールとバイオンは腕パーツへと変形し、ゼンリヨクイーグルに装着する。

同時にファリーナとパトローラもまた脚パーツとなって装着される。

背中にはパトローラのジェット機が装着される。

そして、最後に各々の武器が分離し、その手には巨大なハンマー型武器へと変わる。

「ゼンツッ! カイツ!! オッー!!!」

その雄叫びと共に新たに誕生したゼンカイオー。

新たなゼンカイジャーのメンバーである4人の特徴が合わさった事によって、その身はゼンリヨクゼンカイオーに比べれば少し小さくなっていた。

だが、相対するハカイジュウオーと比べれても巨大であり、さらにゼンリヨクゼンカイオーよりもその鎧は強固だと思わせる。

そのゼンカイオーの名は

「フルパワーゼンカイオー!!!」

フルパワーゼンカイオーの右前腕部を高速回転させる。

【極める ファイティングパワー】

その音声か鳴り響くと共に、ギャラクシーロボとゲキトージャーの幻影が現れる。その幻影達が次々とハカイジユウオーに拳による攻撃を行いながら

「ゼンリョクマグナム!!」

エネルギーとなった拳を真っ直ぐとハカイジユウオーに向けて放たれた。

ロケットパンチのように飛ばされたその拳はそのままハカイジユウオーの右肩パーツを破壊する。

だが、もう片方の左肩パーツからビームを再び放つ。

しかし、フルパワーゼンカイオーは左腕を前に掲げると共に

【爆発 サイエンスパワー!】

鳴り響く音と共に、タイムロボαの幻影が現れ、同時にフルパワーゼンカイオーと共に盾を構える。

すると、襲い掛かるビームをそのまま吸い込み、ハカイジユウオーの左肩パーツを破壊する。

「さあ、とどめ全開だ!!」

その言葉と共に、その手に持ったハンマー、フルパワーゼンカイハンマーを構える。

「ゼンカイジャー・フルパワーファイブクラッシュユ!!」

同時にフルパワーゼンカイハンマーはそのままエネルギーを纏い、巨大化する。

その巨大化したフルパワーゼンカイハンマーを真っ直ぐとハカイジュウオーに向かかって、振り下ろす。

「がああああ!!!」

振り下ろされた一撃を受け、ハカイジュウオーはそのまま爆散する。

「ふう、よっしやあ」

そう、そのまま合体が解除された。

「先輩っ」

それと共に戦いを終え、ボロボロになっているジュラン達がボイジャー達の前にあった。

「やっつと、一緒に戦えると思ったのに」

「もう息が」

そこにいたジュラン達には目に光は宿っていなかった。

「おーい、お前らも焼き肉食うか」

そんなジュラン達を余所に介人は特に気にした様子もなく、ボイジャー達を焼き肉に誘う。

「介人、先輩達の姿を見ても、何も」

「いや、俺達、普通に無事だから」

「あっ」

そこには普通にSDの姿であるジュラン達がいた。

「僕は普通に操縦していたからね」

「ぎりぎりです」

「だから、特に問題ないですよ」

「……ああ、そういえば」

思わず力がボイジャー達。

「けど、どうするんですか。」

「介入達が指名手配のままだと」

「それは、どうにかなるよ」

その言葉と共に、介入が取り出したのは一枚のギアだった。

【34バーン！ ゴセイジャー！】

その音声と共に現れたゴセイジャーの幻影。

その幻影は介入と一体化すると、その手にはテンソウダーがあった。

「メモリーフライカード、天装」

【イクスパンド・スカイクパワー】

同時に空には天使の羽が広がり、それは街に広がっていった。

「今のは」

「対象となる人物の特定の記憶を消す力だよ。

今回の場合は、この事件の出来事だな」

「はあ、結構便利な力なんだな」

「まあ、その分、注意は必要だけどな。

とにかく、今は焼き肉全開だあ!!」

その言葉と共に介人はその場を後にした。

「えっ、ちょ介人!!」

それと共に、彼らはその場を後にした。

「……それにしても、どうしてでしょうか」

「どうしたんですか」

そう、介人達の後についていくフラグちゃんはとある疑問を思う。

「今回の事件、最初から最後までイジルデが介人さんを追い詰める為に行ったのは分かりました。」

けど、そもそもイジルデはどうしてこの世界に。

それに、今回の戦いで協力してくれた人達は」

「それは、分かりません。」

今は、とにかく焼き肉ですよ!!」

「ああ、もう!!」

そうしている間、2人はそのまま介人達の後をついていく。